

YUN-KANG  
VOLUME VI

雲岡石窟

第六卷

PUBLICATION OF THE JIMBUN KAGAKU KENKYUSHO

# YUN-KANG

THE BUDDHIST CAVE-TEMPLES OF THE  
FIFTH CENTURY A. D. IN NORTH CHINA

DETAILED REPORT OF THE ARCHAEOLOGICAL  
SURVEY CARRIED OUT BY THE MISSION OF THE  
TŌHŌ BUNKA KENKYŪSHO 1938-45

PROFESSOR SEIICHI MIZUNO  
AND  
PROFESSOR TOSHIO NAGAIRO

VOLUME VI  
CAVE NINE  
TEXT

JIMBUN KAGAKU KENKYUSHO  
KYOTO UNIVERSITY  
MCMLI

京都大學人文科學研究所研究報告

# 雲岡石窟

西曆五世紀における中國北部  
佛教窟院の考古學的調査報告

昭和十三年—昭和二十年

東方文化研究所調査

水野清一

長廣敏雄

第六卷

第九洞本文

京都大學人文科學研究所

1951

## 例 言

本書は『雲岡石窟』全十五巻のうち、第六巻にあたり、第九洞の調査と研究とをまとめたものである。

この洞は、昭和13, 17年(1938, 42)に、もと所員羽館易氏が米田太三郎氏あるひは戌亥一郎氏を助手として寫眞を撮影し、昭和15年(1940)に主として水野が測量し、若干は小野勝年氏、岡崎卯一氏および長廣によって測量された。製圖は、はじめ澁谷和氏により、最後は高柳重雄氏によって完成された。拓本は昭和13年および14年(1938, 39)に徐立信氏が作製した。洞前の發掘は昭和13年(1938)におこなはれた。

本書の記述は著者二人の共同執筆である。英文翻譯はもっぱら本所の岩村忍教授を煩はし、その校正には同教授および日佛學館々長代理エリセーフ氏の援助をうけた。

本巻の刊行は、本所の出版費と文部省學術成果刊行費とをもととし、その後、文部省當局および京都大學の配慮によって、すくなからぬ經費をうけて達成されたものである。

以上の諸氏ならびに諸機關に心からの感謝の辭を捧げるとともに、過去十數年間の調査と研究に有形無形、さまざまの援助をあたへられた數多くの人々に對し、さらに本巻の編輯に獻身的努力をはらはれた齋藤菊太郎氏その他に對し、深甚の謝意を表したい。

1951年3月

水 野 清 一  
長 廣 敏 雄

## 目 次

例 言	.....	vii
序 章	雲岡石窟の系譜	1
第一章	第九洞外壁と前庭	13
第二章	第九洞 前室	16
	1. 前室 北壁	16
	2. 前室 東壁	22
	3. 前室 西壁	25
	4. 前室 南壁	26
	5. 前室 天井	29
第三章	第九洞 主室	30
	1. 主室 南壁	31
	2. 主室 東西壁と北壁	37
	3. 主室 天井	39
終 章	第九洞の特徴	41
圖版解説	第九洞	55

## 實 測 圖 目 次

I.	第九洞平面圖 (水野清一測, 高柳重雄製圖) . . . . .	13, 30 <sup>參照頁</sup>
II.	第九洞斷面圖 (水野清一測, 高柳重雄製圖) . . . . .	13, 30
III.	第九洞第十洞外壁正面圖 (小野勝年測, 高柳重雄製圖) . . . . .	13
IV.	第九洞前室北壁測圖 (水野清一測, 高柳重雄製圖) . . . . .	16
V.	第九洞前室南壁測圖 (水野清一測, 高柳重雄製圖) . . . . .	26
VI.	第九洞前室東壁測圖附東南柱 (水野清一測, 高柳重雄製圖) . . . . .	22
VII.	第九洞前室西壁測圖附西南柱 (水野清一測, 高柳重雄製圖) . . . . .	25
VIII.	第九洞前室天井測圖 (水野清一測, 高柳重雄製圖) . . . . .	29
IX.	第九洞拱門展開圖 (岡崎卯一測, 高柳重雄製圖) . . . . .	21
X.	第九洞明窓展開圖 (岡崎卯一測, 高柳重雄製圖) . . . . .	17, 31
XI.	第九洞主室北壁測圖 (水野清一測, 高柳重雄製圖) . . . . .	37
XII.	第九洞主室南壁測圖 (水野清一測, 高柳重雄製圖) . . . . .	31
XIII.	第九洞主室東壁測圖 (水野清一測, 高柳重雄製圖) . . . . .	37
XIV.	第九洞主室西壁測圖 (水野清一測, 高柳重雄製圖) . . . . .	37
XV.	第九洞主室天井測圖 (水野清一測, 高柳重雄製圖) . . . . .	40

# 拓 本 目 次

RUB. I	A. 八角柱々頭 (前室東柱北面) . . . . .	參照頁 26
	B. 八角柱々頭 (前室西柱北面) . . . . .	26
	C. 層柱 (前室北壁上層西柱) . . . . .	17
	D. 層柱 (前室北壁上層東柱) . . . . .	17
	E. 層柱 (前室西壁上層中央佛龕傍) . . . . .	25
	F. 樹下菩薩像 (前室東壁上層左廂) . . . . .	22
	G. 浮彫寺院 (主室南壁東部第二層) . . . . .	36
RUB. II	A. 八角柱基部裝飾 (前室西柱北面) . . . . .	26
	B. 八角柱基部裝飾 (前室東柱北面) . . . . .	26
	C. 樂天列龕 (前室北壁最上層) . . . . .	17
	D. 佛龕楣拱額 (主室南壁東部第一層) . . . . .	36
	E. 佛龕楣拱額 (主室南壁西部第二層) . . . . .	35
	F. 唐草文楣 (前室北壁門口南面) . . . . .	18
RUB. III	A. 佛龕楣拱額 (主室西壁第三層) . . . . .	37
	B. 佛龕傍柱 (前室東壁上層南柱) . . . . .	22
	C. 佛龕傍柱 (前室北壁下層西龕) . . . . .	18
	D. 唐草文帶 (前室北壁門口楣下面) . . . . .	18
	E. 佛龕傍柱 (主室南壁西部第三層東柱) . . . . .	33
	F. 柱頭 (前室北壁下層西龕西柱) . . . . .	18
	G. 柱頭 (前室北壁下層西龕東柱) . . . . .	18
	H. 柱頭 (前室北壁下層東龕西柱) . . . . .	18
	I. 柱頭 (前室北壁下層東龕東柱) . . . . .	18
	J. 唐草文帶 (前室南壁桁下) . . . . .	28
RUB. IV	A. 斗拱 (前室東壁上層) . . . . .	22
	B. 斗拱 (前室北壁門口上部) . . . . .	18
	C. 唐草文帶 (前室北壁上層西龕臺座) . . . . .	16
	D. 唐草文帶 (前室北壁上層西龕臺座) . . . . .	16
	E. 唐草文帶 (前室北壁門口北緣) . . . . .	18
	F. 唐草文帶 (前室西柱基部北西面) . . . . .	26
	G. 唐草文帶 (前室西柱基部北面) . . . . .	26
	H. 唐草文帶 (前室東端柱上部北面) . . . . .	27

	華照頁
I. 唐草文帶 (前室西柱基部北面) . . . . .	26
J. 蓮瓣文帶 (前室西壁中央帶) . . . . .	25
RUB. V A. 菩薩寶冠 (主室右脇侍) . . . . .	37
B. 菩薩寶冠 (前室東壁上層交脚像) . . . . .	22
C. 菩薩寶冠 (前室北壁下層東龕交脚像) . . . . .	18
D. 菩薩寶冠 (前室北壁下層西龕交脚像) . . . . .	18
E. 菩薩光背 (主室右脇侍) . . . . .	37
F. 蓮華文 (明窓天井) . . . . .	17
RUB. VI A. 拱端飾獸形 (前室北壁明窓西側) . . . . .	16
B. 拱端飾獸形 (前室北壁明窓東側) . . . . .	16
C. 佛龕傍柱 (前室西壁下層) . . . . .	25
D. 唐草文帶 (前室北壁門口方立上面) . . . . .	18
E. 唐草文帶 (前室北壁門口上東隅南面) . . . . .	21
F. 蓮上化生 (前室南壁西南柱上部) . . . . .	28
G. 三角形火焰 (前室東壁上層) . . . . .	22
H. 三角形火焰 (前室東壁上層) . . . . .	22
I. 三角形火焰 (前室東壁上層) . . . . .	22
J. 三角形火焰 (前室東壁上層) . . . . .	22
K. 摩尼寶珠 (門口天井) . . . . .	21
L. 蓮華文 (明窓西壁) . . . . .	17
M. 唐草文帶と欄杆 (前室東南柱天宮部北面) . . . . .	27



## 挿 圖 目 次

第一圖	アジア石窟分布圖	2
第二圖	敦煌第101洞(P. Pelliot, <i>Touen-huang</i> , Pl. CLXXIX)	3
第三圖	敦煌第103洞(P. Pelliot, <i>Touen-huang</i> , Pl. CLXXXVI)	3
第四圖	中央アジアキジイル石窟圖 a-c)畫匠洞 d,e)孔雀洞 (A. Grünwedel, <i>Altbuddhistische Kultstätten</i> , Figs. 194, 332)	4
第五圖	バアミヤアン大佛窟圖 a) 53 m. 大佛窟平面圖(Godard et Hackin, <i>Les antiquités bouddhiques de Bāmiyān</i> , Fig. 18) b) 35 m. 大佛窟平面圖(Hackin, <i>Nouvelles recherches archéologiques à Bāmiyān</i> , Fig. III)	4
第六圖	バアミヤアンB石窟群平面圖(Godard et Hackin, <i>Les antiquités bouddhiques de Bāmiyān</i> , Fig. 15)	4
第七圖	バアミヤアン坐像窟平面圖(Godard et Hackin, <i>Les antiquités bouddhiques de Bāmiyān</i> , Fig. 11)	5
第八圖	インドカアルリ塔廟窟圖(Fergusson and Burgess, <i>Cave-temples in India</i> , Pl. XI)	6
第九圖	インドコンダアネ僧房窟圖(Fergusson and Burgess, <i>Cave-temples in India</i> , Pl. VIII)	8
第十圖	インドバラアバル丘スダアマ石窟圖(A. Cunningham, <i>Archaeological Survey of India</i> , Vol. I, Pl. XIX)	11
第十一圖	雲岡五華洞平面圖	14
第十二圖	第九洞第十洞平面圖(水野清一測, 高柳重雄圖)	14
第十三圖	第九洞前室北壁樂天列龕(水野清一測, 高柳重雄圖) a) 西 部 b) 中央部 c) 東 部	15 16 17
第十四圖	第九洞前室北壁下層西龕(岡崎卯一測, 高柳重雄圖)	19
第十五圖	第九洞前室北壁西壁腰壁本生圖(長廣敏雄測, 高柳重雄圖) a) 西壁(1, 2)    b) 北壁西部(3, 4) c) 北壁東部(5)	20 21
第十六圖	第九洞前室西壁上層佛交脚像(岡崎卯一測, 高柳重雄圖)	23
第十七圖	第九洞前室西壁下層南龕(水野清一測, 高柳重雄圖)	24
第十八圖	第九洞前室東南柱中部(水野清一測, 高柳重雄圖)	26
第十九圖	第九洞前室東南柱上層定光佛立像(水野清一測, 高柳重雄圖)	27
第二十圖	第九洞前室西南柱上層(水野清一測, 高柳重雄圖)	28

第二十一圖	第九洞前室天井持送 b 侏儒(7,8) (水野清一測,高柳重雄圖) . . . . .	29
第二十二圖	第九洞前室天井略圖 . . . . .	30
第二十三圖	第九洞主室南壁明窓 (水野清一測,高柳重雄圖) . . . . .	32
第二十四圖	第九洞主室南壁拱門 (水野清一測,高柳重雄圖) . . . . .	34
第二十五圖	第九洞主室南壁東部第二層(兄弟比丘因緣圖) (水野清一測,高柳重雄圖) . . . . .	35
第二十六圖	a) 第九洞主室南壁西部第一層(鬼子母因緣圖) (水野清一測,高柳重雄圖) . . . . .	36
	b) 第九洞主室西壁第一層 (水野清一測,高柳重雄圖) . . . . .	37
第二十七圖	第九洞主室天井略圖 . . . . .	39
第二十八圖	第九洞文樣圖(1)橫帶文(a-i) . . . . .	49
第二十九圖	第九洞文樣圖(2)橫帶文(j) . . . . .	51
第三十圖	第九洞文樣圖(3)縱帶文(k-m) . . . . .	51
第三十一圖	第九洞文樣圖(4)複合唐草文(n-p) . . . . .	51
第三十二圖	第九洞文樣圖(5)蓮華文(q-t) . . . . .	52

## 序 章

# 雲岡石窟の系譜

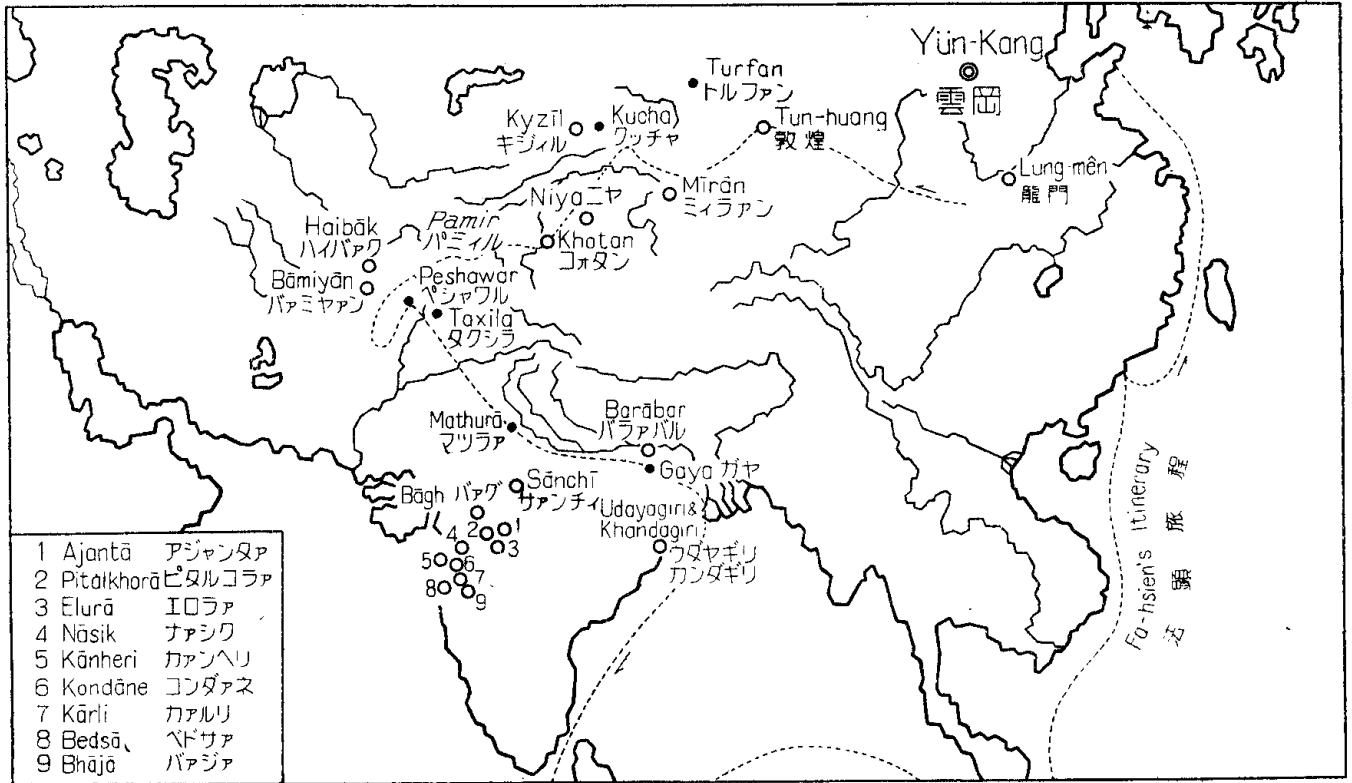
### 1

こゝに石窟といふのは石窟寺院のことである。佛教の寺院である。岩山を鑿りぬいて部屋をつくり、それに禮拜の対象を彫りつけて、禮拜の祠堂にし、あるひは修道者の私室をならべ、會同の室をまうけて修道の道場にした。かういふことは、もちろん佛教の本土、インドにはじまったことである。しかし、それがいつ、どうしてこの雲岡につたはったのか。雲岡のこれら四十いくつの石窟がつくられるまでに、どれだけの土地をへてつたはり、どれだけの變改をよぎなくされたことであらうか。あるひは、逆に、どの程度までインドのものすがたを、たもってゐるのであらうか。

雲岡の石窟が開鑿されたのは四百年代である。鮮卑族の支配した北魏の時代である。もつとくはしくいふと、文成帝の和平初年(460)にはじまって、太和十八年(494)にほゞをはり、なほ小規模なものが、ひきつゞき北魏の滅亡する(535)までつくられてゐた。したがって、これが直接の源流になったものは、やはり甘肅のはて、敦煌鳴沙山の千佛洞であつただらう。北魏の史書『魏書』卷百、釋老志には、太延五年(439)太武帝が、甘肅西端によつてゐた北凉といふ國をほろぼして、ほとんど中國の北半を統一したときのことを録して、民三萬餘戸を國都の平城、いまの大同にうつしたといひ、そのため僧侶や寺院はみな東にうつり、佛教の造營は國都平城において、ますますさかんになったといつてゐる。敦煌地方は中國の西端沙漠のなかにつきでた觸手のやうなところである。西方文化の門戸であり、中國の絹がでゝゆく門戸でもある。こゝに西來の佛教が最初につたはり、またこゝに佛教がもつとも活潑であつたことも、容易に想像されるどころである。西からの門戸、西への門戸として敦煌のもつ意義は大きく、北魏のこれを平定した意義も、また大であつたといはなければならぬ。(Fig. 1)

しかし、それでは、この敦煌の千佛洞はいつからはじまったのかといふと、これには二つの説がある。秦の建元二年(366)といふ説と、東晉の永和八年(352)といふ説とである。とにかく、三百年代なかごろの創建である。ところが、そのころの造建とみられるものが、はたして今日のこつてゐるであらうか。不幸にしてその點はわからない。たゞ現在のこる四、五百の石窟は、このとき以來

1 羽田亨「敦煌千佛洞について」(佛教美術 第四冊)1925年刊。陳萬里『西行日記』北京 1925年, p. 143 には劉宋元嘉二年(425)の題記があるといふ。

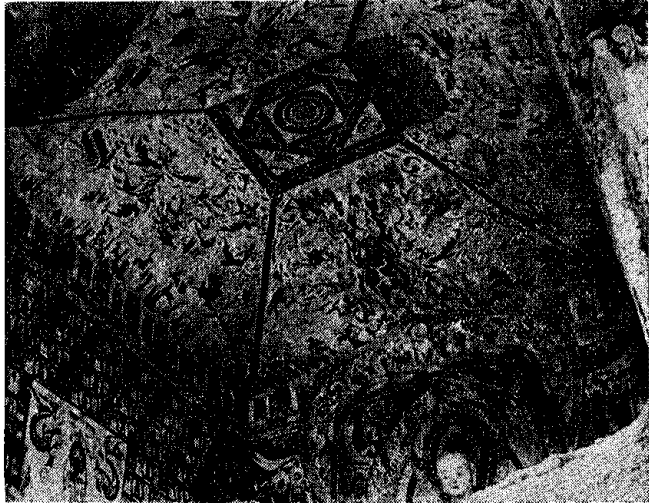


第一圖 (Fig. 1) アジア石窟分布圖

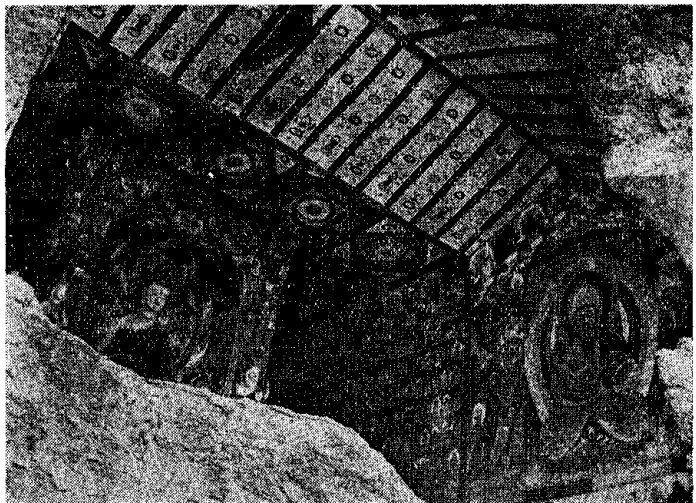
十世紀, 十一世紀にかけてつくられたものである。このうち, すくなくとも, 北魏の世までさかのぼりうるものとしては第101, 101a, 103, 110, 111, 111a, 120, 120N, 126b, 129, 135の諸洞がかぞへられる<sup>1)</sup>。これらはまづ西暦五百年前後の造構とみてよからうとおもふ。それでは雲岡の石窟よりも, かへって新しいではないかといはれるかも知れないが, なるほど, そのとほりである。けれども, これらのうちには, ふるい傳統をしめすものがあり, けっして雲岡よりその形式をうけたとはいへないものがある。だから時期の上ではおなじ, また多少おくれれても, 雲岡形式の遡源にはいろいろの手がかりをあたへてくれるのである。こゝにはあまり大きな石窟はない。たいてい方3.00—4.00 m, 大きくて6.00—7.00 m ぐらゐである。雲岡のやうに大きな尊像を, 窟内ぢかに彫りだした尊像窟はない。たゞあるのは, 龕像を中心にした塔廟窟である。さういふ意味で雲岡の第一洞, 第二洞, 第六洞, 第十一洞, 第三十九洞の塔廟窟は, たしかに敦煌千佛洞にもとづいてゐるといへる。その第103洞, 第111a洞, 第135洞は, 方柱を中心にした塔廟窟である。龕像を中心にした尊像窟は, 雲岡では第七洞, 第八洞をはじめとして, 第十二洞と第二十一洞以下である。これはもとより, 敦煌にもいくたの先蹤がみとめられる。

敦煌には雲岡第七洞から第十洞, 第十二洞のやうに, 前室と主室とをわかつた例はない。けれども天井をみると, 二つの部分からできてゐるものがある。(Fig. 3) それは結局, 前室と主室とがあるわけである。たゞこれをわかつ隔壁のないのが, 敦煌北魏窟の特色のごとくである。なぜ敦煌に隔壁がなかったのか。多分石質の粗大が, その原因でないかと想像される。前室は合掌屋根に

1 P. Pelliot, *Touen-Houang*, Tomes III, IV, V, Paris 1920, 1921.



第二圖 (Fig. 2) 敦煌第 101 洞



第三圖 (Fig. 3) 敦煌第 103 洞

なっているが、主室は折上げて、まんなか三角持送り天井になつてゐる。この點、雲岡第七一第十洞、第十二洞などの、もとづくところを暗示してゐるとおもふ。(Fig. 2)

しかし、敦煌では雲岡のやうに、岩石にちかに彫つてゐない。<sup>conglomerate</sup>礫岩の山であつたから粘土をぬり、壁面をとゝのへてから繪をかき、塑像を安置したのである。この點が敦煌とそれ以東の石窟との、もっとも大きな相違である。だから敦煌の石窟では、畫家がおもな働きをしたのに對し、雲岡では徹頭徹尾、彫刻家の活動をまたなければならなかつた。

## 2

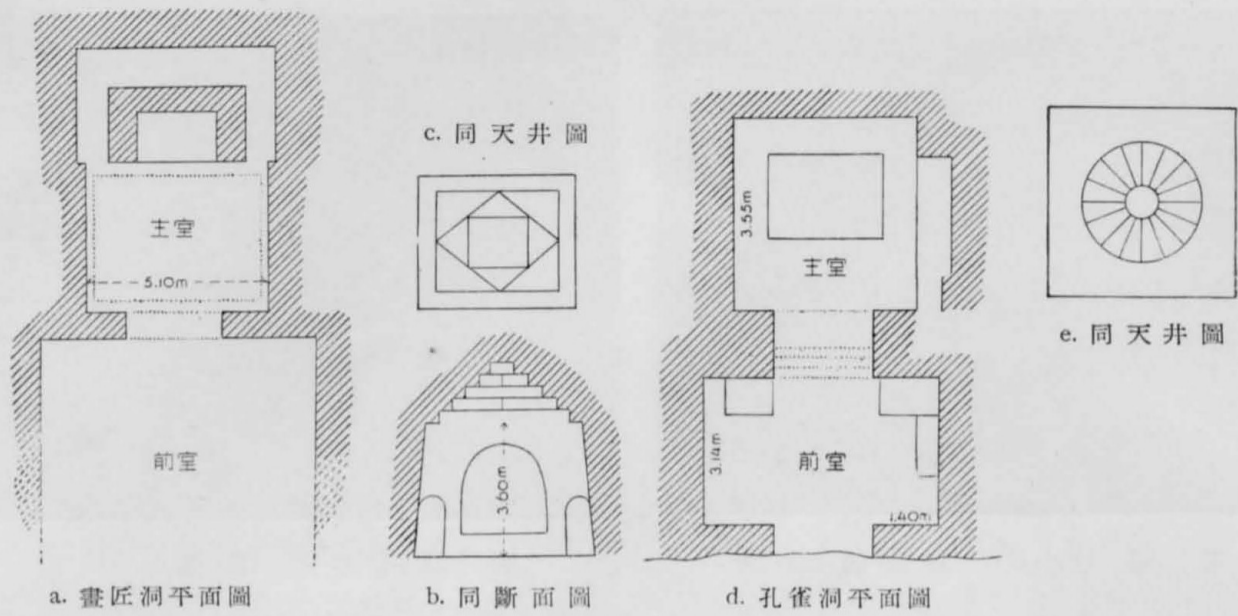
中央アジアにでると、南道にはロプ・ノオルにちかいミィラァンの廢寺、また砂にうもれてしまつたニヤの廢寺、<sup>Niya</sup>コオタンのふるい町であつたヨトカン附近の廢寺をみるが、石窟はまったくない。<sup>Khotan</sup>砂のなかによこたはる、これらの廢寺は、みな塔を中心にしたものである。塔を中心にして、そのまはりがめぐられるといふのは、當時の佛寺の基本形式であつた。このうち、ニヤの廢寺は二百年代にさかのぼり、<sup>2)</sup>ミィラァンの廢寺も二百年代、あるひは三百年代の初頭にさかのぼるから、比較的ふるい遺蹟があることになる。タクラマカン砂漠の北道、天山の南麓になると、石窟はいたるところにひらかれて、<sup>Kucha</sup>クチャ附近のキジール、<sup>Kyzil</sup>クムトラ、<sup>Qumtura</sup>キィリシュ、それからトゥルファン附近の<sup>Kirish</sup>チッカンの<sup>Tchiqqan-</sup>クルなどは、ふるい石窟である。なかでも、もっとも多く、まっさきにあげるべきものは、<sup>Kyzil</sup>キジールの<sup>köl</sup>千佛洞であらう。キジールは、ムザルト河に面した斷崖にひらかれ、石窟の數は約百七十ある。<sup>4)</sup>岩はやはり礫岩であるから、粘土で表面をとゝのへ、壁畫をかき、塑像をつくつたのである。こゝにも

1 A. Stein, *Serindia*, Oxford 1921, Vol. I; A. Stein, *Ancient Khotan*, Oxford 1907.

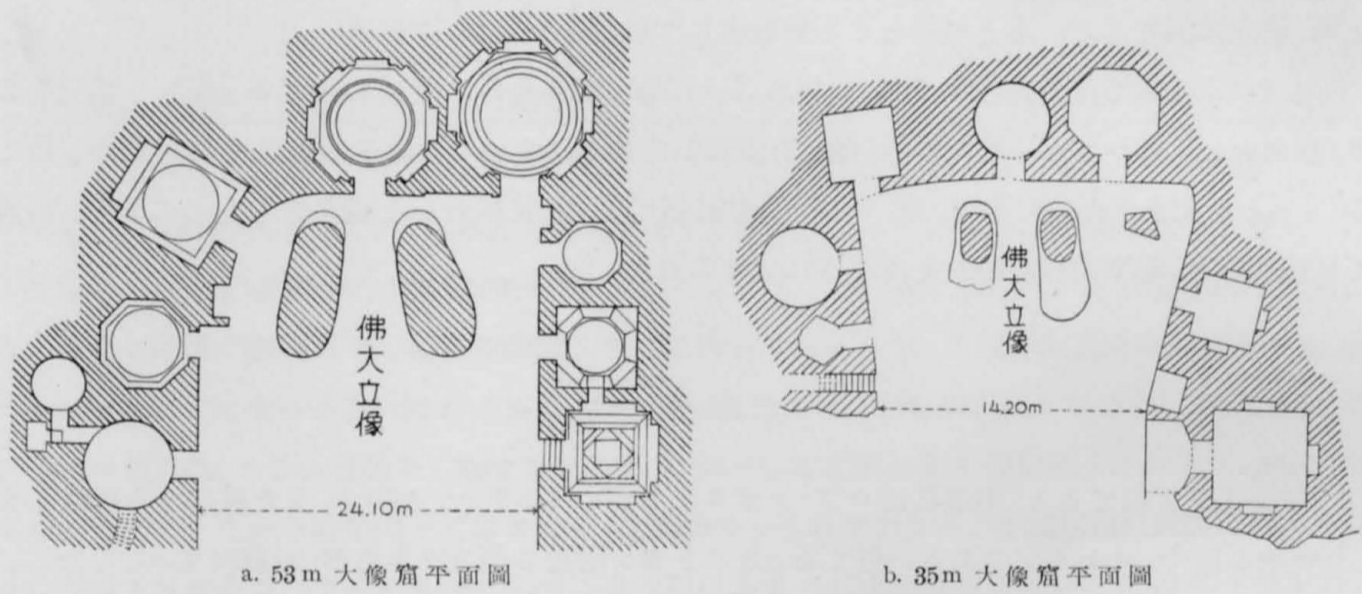
2 A. Stein, *Serindia*, Vol. I, pp. 242, 246.

3 A. Stein, *Ibid.*, Vol. I, p. 538.

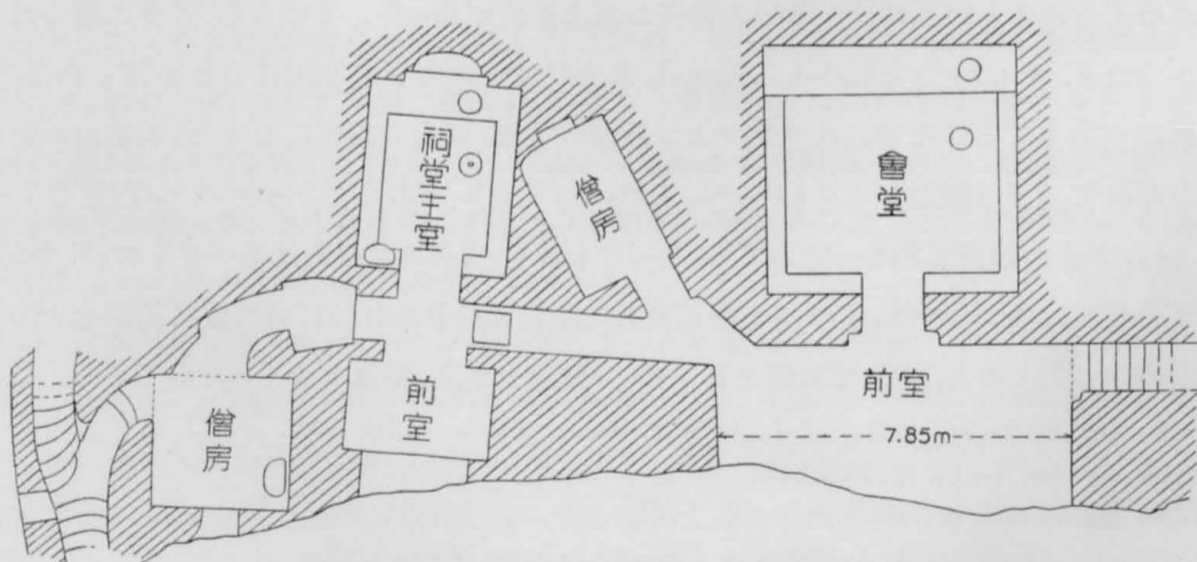
4 A. Grünwedel, *Altbuddhistische Kultstätten in Chinesisch-Turkistan*, Berlin 1912.



第四圖 (Fig. 4) 中央アジアキジイル石窟圖



第五圖 (Fig. 5) バアミヤアン大像窟平面圖

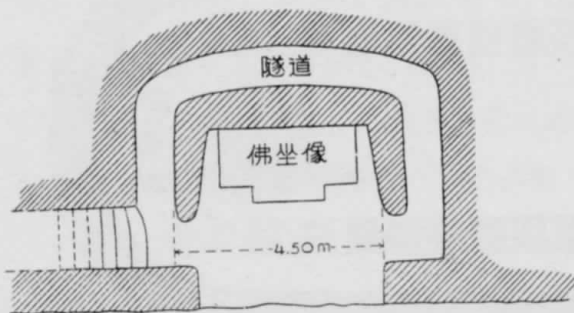


第六圖 (Fig. 6) バアミヤアンB石窟群平面圖

雲岡のやうな大像を、ぢかに彫りだした石窟はない。塔廟窟はふしぎにないが、龕像を中心にした尊像窟は、みな背後に通路をつくり、繞道のできるやうにしてある。天井は、かまぼこ天井がさかんであるが、ふるいものでは折上げ天井もあり、三角持送り天井もあり、穹窿天井もある。(Fig. 4) その點では雲岡、敦煌の先蹤ともかんがへられるし、また前室、主室の別も、初期の五百年前後といはれる孔雀洞などにはみとめられる。けれども敦煌とおなじやうに、たかだか一邊 5.00—6.00m あまりの小石窟である。

## 3

さらにパミールをこえて、むかしのガンダラの一部であったアフガニスタンにはいるとバミヤンや、ハイバククの石窟をみる。<sup>1)</sup>こゝには有名な 35.00m の大像と、53.00m の大像窟がある。これは石窟といふよりも、大龕といった方が適當であるかも知れない。石窟らしい餘裕はなく、その上前壁がないから、いはゞ吹きはなしになってゐる。しかし、ぢかに大像を彫りだしたといふこと



第七圖 (Fig. 7) バミヤン坐像窟平面圖

からは、これこそ正に雲岡大像窟の先蹤である。そして、この像は背後に通路をまうけ、繞道の禮がとれるやうにできてゐる。(Fig. 5) 坐像の石窟も三つあるが、みな背後をまはれるやうにしてある。<sup>2)</sup>(Fig. 7) この大像の年代については、まだ定説といふべきものはないが、四世紀から五、六世紀といふ年代があたへられてゐる。<sup>3)</sup>ちやうど雲岡石窟のつくられたころである。雲岡大像と、

この大像との類似は、なほその重厚な様式にも、またそのもりあがった特殊なひだにもみとめられる。われわれは、この大像とのあひだに、きはめて親密な関係のあることを想像しないわけにはいかない。

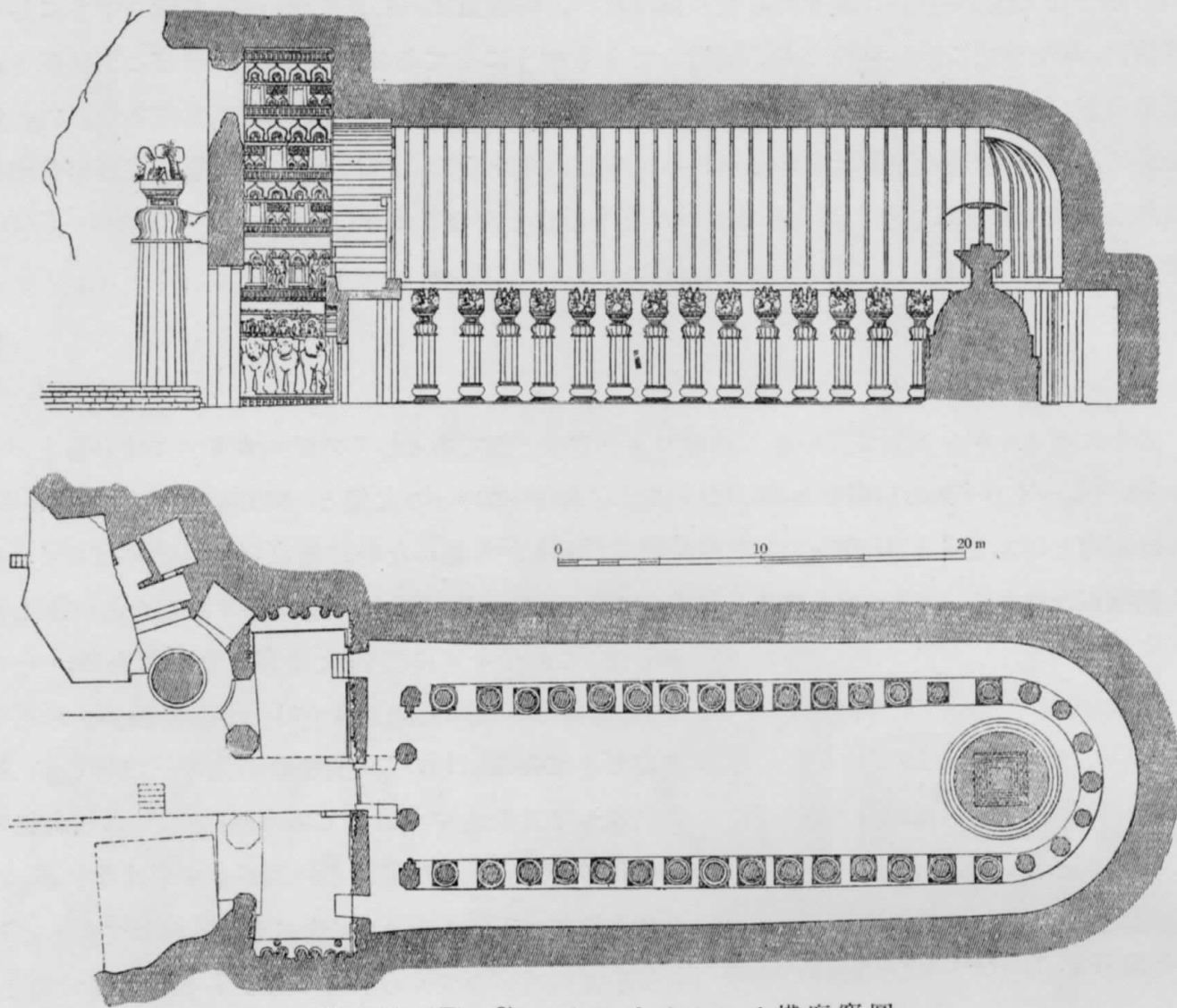
その他の小石窟は、たいてい、徑 5.00—6.00m のものである。そこには祠堂があり、會堂があり、僧房があり、それらが相あつまつて一群をなしてゐる。<sup>4)</sup>(Fig. 6) 僧房は、たいてい方 3.00m の方形平面にドゥムの天井がついてゐる。方形の平面から、圓形のドゥムにうつるところに、隅せりもちが、ついてゐる。會堂と祠堂とは徑約 4.00—5.00m、方形、八角形、圓形さまざまあり、天井はドゥムか、三角持送りかである。會堂には、まはりにベンチのやうな壇があり、祠堂には佛龕、または寶壇が

1 A. et Y. Godard et J. Hackin, *Les Antiquités bouddhiques de Bāmiyān* (Mémoires de la Délégation Archéologique Française en Afghanistan, Tome II) Paris et Bruxelles 1928, Pls. I, IX, XXIX.

2 *Ibid.*, Pls. XII, XIII, Figs. 9—11.

3 J. Hackin, *Le Site archéologique de Bāmiyān*, Paris 1934, p. 18. といふより、むしろ四、五世紀といった方が適當である。

4 A. et Y. Godard et J. Hackin, *Les Antiquités bouddhiques de Bāmiyān*, Figs. 12—18; J. Hackin, *Nouvelles Recherches archéologiques à Bāmiyān* (M.D.A.F.A., Tome III) Paris 1933, Figs. III—VIII, XI.



第八圖 (Fig. 8) インドカアルリ塔廟窟圖

ある。かういふことは、キジール以東ではみられない。キジールには僧房窟があるけれども、これは獨立したものであり、また稀なものであった。敦煌以東には全然ない。祠堂は龕像をまつるやうになってゐるのみで、繞道のための施設はない。たゞバミアン第二大像東方にG洞といふ石窟があつて、こゝには方形の塔基がある<sup>1)</sup>。だから塔廟窟もあつたわけである。石窟プランの上にはあまり類似はないが、天井の構造は折上げもあり、格天井もあり、また三角持送りもある。

さらにカイバルの峠を南におりてガンダラの本地、タキシラ、ペシャヴァルの地にはいると、こゝには石窟がない。石窟がないけれども、むかし佛教がさかえたガンダラの土地であるから、地上の寺院はたくさんあつたのである。そしてその構造をみると、だいたいインドの寺院とおなじであり、またその石窟とおなじである。だからインドの石窟の構造は、やはり地上寺院のまゝであり、そしてその構造は、また、はるかこの地方にまでおよんだことを知りうるのである。

1 J. Hackin, *Nouvelles Recherches archéologiques à Bāmiyān*, Fig. X.



それではインドの石窟はどうであらうか。これはまた、インドの西部にかたよってゐる。中部とか、東部とかになると、ごく初期のものか、ごく小規模のものがあるのみである。一應發達したものについてみると、そこには<sup>Chaitya</sup>チャイティヤ洞と、<sup>Vihāra</sup>ヴィハアラ洞との二種類があげられる。チャイティヤとは塔などの禮拜物を中心にした建造であり、ヴィハアラとは僧房のあつまりである。チャイティヤ洞は<sup>Bhājā</sup>バハチャア、<sup>Kondāne</sup>コンダアネ、<sup>Pitalkhorā</sup>ピタルコラア、<sup>Ajantā</sup>アジャンタア、<sup>Bedśā</sup>ベドサア、<sup>Nāsik</sup>ナアシク、<sup>Kārli</sup>カアルリなどにある。いまカアルリに、その例をとってみよう。大きさは37.00mに14.00m、細ながい馬蹄形のプランで、まるくなつたおくに<sup>dāgoba</sup>圓塔がつくられる。(Fig. 8) まはりに列柱があり、列柱のそとは<sup>aisle</sup>翼廊である。柱はインド式で、ベル形の柱頭に壺形の柱基がある。柱頭の上には、ひざまづいた象、馬、あるいは虎があり、雲岡における獸頭肘木の源流をおもはす。天井はまるく、かまぼこ形であるが、おくは自然に球形になつてゐる。頂上まで14.00mばかり、輪樞は木である。また圓塔の上の刹柱や、傘蓋も木であつた。洞口は三つあり、中央の口は<sup>nave</sup>内陣へ、左右の口は<sup>aisle</sup>翼廊へみちびかれる。洞口の上に、吹きはなしの大きな窓がある。これも雲岡石窟の明窓を想起せしめるものである。窓のまはりには大きな蓮瓣形の尖拱があり、インド石窟の大きな特色になつてゐる。

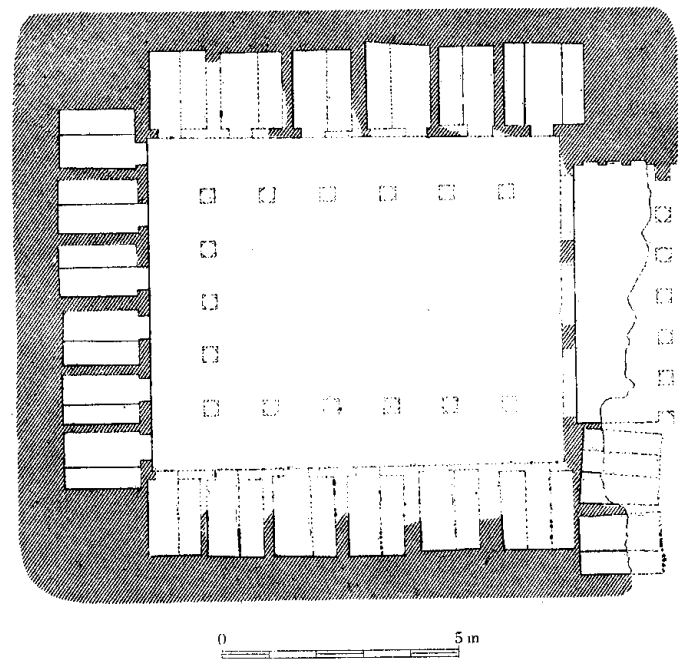
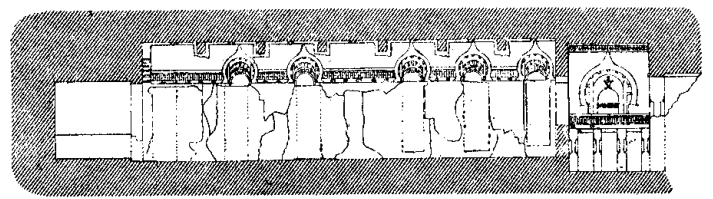
入口の前面には深さ4.50m、幅18.00mの前廊があり、高さはほゞ18.00m、前は吹きはなしで、下層は二本の八角柱——これは雲岡第九、第十洞の前面を偲ぶに足るものがある——があり、上層は四本の角柱がある。そのそとは上下二層に應じて、木造のひさしがあつたらしい。木材をさしこんだほぞ穴が、いまもなほのこつてゐる。この點、また雲岡の洞外建造物を肯定せしめる一因にもなる。この前室には、左右壁に、それぞれ正面むきの象が三頭づゝ彫つてある。そして、そのうへにも、そのしたにも欄楯の彫刻がある。象の上の佛像はあとからの追刻で、もとのものではない。それから上は四段になつてゐて、馬蹄形の門口と欄楯の意匠とが、交互にくりかへされてゐる。前室後壁では、洞口と洞口とのあひだの刻文を、けづりつたひらにし、上下欄楯のあひだに、佛や脇侍の像を彫つてゐる。これらはみな後刻である。けつして石窟開鑿當時のものではない。たゞ中央洞口のわきにある男女一對の供養者大像のみは、<sup>Kānheri</sup>カンヘリでもみられるもので、もとのものである。とにかく初期の石窟では、佛像を彫らないのが例である。

かういふ構造で、採光は主として外障壁上層の柱間よりとられ、やはらげられた光は、中央馬蹄形の大窓に集中する。そこからさらに主室にみちびかれ、中央おくの圓塔を一方から照らすの

1 J. Fergusson and J. Burgess, *The Cave Temples of India*, London 1880, Pls. XI—XIV, pp. 232—240; J. Burgess, *Report on the Buddhist Cave Temples and their Inscriptions*, (Archaeological Survey of Western India, Vol. IV) London 1883, Pl. XII.

である。おくのまるい廊下はくらく、また左右の翼廊もうすぐらい。光は密接した太い列柱のあひだから、わづかに流れこむだけである。

ヴィハアラ洞は小さい僧房の集團である。(Fig. 9) ある場合には崖に一行にならび(バジャ第13洞, ピタルコラアのヴィハアラ洞), ある場合にはかぎの手にならび(バジャ第11洞), もっとも完備した場合には, 三面にわたって僧房がひらかれ, 中央に廣間をのこすことになる(ナシク第3洞, 第8洞, アジャンタ第12洞, ベドサアのヴィハアラ洞)。地上の場合には, 四面に僧房をならべることもできるが, 石窟では三面だけになり, 他の一面は採光のために, あけておかなければならない。それで, そのあいた方の正面にはヴェランダをつくり, また列柱をならべることもなった。そのうちコンダアネのヴィハアラ洞を, こゝに例示しよう。廣間は7.00m



第九圖 (Fig. 9) インド コンダアネ僧房窟圖

の幅, 9.00mのおくゆき, 2.40mのたかさ, それにヴェランダがつく。ヴェランダ, つまり前室の左壁には, したに浮彫の柱, うへに馬蹄形のアチ, そのアチのなかに塔を彫つてある。これは創建の當時, 禮拜の対象にされたものであらう。バジャのヴィハアラ洞以外には, 浮彫像のないのがふつうである。廣間には列柱があり, 格天井になる。僧房は幅0.90m, おくゆき1.90mの小さい部屋で, 一個乃至二個のベッドが彫りのこされてゐる。戸口には馬蹄形のアチがあり, それをつらねて横ながい欄楯がある。かういふ欄楯が石窟内に, なにかバルコニのやうなものを豫想せしめる。これを一步すすめれば, このうへに奏樂の天人たちをならべることになり, またそれに龕形を附加することにもなるであらう。さうすると, それはバミヤンの樂天列であり, キジルの樂天列であり, 雲岡の樂天列龕にもなるのである。<sup>1)</sup>

要するに, これら第一期の石窟はチャイティヤ洞にしても, ヴィハアラ洞にしても, 尊像の彫つてないのが特色である。その製作された年代は, 主として西暦前百年から, 後百年のあひだ, 若干は前二百年にさかのぼり, また後二百年にくだるものがある。<sup>2)</sup>ところが, 後二百年代に入ると, ほと

1 本書, 第五卷, p.44

2 Fergusson and Burgess, *The Cave Temples of India*, pp. 182, 517.; G. Marshall, *The Monuments of Ancient India*, (Cambridge History of India, Vol. I) London 1922, pp. 636, 637.

んど石窟のつくられたものがない。やうやく三百五十年ごろになって、ふたゝび石窟の開鑿がはじまり、五百年から六百五十年にいたる最盛期を生むのである。雲岡の石窟は、ちょうど、インドで第二期の石窟開鑿が、活潑にならうとするときにあたる。このインド石窟の第二期は、石窟内に佛、菩薩像がつけられるといふことで、第一期の石窟とは大いにちがふのである。かういふ風潮が、どこからおこったのか、それは大いに問題である。けれども、とにかく、この風潮がパミヤーンの石窟をおほひ、キジルの石窟をつゝみ、敦煌、雲岡石窟にも波及したのである。雲岡でもこの第二期の風潮にのらなければ、あゝいうふうな、にぎやかな石窟にはならなかつたであらう。

チャイティヤ洞では、アジャンタ第19洞、第26洞、エロラアのヴィシュヴァカルマ洞があり、ヴィハアラ洞では、アジャンタ第1洞、第2洞、第3洞、第6洞、第7洞、第15洞、第16洞、第17洞、第20洞、第21洞、第23洞、第24洞、バグ諸洞、エロラアの諸洞がある。

第二期においても、チャイティヤ洞の構造は、まったく第一期の繼承である。たゞ違つてゐることは、尊像がきざまれるやうになつたのと、裝飾彫刻が細密になつた點のみである。たとへばアジャンタ第19洞であるが、これは洞口の左右に佛の立像がある。<sup>1)</sup> 正面蓮瓣窓の左右、かつては欄楯と蓮瓣アッチによつてかざられてゐた壁面が、坐佛の列龕によつてしめられてゐる。圓塔の正面にはマカラ門makaraのなかに佛の立像がある。そして圓塔の臺にも、傘蓋にも、佛像が彫られたり、侏儒が彫られたり、全面に裝飾が豊富になつてゐる。洞内の壁面もまた、これに應じて佛像やその他の裝飾が、さかんに施されてゐるのはいふまでもない。第26洞でも圓塔の正面に佛の倚像がある。列柱の上、椽の下一帯には、佛と菩薩の列像をあらはした、こまかい裝飾がある。そしてヴェランダ正面にも、おびたゞしい佛や菩薩の形像が、あらはされてゐる。

ヴィハアラ洞にしても、だいたいの結構はかはつてゐない。前にヴェランダがあり、三面に僧房があり、中央廣間には、たいてい、列柱をめぐらしてゐる。たゞちがつてゐるのは、後壁に尊像または塔廟を中心にした祠堂をもつ點である。<sup>2)</sup> またチャイティヤを、祠堂内の中心とすることもある。<sup>3)</sup> これはふるいヴィハアラ洞にみなかつたことである。後壁の祠堂は、また前廊をもち、つぎに主室、つまり内陣をまうけてゐる。内陣の中心は奥壁の佛尊像である。佛は坐像もあり、倚坐像もある。坐像の場合には、ときに臺座に鹿と法輪とを彫つて、初轉法輪の佛だといふことをしめてゐる。もちろん入口や柱の裝飾意匠は豊富で、第一期のものより、はるかにすゝんでゐる。しかし僧房そのものは、たゞ長方形の入口をひらくのみで、かへつてなんの裝飾もなくなつてゐる。室内にもベッドはなく、また窓もなく、かへつて簡素である。

1 J. Burgess, *Ibid.*, Pls. XXX, XXXI; Fergusson and Burgess, *Ibid.*, Pls. XXXVI, XXXVII.

2 Burgess, *Ibid.*, Pls. III, XXXVI, Fig. 19.

3 Fergusson and Burgess, *Ibid.*, Pls. XXXII, XXXIII, XL, XLIV, XLVI にアジャンタのヴィハアラ洞, Pls. LVII, LX, LXI, LXIV, LXV にエロラアのそれ, Pl. XXVI にナアックのそれがある。

4 たとへばバグ第2, 第4洞。 J. Marshall etc., *The Bagh Caves in the Gwalior State*, London 1927, Pls. I, IX.

たゞこのヴィハアラ洞が一步前進すると、僧房をもたない、廣間に祠堂だけの石窟があらはれる。たとへば、エロラ第3洞のごときものとなる。<sup>1)</sup>これには、まだ左右に四つの小窟があつて、僧房らしくもみえるが、左右壁の正面は、ともに祠堂になつてゐる。これでは、バラモン教の窟院に似てゐるわけである。これらのチャイティヤ洞も、ヴィハアラ洞も、地上のチャイティヤ堂や、ヴィハアラを模倣したことはあきらかである。今日、不幸にして、チャイティヤ堂の地上に立つてゐるのをきかないが、その遺跡はサンチの第18寺院や、第14寺院にみられる。それらは、まさしくチャイティヤ洞に一致するプランをもつてゐる。タキシラの古都シルカップのD寺院も、またさうである。<sup>2)</sup>馬蹄形のプラン、内陣には列柱をめぐらし、後廊のところと廻廊のそとが壁になつてゐる。サンチ第18寺院には前廊があるが、第40寺院は兩側面に入口があつて、その點バラババル丘のスタマ洞や、ロマス・リシ洞に似てゐる。しかし天井の構造はよくわかつてゐない。

ヴィハアラの遺跡は多い。サンチでは七世紀にできた第36、第37、第38寺院がみなそれである。<sup>3)</sup>四面に小さな僧房があり、まんなかに内庭をかこむ。内庭のまはりに列柱をたて、僧房とのあひだに廻廊やうのヴェランダがある。第45寺院はこれより一步すすみ、奥の中央に尊像をおさめた祠堂をつくり、第二期のヴィハアラ洞に一致する。この寺院は10世紀、あるいは11世紀の建立といはれてゐる。<sup>4)</sup>タキシラにあるジョリアンのヴィハアラも同様に、よくととのつてゐるが、これは二百年代のはじまりといはれてゐる。<sup>5)</sup>

かうしてみると、インドの石窟は、まことに構造的である。それは石窟でもあるが、もし地上に實現しようとするれば、それとおなじものが、そのまゝつくれるのである。雲岡のものはまったくちがふ。それは、あくまで摩崖にくりぬいた石窟でしかない。ほかの方法では、たうていつくりえない構造である。インドでは、石窟が地上建築物になり、また地上建築物が、そのまゝ石窟になりえた。だから、並列して當時の建築を論じうるわけだが、雲岡の場合はすっかりちがふ。たかだか裝飾の要素くらゐが、地上建造物と共通するだけで、構築原理はあくまで別々なのである。

これでインドの石窟の一半をなすヴィハアラ洞が、雲岡石窟に關係のないことはあきらかである。雲岡石窟が、もとづくところは、所詮インドのチャイティヤ洞である。チャイティヤ洞の傳統は、バミヤン、敦煌をへて雲岡にいたるまで、脈々としてつたはつてゐる。けれども、それもたかだか塔婆をもつといふだけのことで、構造のうへではかなりちがふ。その點、まはりを通路できり

1 Feugusson and Burgess, *Ibid.*, Pl. XLVI. 600年代なかごろ以後といふ。バラモン窟院は6—8世紀にかけてつくられた。そのはじめは Śaiva, あるひは Vaiṣṇava の崇拜に適しないチャイティヤ洞よりは、ヴィハアラ洞がまねられた。しかし、のちには、佛教窟院が、これになつたのである。

2 J. Marshall, *A Guide to Taxila*, Calcutta 1921, 2nd ed., Pl. XIV.

3 J. Marshall, *A Guide to Sanchi*, Pl. X, pp. 129—131.

4 *Ibid.*, p.132.

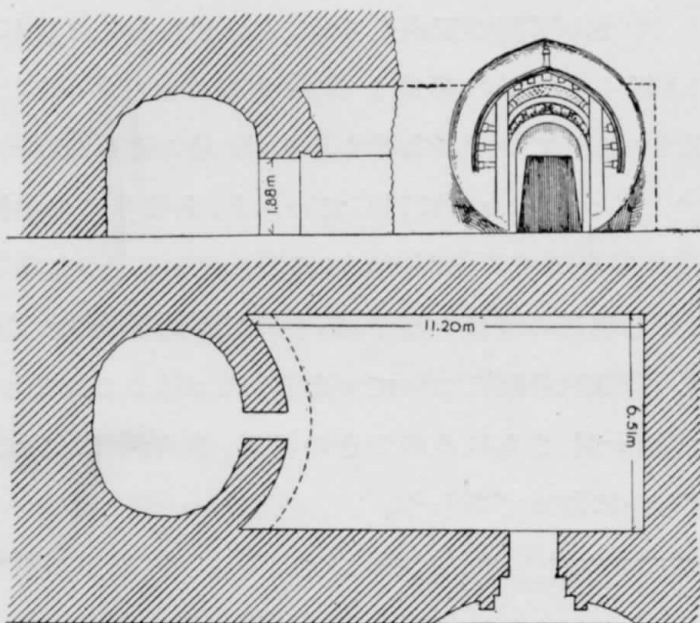
5 J. Marshall, *Excavations at Taxila—the Stūpas and Monasteries at Jauliān* (Memoirs of the Archaeological Survey of India, No. 7) Calcutta 1921, Pl. I; J. Marshall, *A Guide to Taxila*, p.113.

とられ、獨立した後壁をもつキジルの石窟が、むしろ敦煌、雲岡などの塔柱窟にちかい。とにかく、インドの石窟はあくまで構築的である。雲岡のものは、原理的にちがふのである。だから、所詮は、部分的にインドのものを採用してゐるにすぎないことになる。それにしても第九、第十、第十二洞のやうな雲岡石窟の正面は、インドの石窟の正面にもとづくものであらう。この類似は、かなりいちじるしい。列柱といひ、また柱をになふ象として直接はあらはされてゐないが、カールリイの側壁の象は、雲岡の柱に、なにかの暗示をあたへたやうにおもはれる。ところが、かうした正面構造は、インドの石窟でみるのみで、その他ではまったくみないのである。はたして雲岡の工人たちは、直接にインドからこれをまなんだのであらうか。こゝのところに、まだいくらかも疑問がある。

## 5

インドにおける石窟のはじまりは、佛滅(386 B.C.)後、あまりたゞない西暦前350年、または300年といはれるウダヤギリ、<sup>Udayagiri</sup> <sup>Kandagiri</sup>カンダギリの小石窟群であらう。これらはヴィハハラ洞でもなければ、チャイティヤ洞でもない、たゞ自然にちかい小洞窟からなる。これにくらべると、前二百年ごろに歸せられてゐるビハール州、<sup>Bihar</sup> <sup>Barābar</sup>バラバール丘の石窟群は、かなり進歩したことになる。こゝには内部に塔のあつた形迹もあり、外部に破風かざりのあるものもある。

それにしても、インドでどうして石窟をつくるやうになつたのであらうか。それは當時の文化の交流からかんがへて、ペルシアあたりの摩崖墓のアイデアかとおもはれる。アショカ王柱にしめされるやうに、當時におけるペルシアの感化はすくなくなつたであらうから、<sup>Darius</sup> <sup>Codomannus</sup>ダリウス王(521—485)以下<sup>Naksh-i-Rustam</sup>コドマンヌス(335—330)の陵墓が、みなナクシ・イルスタムや、<sup>Persepolis</sup>ペルセポリスの摩崖にいとなまれたことは、充分に考慮にいれなければならない<sup>1)</sup>。さらに、さかのぼっていへば、前700年代のメディア人たちにも、摩崖墓はさかんであつた<sup>2)</sup>。それは摩崖の中腹に口をひらいた石窟で、吹きはなしの前室があり、小さい主室がつゞき、それに棺臺などがつくりつけられたのである。



第十圖 (Fig. 10) インド バラバール丘スダマ石窟圖

1 J. H. Marshall, *The Monuments of Ancient India*, p. 634. 和田新『イローン藝術遺蹟』東京1944年刊, pp. 116-124. 参照。

2 E. Herzfeld, *Am Tor von Asien*, Berlin 1920, pp. 6-16.

いまでは、もう扉も棺もないけれども、石窟は摩崖の中腹にあるから容易にちかづけない。

それにしても、最初にできたバラッパル丘の石窟は、かんたんな小規模のものであった。たゞ洞口外壁に、いくらかの装飾がこゝろみられただけである。内部は長方形で、かまぼこ天井、小さいものは3.00mに6.00mたらず、大きなものでも15.00-16.00mである。そのうちスダマ洞とロマス・リシ洞とはやゝ大きく、部屋の一部が圓形になってゐて、こゝになにか塔 Stūpa のやうな禮拜物がおかれてゐたことを想像させる。(Fig. 10) 洞口の装飾をもつものはロマス・リシ洞であるが、はやくも木造建築の小屋ぐみ破風が、かたどられてゐる。これは後世ながくつかはれた窟院洞口の原形であるとともに、インドにおける石窟も、木造建築を模倣する傾向にあることをものがたつてゐる。

かういふところから發達して、第一期の代表形式をうみ、いにしへのガンダラ地方にまでひろがった。さらに第二期にいたるや、これに佛菩薩、その他の浮彫装飾までさかんに彫りつけた。そして中央アジアから中國本土へと、つたはつたのである。インドからアフガニスタン、中央アジアから敦煌、さうして雲岡と順次東方につたはるが、また直接にバミヤンから、インドからつたはつたものも否定できない。いまは細部の装飾その他の問題は一切省略するが、石窟構造からみて、

1. 雲岡大像窟とバミヤン大像窟との類似
2. 雲岡列柱前室とインドの列柱前室との類似

は、なんらかの直接傳來を指示するものである。

つまり雲岡の工人たちは、インドからしだいに東漸してきた石窟形式を採用したが、また直接にとほくインドの形式を採用することもある。こゝに選擇もあり、また獨創もあったわけである。かくしてつくりあげた石窟は、どこにも似ない雲岡獨特のものであったのである。

1. インドのものに對していふと、あまりにも彫像的である。
2. 中央アジア以西のものに對していふと、あまりにも木造建築的である。

しかし第二の特徴をなす、あまりにも木造建築的であるといふのは、いふまでもなく構造そのものより、装飾的意匠についてである。しかし、このことも初期の曇曜五窟、第七、第八洞より、つぎの第九、第十洞、さらにそのつぎの第五、第六洞において顯著にあらはれてくることは、本文においてあきらかになるであらう。

1 A. Cunningham, *Archaeological Survey of India*, Vol. I, Simla 1871, Pl. XIX, pp. 40—53; J. Fergusson and J. Burgess, *Ibid.*, pp. 37, 38.

# 第九洞

## 第一章 外壁と前庭

雲岡石窟の中央部は第五洞から第十三洞までである。そのうち第五洞から第七洞までは、一應建物もあり、いまの石佛寺に屬してゐる。第八洞も、まへのべたやうに、近ごろまで建物があつたのである。ところが、こゝにとりあつかふ第九洞は、そのそとにある。いまは、とりのぞかれてなくなつたが、この第八洞まへと、第九洞まへのあひだに、小さい門があつた。この門をこえて、第九洞から第十三洞までの五洞は、また寺域の外廓をなし、たかい土塀のうちにあつた。いまこの五洞を、村民は五華洞の名でよんでゐる。五華洞のうち、第十一洞は方柱中心の石窟、第十三洞は交脚菩薩を本尊とする石窟である。第九洞、第十洞、第十二洞は前室と主室とからなり、前面にふきはなしの列柱をもち、共通點が多い。しかし、第九洞、第十洞は主室北壁に大像をもつ石窟であるが、第十二洞は、この大像がなく、佛龕ばかりの石窟である。そして第九洞と第十洞とは、その東隣の第七洞、第八洞が一對窟であつたごとく、一對の石窟である。つまり、こゝに二窟一組の石窟が二つならんでゐて、中央群獨特の景觀をつくつてゐるわけである。(Pl. 1-2, Fig. 11, 12)

第九洞、第十洞をもつて一對の石窟とみなす理由は、かずかずあるが、さしあたり、以下の諸點をあげておかう。

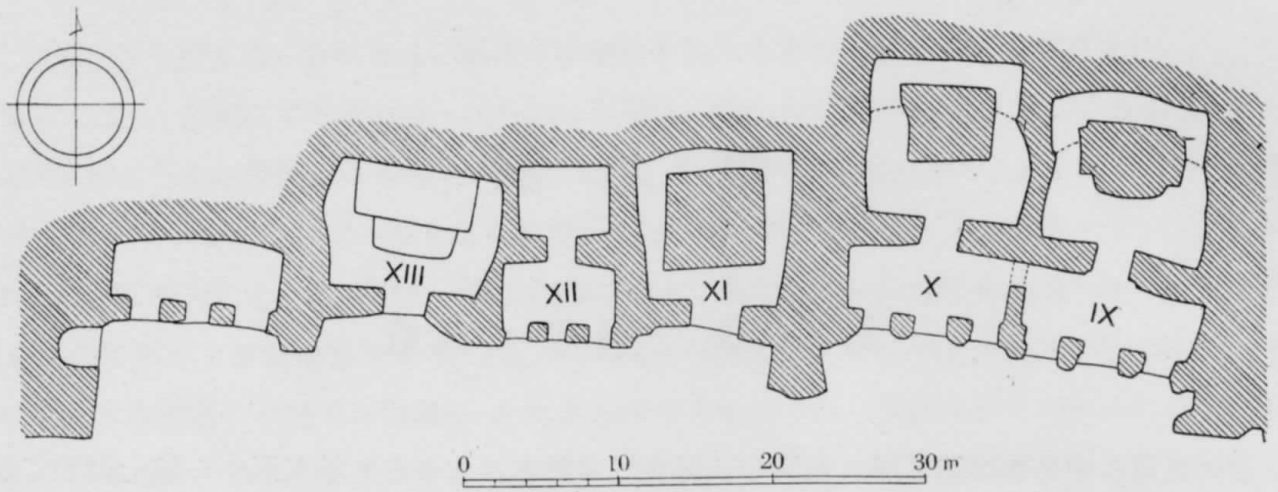
(1) 外壁がまったくおなじで、二本の列柱、三間の間どりである。前室の東西、いひかへると第九洞の東壁と、第十洞の西壁とが同一意匠であり、これに對し兩窟をわかつ中間の壁の兩面、いひかへると第九洞の西壁と、第十洞の東壁とが、また表裏をなして同一意匠である。

(2) 發掘の結果によれば兩窟の前庭は同一の造構からなる。

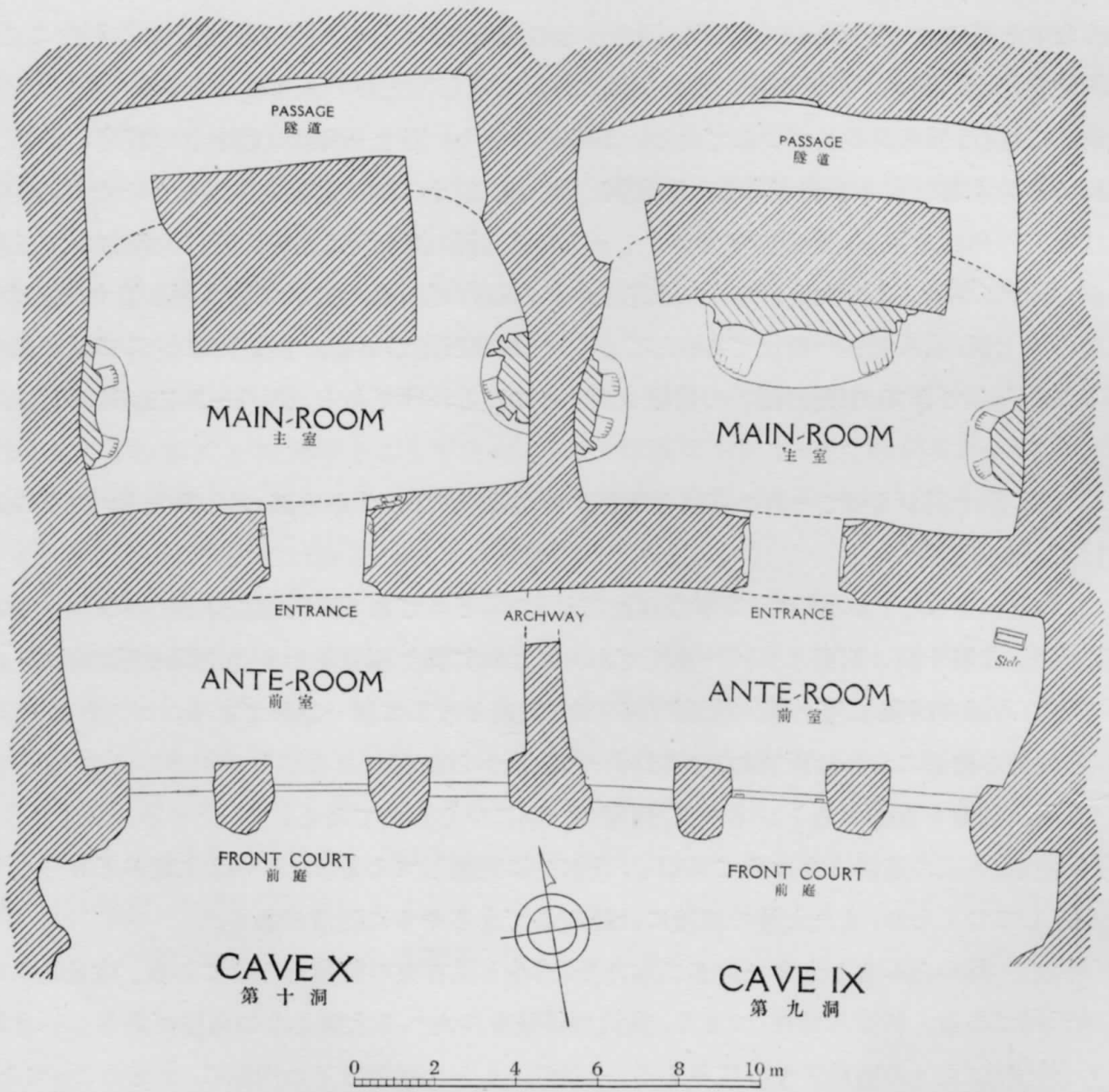
(3) 兩窟前室を連絡するトンネルが、側壁の一隅にひらかれてゐる。

(4) 前室、主室の造構はきはめて類似し、たがひに照應してゐる。たとへば主室がどちらも大像を中心としてつくられ、また大像の背後には繞道のできるやうに隧道がある。

〔外壁〕 外からみると大きな柱が二本たち、三斗と叉首束<sup>カスブカ</sup>の軒組をうけてゐる。建築的にいへば正面三間である。柱は八角柱、つまり、漢代の傳統をつたへる大面とりの角柱である。いま風化のため、外側は、たゞの圓柱のやうに見える。しかし、もとの状態はその内側に、まだのこつてゐる。うへはしだいにほそく、柱基は方形、その根もとはいま土中にうまつてゐる。昭和十三年の發掘に

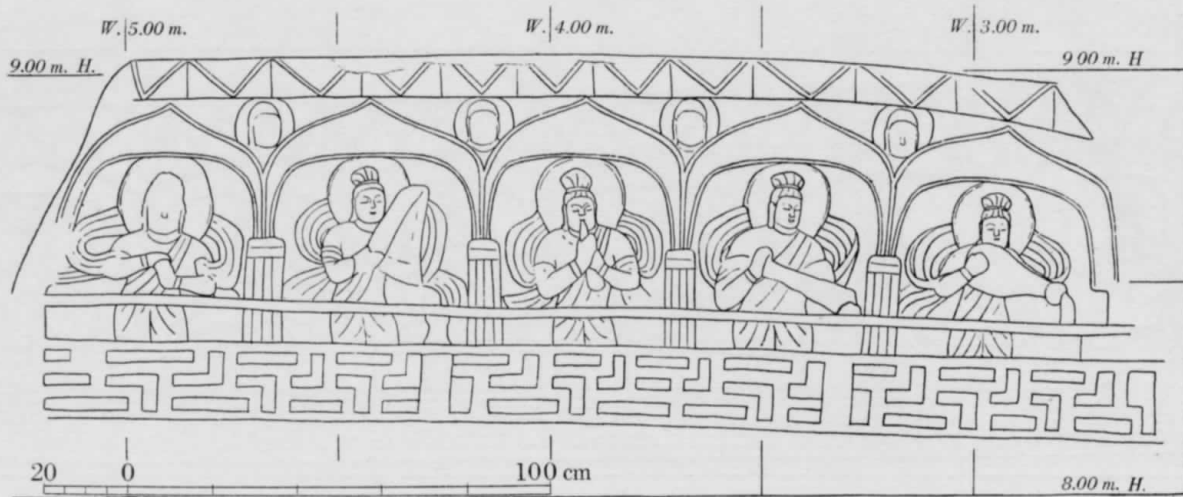


第十一圖 (Fig. 11) 雲岡五華洞平面圖



第十二圖 (Fig. 12) 雲岡第九洞第十洞平面圖



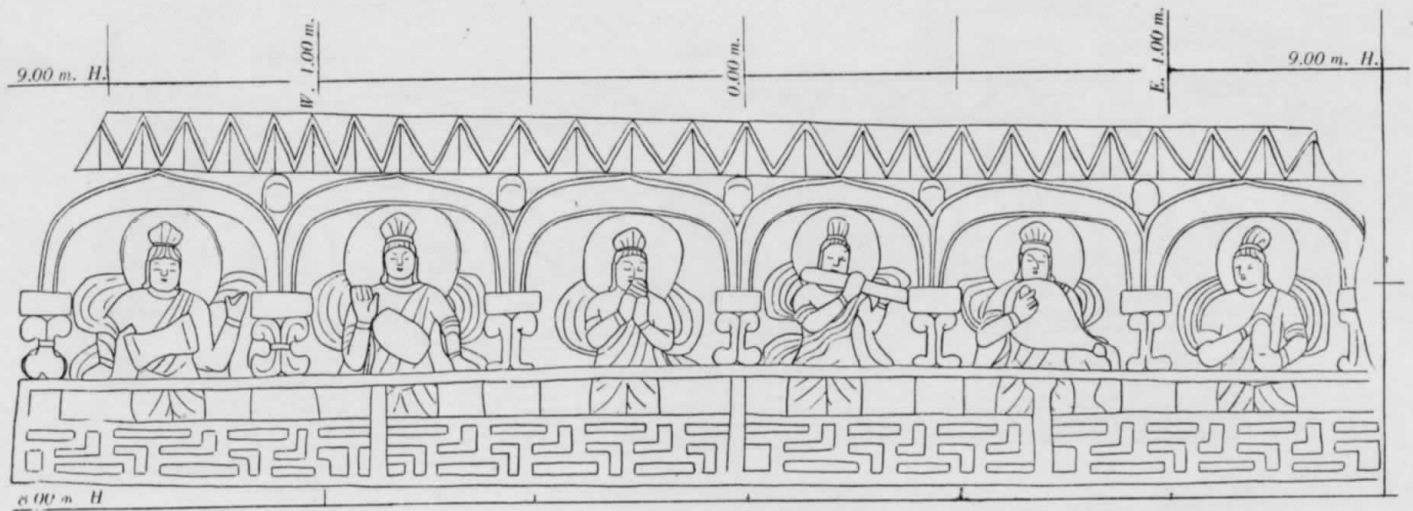


第十三圖 a (Fig. 13 a) 第九洞前室北壁樂天列龕 (西部)

よると、柱基はなほ方形の臺上につてをり、その方形の臺には四面に相むかふ獸形の浮彫があつた。吹きはなしの各間は、ほゞ同一の間隔である。前室東壁の面がすこし出て、東南隅に柱様のものをのこし、さらにこゝから南に出て、前庭の東壁となる。前庭の東壁は南にのびて、南面する五重の塔の彫刻となる。塔形は風化がひどいけれども、五層までは、はっきりとかぞへられる。上ほどせまくなつてゐて、伏鉢や相輪の存在は、あきらかでない。第十洞の前庭西端には、これに應ずる西壁と重層塔があつたわけであるが、いまははっきりしない。たゞ第十洞西端に、わづかにのこるひくい岩塊が、そのなごりであらうか。(Pl. 2—4, Plan III)

〔前庭〕 とにかく第九、第十洞の前庭は、兩翼に岩壁があつて、たしかにひとつのまとまつた構成をとつてゐる。これを傍證するひとつの點は、外壁の上方を水平にけづり、第十洞西端までのぼしてゐることである。この岩をけづつた部分は、いま草茫々としてゐるが、こゝに石窟をおほふ屋根をつくりだしたものとおもふ。屋根に關連してもうひとつの問題は、列柱のうへにならぶ大きな長方形の孔である。これは木造架構の梁孔である。しかし、この孔が斗拱の軒組を無視して、鑿りこまれてゐるところに、その時代の後世にあることを想像せしめる。しかし、この梁孔は、發掘の結果でてきた、あきらかに後世の礎石とも、また照應してゐない。この梁孔が、けっきょく、いつのものであるかについては、容易に斷定しがたいものがある。その詳細は、次卷第十洞に附載する發掘記にゆづる。たゞ附記しておきたいのは、その床にみいだされた龜甲文や、蓮華文の裝飾から、やはり、なんらかの屋根の存在が想定されることである。その文様は、龍門石窟賓陽洞の床にみたものと同様で、當時の絢爛たる花氈を想起せしめるものであつた。<sup>1)</sup>

1 水野，長廣『龍門石窟の研究』1941年刊 Fig. 13。なほ文様はちがふが、似たやうな床の彫刻は第五洞外のA窟にもみられるし、響堂山石窟第五洞にもある。水野，長廣『響堂山石窟』1937年刊 Pl. 23B, 42。



第十三圖 b (Fig. 13b) 第九洞前室北壁樂天列龕(中央部)

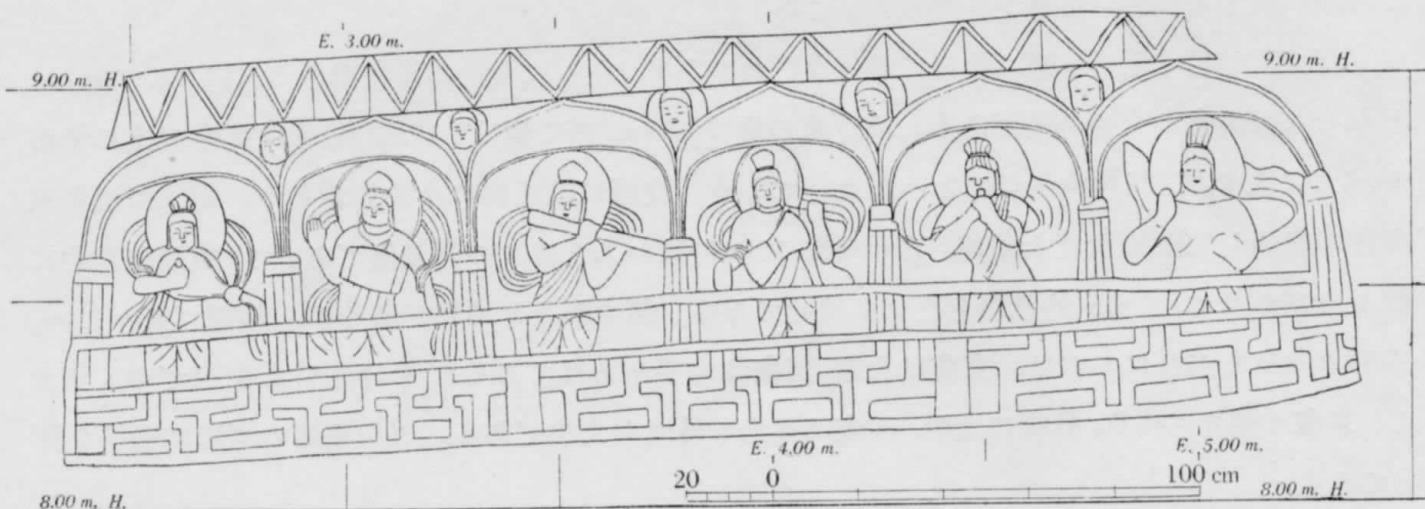
## 第二章 前室

第十洞とおなじく前室と主室とからなっている。前室の南壁は吹きはなしの列柱で、南から日光がさしこみ、まぶしいほどあかるい。反対の北壁にはうへに明窓、したに門口、つまり主室への入口があいてゐる。平面は東西にながい矩形で、東西12.00m南北4.00mある。(Plan I, II) もとの床はうもれて、そのうへに、いま塼をしいた床がある。だから、もとの床はひくゝ、そこに立ってながめたとすると、天井はもっとたかくみえたにちがひない。現高約9.00m、東西北の三壁は、たゞしく上下の二層となり、そのしたに腰壁がめぐらされてゐる。これは第十洞もまったく同様である。そしてこれら周壁も、天井も、すっかり浮彫でうめつくされてゐるのである。(Pl. 6, 7)

### 1 前室北壁

上層の中央に明窓をひらき、下層および腰壁の中央に門口がある。明窓の下端が上下層の境で、蓮瓣文帯が水平にとほつてゐる。上層の高さは4.60m、下層の高さは5.80m。(Pl. 5, 8, 11, 12, 16, Plan IV)

〔北壁上層〕 上層は左右に圓拱のやうにみえる尖拱龕をまうけ、ともに二佛並坐の像を彫る。いづれも華麗な五成の座にすわり(Rub. IV C, D), 火焰の舉身光背をおひ、なゝめむきに相對してゐる。拱額には九體の坐佛をならべ、額縁、つまり拱梁は飛天の列に化し、その拱端には正面むきの鳥形(西龕)、あるひは龍形(東龕)を彫つてゐる。(Rub. VI A, B) 龕内二佛光背のあひだには、したに小形の天人立像、うへに天人跪坐像がある。龕の兩脇のせまいところには比丘の立像を彫る。(Pl. 13, 14)



第十三圖c (Fig. 13c) 第九洞前室北壁樂天列龕(東部)

兩龕のうちがはに、それぞれ層柱が彫つてある。(Rub.I C,D) 柱頭には、アカンサスのかほりに、一種の半バルメットのかざりがあり、そのうへに、からだをのりだし、天井の梁をさへた侏儒の大きな彫刻をのせてある。柱は五層、各層には二體づゝの、おどつてゐる童子がみられる。相撲かとおもはれる手つきや足つきである。天井に接して、よこにほそい一層があり、小龕をならべ、なかに奏樂天人をおさめてゐる。(Fig. 13, Rub.II C) 天人は欄杆のうへから上身をみせ、中央アジアのキジールや、アフガニスタンの石窟壁畫にみる意匠に一致する。この北壁最上層にあたるものは、東西壁になく、たゞ南壁にみられる。東西壁では上層の佛龕は、すぐ天井に接してゐる。(Pl. 8)

〔明窓〕 層柱の中間に明窓がある。明窓は高さ2.65m、尖拱のふちかざりがある。(Pl. 9) 拱額のうちには九體の坐佛をならべ、拱端には龍形をおき、そのした龕傍にバラモン仙者の半跏像を彫る。痩せこけて骨もあらはなバラモンは、つねのごとく高髻をつけ、鬚髯をたれてゐる。籐几に腰をおろし、一は髑髏、一はなにか鳥のごときものをもつてゐる。髑髏をもつてゐるのは、曇曜の『付法藏因緣傳』(大正大藏經, 第五十卷, p. 332) 卷六にいふバラモンの髑髏賣りであらう。(Pl. 46)

明窓の内部には、きはめて優秀な浮彫がある。(Pl. 39, 40, Plan X) 天井は大蓮華(Pl. 41, Rub. V F) をめぐる飛天、東壁は蓮上にすわった菩薩、西壁は象にのつた菩薩像である。(Pl. 42—45) そのわきに天蓋をさしかける天人がをり、樂器を奏する飛天があり、合掌跪坐する比丘があり、しかも山岳の重疊としてかさなるのは、なにか左右雙壁のあひだに、連關した物語のあることをしめしてゐる。北端、主室の方のふちに立つた菩薩がゐる。(Pl. 48—50) それは第七、第八洞明窓のカリアティデスと同様である。それをうけて、うづくまった侏儒がゐる。こゝのカリアティデスは第七、第八洞とちがって、なゝめの位置をとらず、たゞしく西、もしくは東にむかつて、完全に明窓の側壁におさまつてゐる。また第七、第八洞では、明窓の拱梁の端にある龍をうけてゐたが、こゝではもうそのことはない。たゞ立つた像である。けれども、この立像と側壁下部の山岳とは、第七、第八洞の

この洞に對するつよい影響をものがたつてゐる。

〔北壁下層〕 北壁下層は中央に華美な門口があり、左右に大きな佛龕がある。(Pl. 15, Fig. 14) どちらも楣供龕の交脚菩薩である。高さ東の像は2.53m, 西の像は2.47m, 五成の寶座の上につきわり、うつくしい寶冠 (Rub. V C, D) をいたゞいてゐる。寶冠には正面に小坐佛がある。劉宋の沮渠京聲譯『彌勒上生經』(大正大藏經, 第十四卷, P. 419) にいふとほりの彌勒像<sup>り</sup>であつて、寶冠の左右に紐をなびかせて、イラン的色彩をたゞよはせてゐる。顔はかなり補彩があるが、端麗で若々しい。手相のみはたがひにちがひ、東龕は合掌、西龕は右手をあげてゐる。舉身光背も東西でやゞ相違し、東龕は圓光に唐草、外縁に火焰、西龕は圓光も外縁も火焰である。五成臺座の兩脇に獅子を彫つてゐる。

楣拱額には飛天をならべ、下に帳幕があり、かたはらには八角柱をかたどる。柱頭 (Rub. III F-I) は渦巻をつくるが、ギリシアのイオニア式といふより、第八洞でも指摘したやうに、渦巻からの變化であらう。八角柱の各面に唐草、絡繩文を彫り、にぎやかである。(Rub. III C) なほ角柱の内側にうすく、比丘と高髻天人の供養者を四段に彫つてゐる。ほとんど氣がつかないほど、あさい彫像である。北壁西端に、高さ1.38mの高髻の天人立像があるが、これに應ずる左脇侍がない。また北壁東端は壁面が破損し、無意味な補彩があり、こゝにはもはや右脇侍がない。

〔門口〕 北壁下層中央は、門口の上に堂々たる屋根を彫つてゐる。(Pl. 10) 軒のながさ4.87m, 北魏帝都の伽藍建築を髣髴させるよい例である。鸚尾のほかに鳥形、三角飾が棟をかざる。軒には三つ斗、叉手束<sup>た</sup>がある。(Rub. IV B) そのしたは、やゞ複雑な瓔珞帯をへだてゞ、水平垂直に楣と柱をくんでゐる。そして、あたかも木造構架に五彩の文様をほどこしたごとく、細密華麗な浮彫裝飾を彫つてゐる。すなはち楣の部分には、地文様として複雑な唐草文があり、その外縁には、連珠文帯と、小形の唐草文帯がめぐつてゐる。そしてそのうへに、五つの蓮華門簷を彫りだしてゐる。(Rub. II F) 軒下と楣との中間には、八體の飛天が身體を横たへてとんでゐる。大きな花繩(瓔珞)<sup>ガラン</sup>が弧形をふがいてたれ、その各端を飛天がにぎつてゐる。さらに花繩の間隙には、唐草と火焰の三角垂飾がならび、絡繩文の縁飾がうへにある。この華麗な楣をうける左右柱も、たてにはしる複雑な唐草文 (Rub. III D) におほはれてゐる。

門口の屋形の左右には一對の門神をあさく彫つてゐる。右側高さ1.70m, 左側高さ1.65m。高髻をつけ、身體に甲冑をつけ、ながい矛と金剛杵とをもつて、門口を守衛してゐる。これも一步中國ふうになつた金剛力士である。

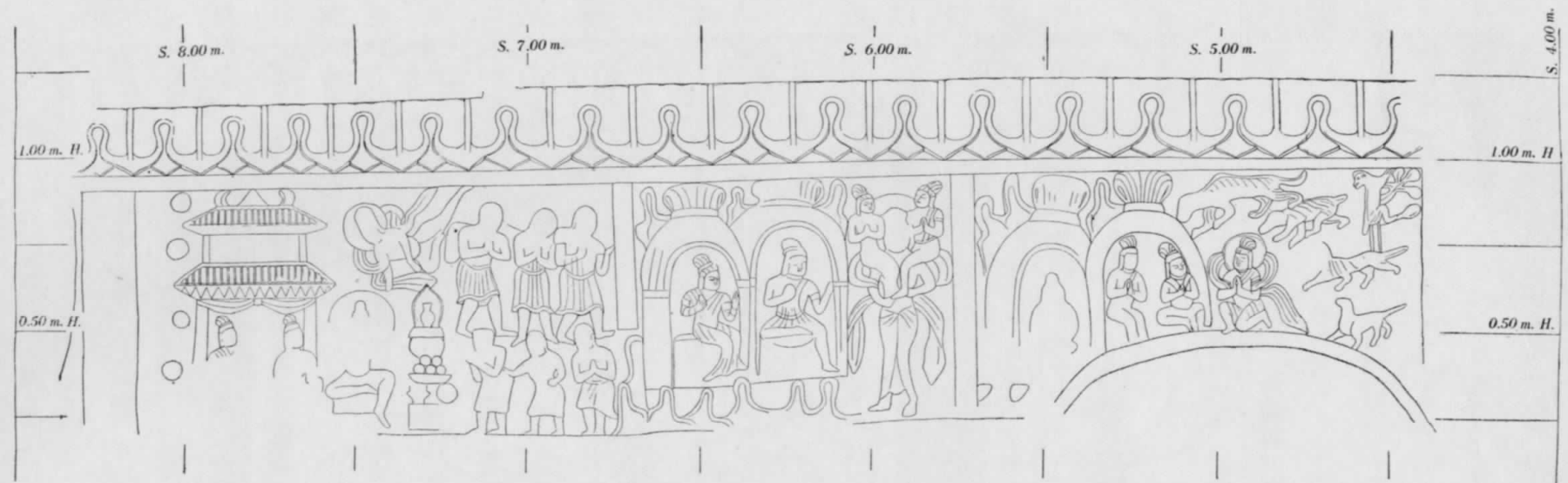
門口をはいると、繁縷な文様のある方立<sup>ホウダチ</sup>のつぎからアアチになつてゐる。隅まるのアアチは、楣

1 水野「倚坐菩薩像について」(東洋史研究, 第六卷一號)1940年, p. 39—42。

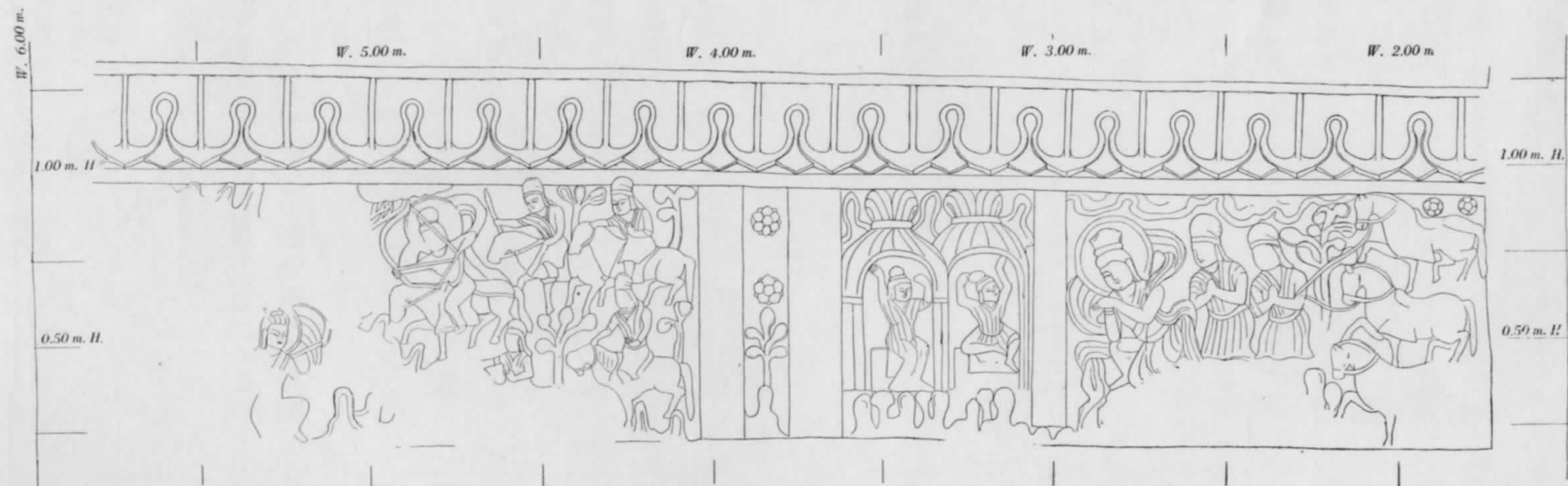
2 これをソーパー氏は王延壽の「魯の靈光殿賦」にみえる枝掌にあてゝゐる。A. Soper, *The Evolution of Buddhist Architecture of Japan*, Princeton 1942, p. 101. 参照。唐代には叉手、また叉首の名でよばれてゐる。水野「辟邪の雙目について」(東洋史研究, 第四卷二號) p. 146参照。



第十四圖 (Fig. 14) 第九洞前室北壁下層西龕

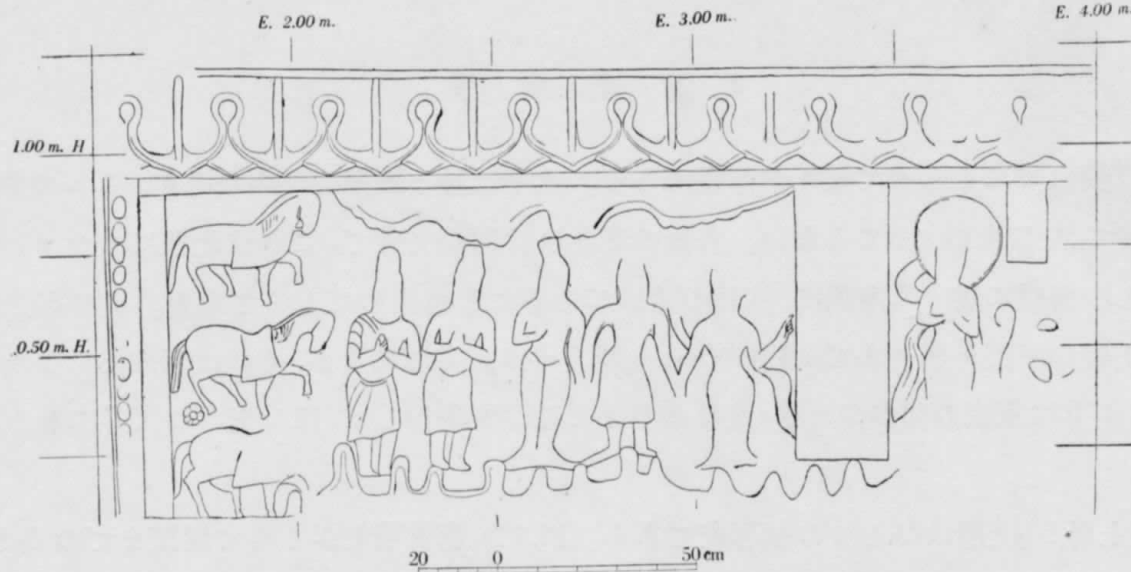


第十五圖 a (Fig. 15 a) 第九洞前室西壁腰壁本生圖 (1,2)



0 50 100 150 cm

第十五圖 b (Fig. 15 b) 第九洞前室北壁西部腰壁本生圖 (3,4)



第十五圖c (Fig. 15c) 第九洞前室北壁東部腰壁本生圖(5)

のすみに接するところに三角形のもの(Rub.VIE)がのこり、こゝに唐草文様がある。拱門になった両側に、武装した門神がある。金剛杵も、矛ももっていないが、足をあげて力をいれてゐる様子。風化はさうたうにひどい。それから、せまい蓮瓣帯があつて、三人の高髻天人が跪坐する一帯になる。その上は天井だが、これは火焰につままれた摩尼寶珠(Rub.VIK)で、それをさへながらとんでゐる四體の天人がある。(Pl. 36-38, Plan IX)

〔北壁腰壁〕 つぎは腰壁であるが、これは破損がひどく泥壁でおほひ、近世のへたな繪がかいてあつた。昭和十四年、この泥壁をはぎ、そのしたの浮彫をあきらかにした。東壁はまったく消滅してゐたが、門口より西の北壁と西壁とには、かなりよく浮彫がのこつてゐた。(Pl. 6, 7, 19-26A) それは有名な<sup>Syāma</sup>シャマ本生(睽摩迦)をあらはしたもので、おなじく第十洞の腰壁から発見された儒童本生とも重要な新資料を提供することになった。

腰壁は上縁の蓮瓣文帯の下まで、高さ2.48m、上下二層にわかれてゐる。上は本生の浮彫、下は供養者の列像である。それは北壁だけでなく、ひきつゞき東西壁におよんでゐる。北壁東部では、二つの場面がからうじてみとめられる。(Pl. 26A, Fig. 15c) 門口にちかいは立つた人物數體と馬三頭である。たぶん、おなじシャマ本生の一部かとおもふ。その右には短冊形がある。文字をいれたのであらうが、いまはまったく不明である。つぎの場面は合掌像一體をみとめるだけである。これに對し西部は横4.08m。それを二つに區ぎり、二つの場面をあらはす。(Pl. 24, 25, Fig. 15b) これはあきらかに西壁にはじまるシャマ本生のつゞきである。西方の場面は西端の半分をうしなふが、池畔のシャマ仙人が、王にあやまり射られた光景である。右方の王と、その侍者は馬にのつてゐる。東方の場面とのあひだに二重の枠がある。その中間は、幼稚な山岳と樹木とをあらはしてゐる。東方の場面は、また中間に細ながの短冊形があり、これにはおそらく文字をきざんだものとおもはれる。その左方には隣接する二つの窟をつくり、シャマの老父母がある。右方にはこれにひざまづいて拜禮する王と二人の侍者、三頭の馬がある。王がシャマをあやまって射たことをわびる場面である。

## 2 前室東壁

東壁は横はゞにくらべて縦ながの壁である。上下二層と腰壁とからなるが、こゝの腰壁はきえてしまつて、なにもものこつてゐない。各層のさかひは蓮瓣文帯で、これは北壁にもつゞいてゐる。ふきはなしの南壁に接する南隅に、柱狀の造構があること前述のごとくである。壁の高さは、いまの床から上層の屋頂かざりまでゞ約9.00m、そのうへは天井であるが、それは天井といひながら、まだ1.85mばかりは垂直の面がつゞき、それからすこしづゞ彎曲して、ほんたうの天井になる。(Pl. 7, Plan VI)

〔東壁上層〕 上層はひとつの屋形龕である。(Pl. 17) 蓮瓣帯をふくめて屋頂までの高さ3.10m。棟には、もちろん鴟尾があり、なほ鳥形と三角飾(Rub. VI C-J)とをおく。軒には椽、三つ斗、叉首束をほどこし、(Rub. IV A) 桁をさゝへる左右二本の八角柱(Rub. III B)がある。北魏時代の木造建築を祭するに足る。中央には寶冠(Rub. V B)をいたゞいた交脚菩薩像、左右の間には一對の半跏菩薩像(Rub. I F)を安置する。まさに第七洞北壁上龕の尊像配置に一致する。第七洞の場合には、そのあひだに佛の倚像があつた。むしろ嚴密に本尊が交脚菩薩で、脇侍が半跏思惟菩薩である例は、第十七洞の太和十三年佛龕である。しかし、これともちがふ。たゞひとつの相違點をあげると、それは、この半跏思惟像が屋内にあるにかゝはず、一本の大樹の下に坐し、樹葉がふかくこれをおほふてゐることである。この樹下に思惟することは『過去現在因果經』(大正大藏經、第三卷、p. 629) 卷二にみるごとく、シッダアルタ太子のひとつの型である。シッダアルタ太子をしめす佛龕佛傳中には、しばしばこのポーズがみられる。折にふれ、ことにふれ、苦悶し思索するのは、實に出家成道以前における太子の、やむにやまれぬすがたであつた。造像は、これを定形化したのである。これが、そのひとつである。また第六洞明窓のごとく、白馬にわかれるところも、そのひとつである。片脚をおろし、右手で頬をさゝへた尊容が、太子のすがたとして定著したのである。雲岡の半跏思惟像をみな太子成道以前のすがたとみることは、當時の造像一般からも支持される<sup>1)</sup>。この屋形龕といひ、佛像の配置といひ、第十洞西壁上層とまったく同一である。こゝでも兩洞企劃の一對であることがあきらかになる。

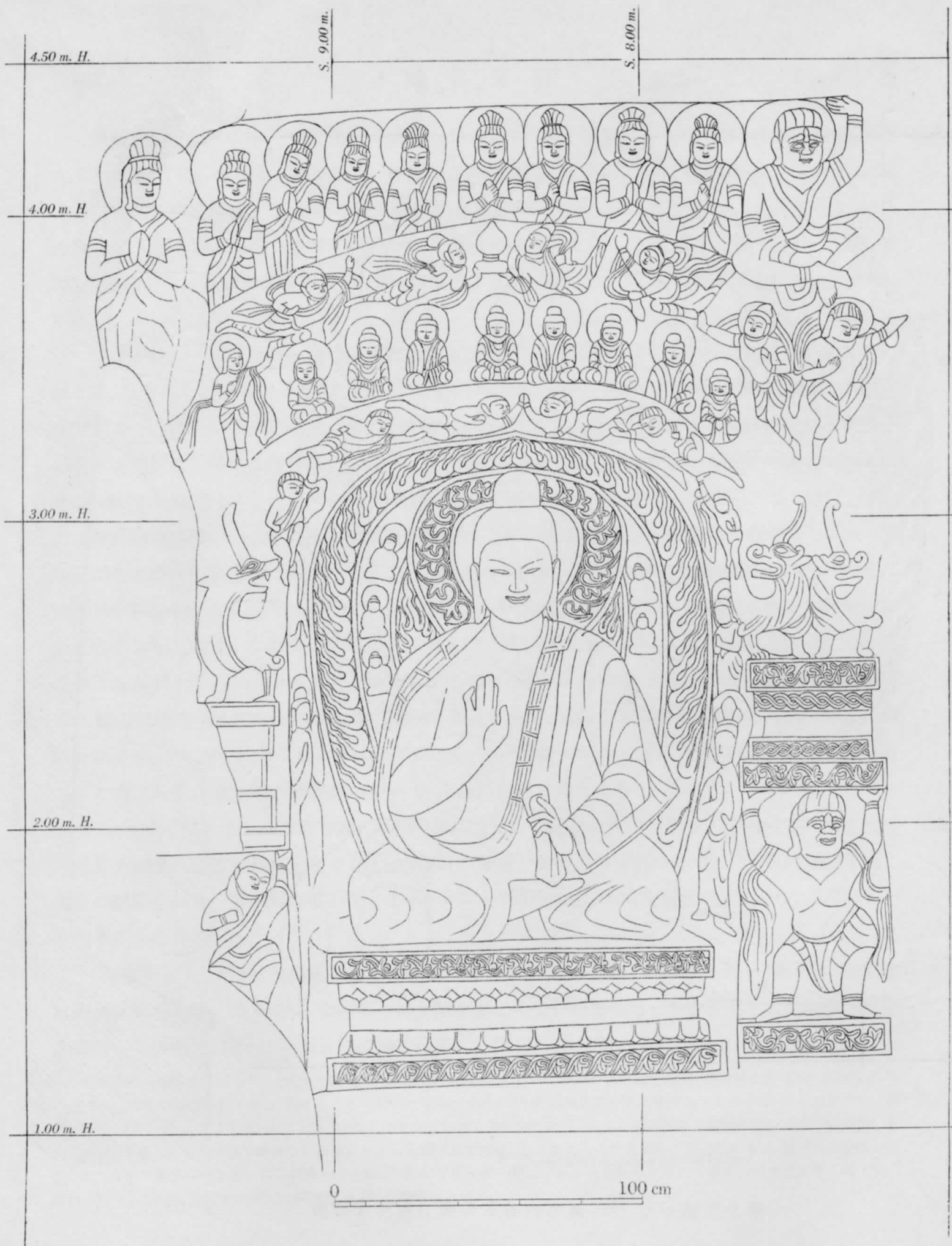
〔東壁下層〕 下層は尖拱龕を左右にならべてゐる。拱額はもとの形をたもつてゐるが、坐佛像は全部後補である。つまり、この壁面の保存状態がよくないのである。左右とも五成の須彌座に結跏趺坐した佛像で、臺座の兩わきには獅子がある。拱額には九體の坐佛をおき、上下の縁にはシム

1 水野「半跏思惟像について」(東洋史研究、第五卷四號)1940年、p. 48-53、劉宋の求那跋陀羅譯『過去現在因果經』をみると、太子はつねに人生の問題になやみ、いたるところで思惟にはいつてゐるが、卷二の太子が園にあそぶところでは、太子が思惟し「日光がてりかゞやくと、樹はそのために枝をまげ、太子をかけた」といつてゐるし、これにあたる『繪因果經』(上品蓮臺寺本)をみると、枝葉は大きく太子像をおほうてゐる。かうした樹下思惟像は、太子をあらはす重要な一形式であるが、樹下人物像は一般に、またインド美術のなかにしばしばあらはされ、これなどもその一變化とみとめられる。そのことについては水野「樹下美人像について」(學藝、第四卷八號)1947年刊 p. 38を参照されたい。





第十六圖 (Fig. 16) 第九洞前室西壁上龕佛交脚像



第十七圖 (Fig. 17) 第九洞前室西壁下層南龕

メトリックに飛天がとんでゐる。兩龕の中間、上端には、なゝめむきに大きな侏儒があぐらをかいて坐し、片手をあげて蓮瓣帯をさゝへてゐる。侏儒像が、ものをになふアトランテスの意味をもつたものだといふことが、こゝでもわかる。したがって第八洞東壁第三層のごときつかひ方が、もっとも原初的なやり方と解されるわけである。

### 3 前室西壁

上下兩層の計畫は、ほゞ東壁と相應する。しかし注意してみると、けつして同一でない。むしろ、この壁の上層は、背中あはせである第十洞東壁と、全然同一である。床からの高さ約9.00m。その上に天井部の垂直におりてきたのが約1.67mある。(Pl. 6, Plan VII)

〔西壁上層〕 上層はひとつの屋形龕からなる。(Pl. 18) 最高3.20m, 屋根の高さ0.30m。棟の鴟尾, 鳥形, 三角飾, 軒の極, 三つ斗, 叉手束は東壁とおなじである。左右の重層柱は(Rub. I E) 半パルメット飾の柱頭および、四層の柱身をもちひ、各層には小坐佛を安置する。さらに壁の兩端にも、不完全ながら同様の層柱を彫る。本尊は交脚像ではあるが、菩薩ふうでなく、したがって寶冠もなく、肉髻をかたどり、偏袒右肩の佛像である。(Fig. 16) 左右脇侍も菩薩立像で、上方に飛天がとぶ。このやうに、尊像配置においても東壁とちがってゐる。本尊は左右の手をあげてゐる。交脚像にかぎって、ときどきみる手相である。大きな火焰光背につゝまれ、臺座わきには獅子がある。

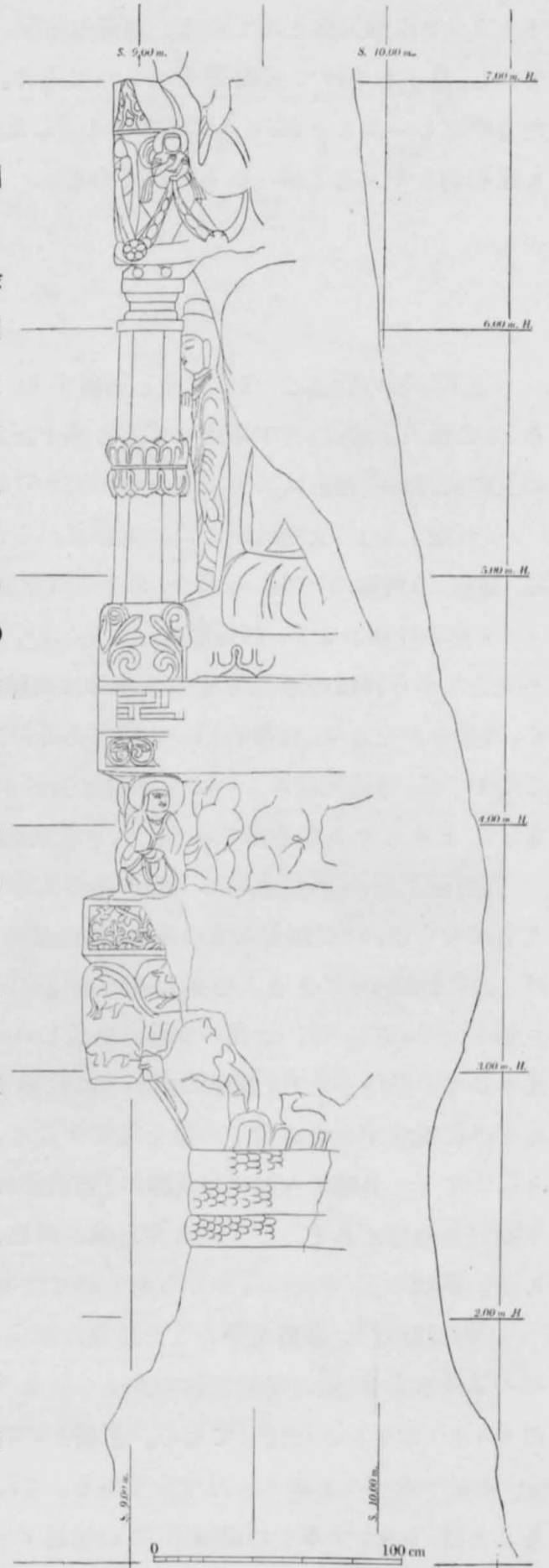
〔西壁下層〕 西壁上層の下縁に蓮瓣文帯(Rub. IV J)がある。下層は圓拱ともみえる尖拱龕が左右にならび、いずれも五成の座に、結跏趺坐する偏袒右肩の佛像を彫る。南龕の坐佛は右手をあげ、左手は衣端をにぎる。坐高1.58m, 臺座高0.45m。拱額は上下に飛天をならべ、なかに八體の小坐佛をおく。(Fig. 17) 北龕の坐佛は坐高1.34m, 臺座は0.45m。三尊形式で擧身光の兩わきにやゝ丈のひくい脇侍がたち、臺座の兩わきには獅子がある。本尊の坐佛は右手を足さき<sup>Rāhula</sup>にだして、臺座のまへに跪坐する合掌童子の頭をなでゝゐる。童子は、いふまでもなく釋迦の實子、羅喉羅であらう。つまり、曇曜が吉迦夜と共譯の『雜寶藏經』(大正大藏經, 第四卷, p. 496, 497) 卷十にもいふ父子初見の情景である。こゝにも左右龕の脚部に、兩手をあげて柱頭(Rub. VI C)をさゝへる侏儒がある。拱額の上、中央にもあぐらをかいて片手をあげた侏儒がある。

〔西壁腰壁〕 蓮瓣文帯のした腰壁は總高2.40m。こはれきった供養者列像のうへに高さ0.80mのパネルがあり、横のながさ約4.00m、これを三つの場面に區ぎってゐる。(Pl. 20-23, Fig. 15a) こゝにシャマ本生をあらはしてゐる。北壁との隅にトンネルがある。(Pl. 23, 26 B) 頂高1.93m, 幅1.10m。人が一人づゝとほるには十分である。これは第十洞前室に通ずるもので、最初からの計畫であることは、シャマ本生の構圖が、この隧道アアチにあはせてあることによつてわかる。また隧道の天井には北魏の蓮華と飛天が彫つてゐる。

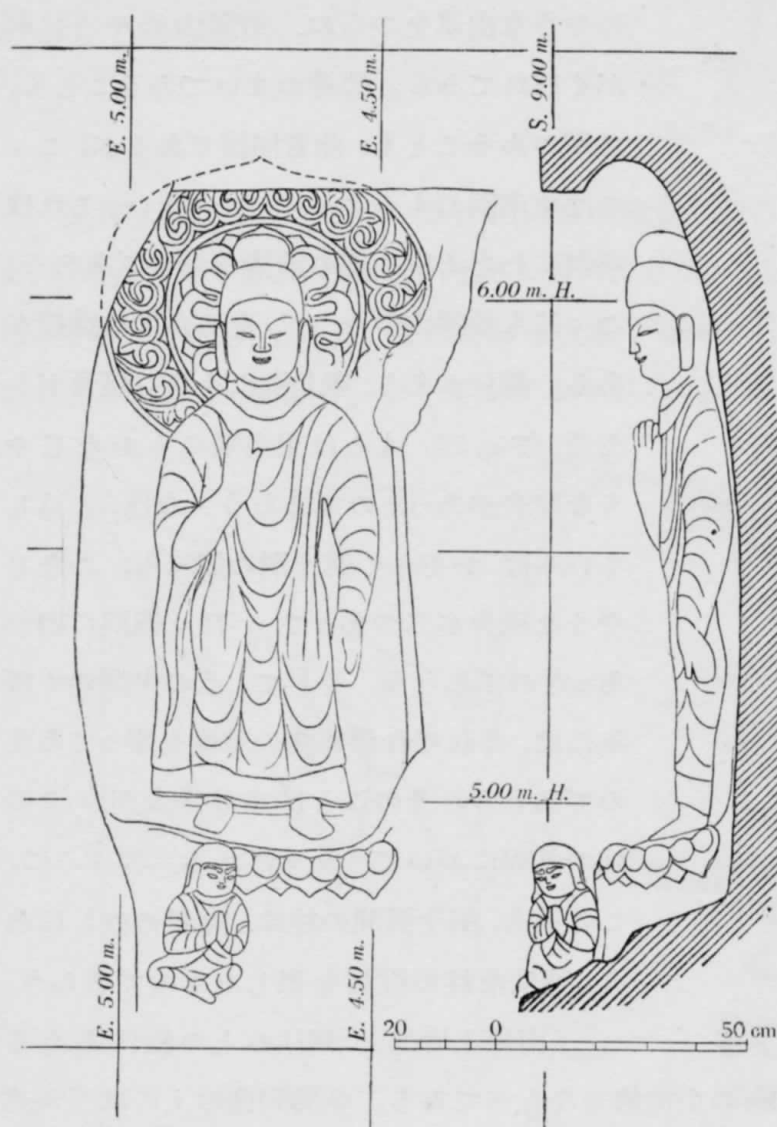
4 前室南壁

〔南壁八角柱〕 二つの大きな八角柱がたち三間となり、吹きはなしである。(Plan V) 八角柱は、もとの床から柱頭の頂まで約9.00m。上にむかふほど徐々に細くなってゆく。柱身は八角だが、柱基部は四角、五成の臺、象の上ののつてゐる。しかし、ふしぎなことには、この象は、前半身しかあらはされてゐない。そして二本の前脚とながい鼻とで鼎立してゐる。象のしたに、さらに幅ひろい方臺がある。約2.00mに約1.70m、高さ0.90m、四面にむきあふ獸形の浮彫がある。(Rub.IV F.G.I) 五成の座は高さ0.50mおよび0.60m、座の中間四隅に童子がすわって上層をさへてゐる。座の各段は唐草文帯でかざられてゐる。そして、この複雑な基部のうへに八角柱がたつ。柱身の高さは、上部の蓮瓣文帯をふくみ、東5.50m、西5.40m。四角のたかい基部に八角柱をたてるため、そのおちつきをねらつてか、四隅に半バルメットのかざりをつくり、そのあひだに相對する二體の童子を配してゐる。(Rub.II A,B) 腰をひねり、足をうかし、合掌してゐる。肅然たるながい八角の根もとに、かるい氣分轉換をこゝろみたところが巧妙である。

八角の柱身には、各面に小さい坐佛龕をならべてゐる。上下で十段あり、一段は八面で、十二龕あつたわけだから、全體百二十龕あつたといふことになる。それぞれの高さは0.40m ぐらゐである。柱身の頂點には蓮華文をめぐらし、その上の柱頭は皿板である。大斗の側面には唐草文をかざり、綽形には蓮瓣文をいれ、皿板の下端には絡繩文をおく。(Pl. 29, Rub. I A,B) いま柱の外側がすっかり風化してゐるが、造營當初はこのうつくしい列柱が外からもみえ



第十八圖 (Fig. 18) 第九洞前室東南柱中部



第十九圖 (Fig. 19) 第九洞 前室 東南柱上層 定光佛立像

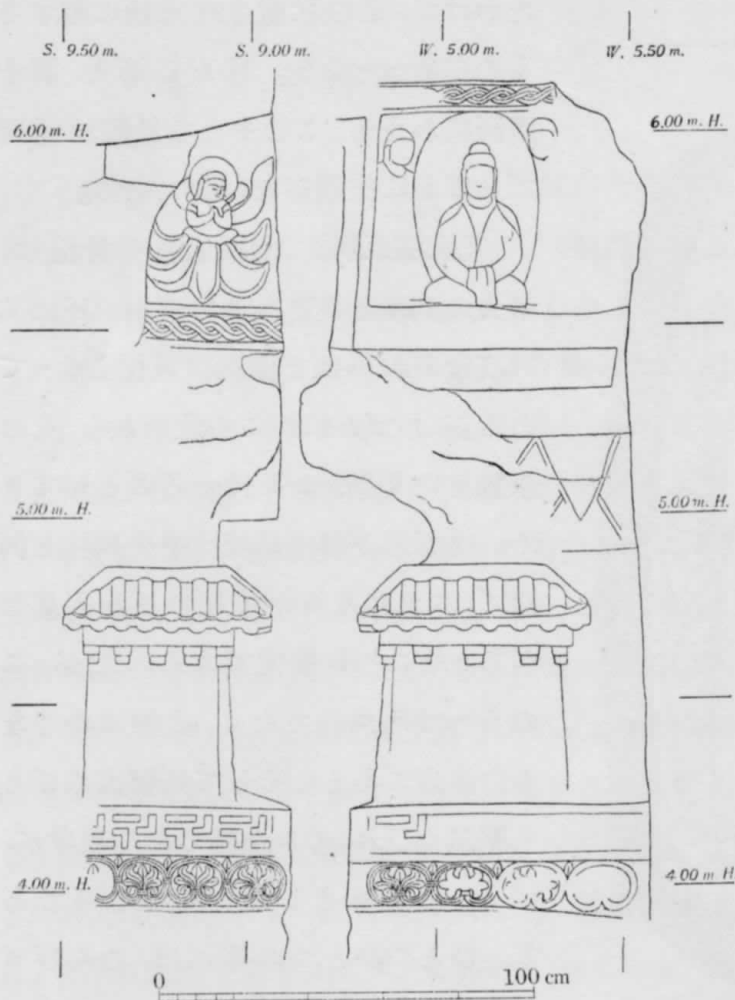
龕がある。いま北面に佛の立像があり、立像のまへに童子がすわつてゐる。定光佛と儒童をあらはしたものとおもふが、立像の足下に頭髮をしいてゐない。(Fig. 19) 西面は坐佛であつたことが、やとわかるが、南面にいたつては、まったくなにもわからない。とにかく、さういふ佛菩薩が、この天宮の四面にきざまれてゐたことだけは、想像してあやまりないであらう。

〔南壁西隅〕 つぎに列柱の西、つまり前室西南隅をみよう。これは、だいたい、東南隅の構造から推察される。(Plan V, VII, Pl. 28) また、これと照應して、逆に東南隅の方の細部をたしかめることもできる。しかし、両者はけつしてシムメトリカルでない。むしろ、この壁と背中あはせの第十洞東南隅とシムメトリックである。といふより外壁からみれば、同一物の一半にすぎないのである。まづ基底部の方臺、象頭はおなじであるが、さいはひ、こゝは背後が壁につらなつてゐるため、象の胴があり、後脚まであらはされてゐる。しかも象の臀部の座絡の革紐から、鐸のぶらさがつてゐるさまがうかゞはれる。そのうへには、また、山岳形があらはされてゐる。これも、やはり、たこの頭

たわけて、その壯麗さは言語に絶するものがあつたらう。けだし第九、第十兩洞にわたる、このやうな景觀は雲岡でもほかに比類がないのである。

〔南壁東隅〕 南壁東隅の營造は、中央の列柱といさゝかちがふ。(Plan V, VI, Fig. 18) 外面と側面は風化しきつてゐるが、わづかにのこる北面から、その全貌をいくらかおしはかることができる。まづ最下部の基壇は中央列柱と同様で、これになにか象頭のごとき基部があつたことも推定できる。だが、このうへは八角柱でなく、山峯のかさなる山岳形である。そして須彌山のごとく胴がくびれ、こゝを鱗のある龍身が、いくへにもまきしぼつてゐるのである。ひとつひとつの峯には、のんびりとした鳥獸のかたちがほられてゐる。(Pl. 27) この須彌山やうの上に、天宮であらうか、八角柱をもち、欄杆 (Rub. VI M) をめぐらし、璽珞をかざつた佛

Dipaṅkara Māyava



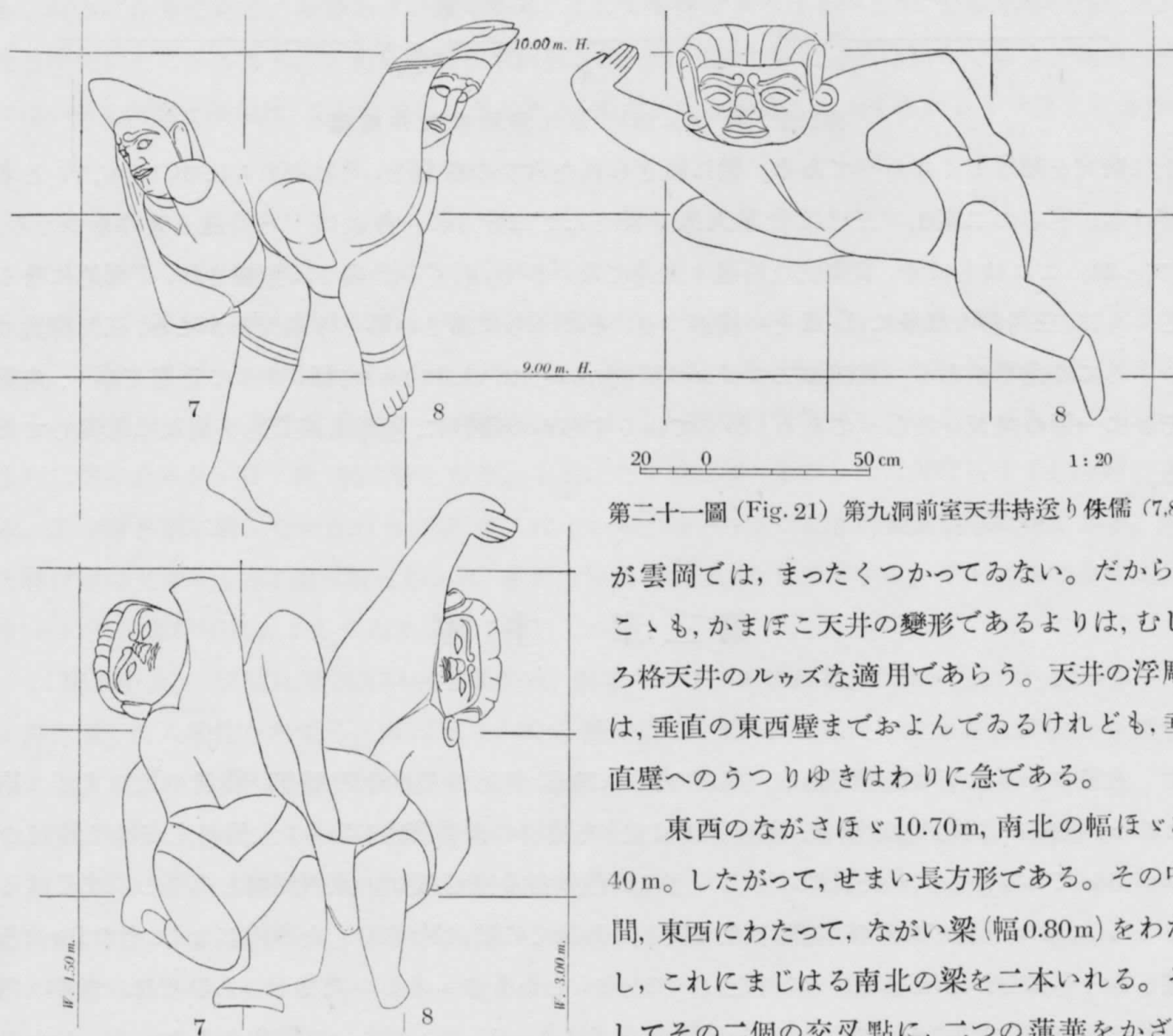
第二十圖 (Fig. 20) 第九洞前室西南柱上層

のやうな山峯をつらね、須彌山のやうに削がくびれてゐる。龍身のまいてゐることも、鳥獸のゐることも、前者同様であるが、こゝのは東南隅のものよりずっと大きい。これは兩洞にわたる中心部の造構だからであらう。こゝにも須彌山のうへに、なにか天の造構がある。欄杆があり、東北隅に小さい屋舎がみえる。(Fig. 20) もとは東南隅にもおなじやうな屋舎があつたのであらう。なほ、くはしくいへば、おそらく第十洞の側にも、おなじやうな屋舎が二つあつて、いはゞ四隅に四つあつたのであらう。そして、その中間のくぼみには、それぞれ佛菩薩の尊像を彫つてゐたのであらう。そのことは、かすかながら、この柱の外面においてうかゞはれる。要するに、この第九、第十洞間の柱は、隔壁のはしにあり、特殊な柱の役目を果したものであらう。

〔南壁上層部〕 列柱の上の桁にあたる部分には、絡繩文帯を下縁として、高さ 1.40m の小坐佛をならべてゐる。坐佛列像の上には三角垂飾がある。(Pl. 29) 三角垂飾のうへ、天井に接する最上部には、奏樂天人をおさめた龕列がある。中間に六、東の間と西の間に五の龕があり、豎笛、琵琶、腰鼓などの樂器を奏してゐる。萬字くづしの欄杆があること、北壁樂天龕と同様である。八角柱の上には三種の侏儒像がある。(1) は天井の梁をさゝへてゐるもので、片足を大斗のうへにかけ、片手をたかくあげて梁をうけてゐる。(Pl. 33-35A) 背なかあはせの一對で、ほとんど丸彫である。北壁上層にもあり、おなじやうに梁をうけてゐる。(2) は桁をさゝへてゐるもので、いまではすっかり破損してなくなつてゐるが、それでも桁の下端、唐草文様 (Rub. III J) のあるところに、さしあげた手とか、天衣の一端とかゞのこつてゐる。(Pl. 29) かういふふうに、隅をきりとらないで、なにかの裝飾をつくることは、一面また石窟の増強といふことにもなる。こゝの侏儒は一對でなく、たゞ一體、ちやうど第八洞北壁上層の帳幕におけるごときものである。(3) は大斗のうへで、兩手をたかくさしあげてゐるもの、下半身は大斗の唐草文でかくれてゐる。この手つきは、たしかに、ものをさしあげる侏儒の原型からうまれたものである。(Pl. 29) これはひくい浮彫で、小さく、前二者のごとく丸彫にちかいものではない。

## 5 前室天井

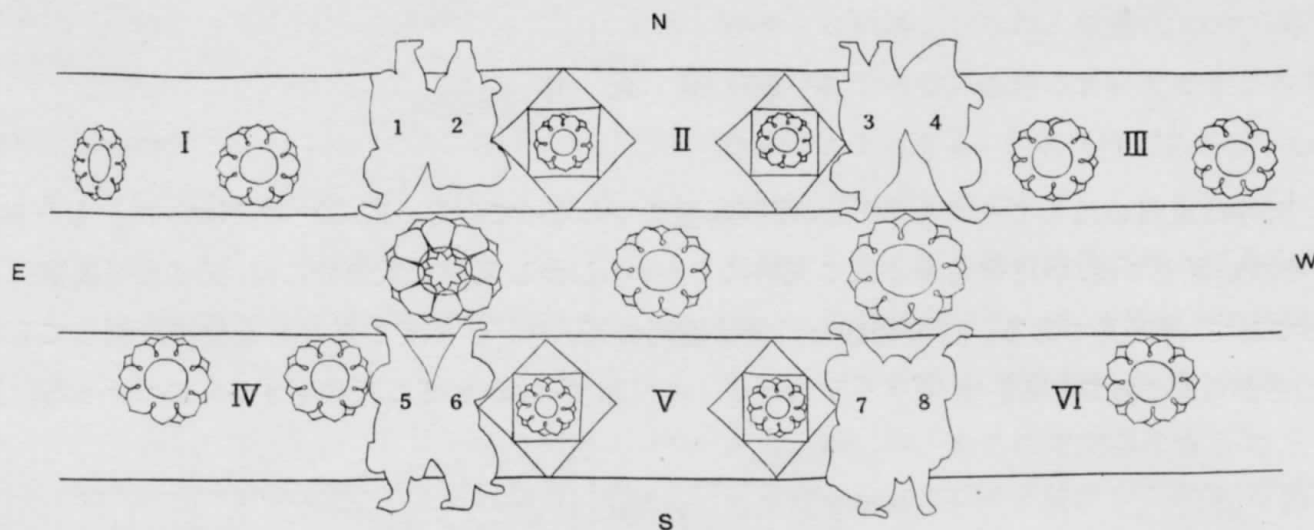
天井は東西のはしてやゝカマヅシ、東西兩壁につらなつてゐる。(Pl. 30-32, Plan VIII) したがつて、そのかぎりでは、いはゆるかまぼこ天井にちかい。しかし天井の大部分には、梁が水平縦横にとほつてゐて、格天井である。この奇妙な混淆は雲岡の工人が、かまぼこ天井を十分に評價してゐないことからおこつてゐる。中央アジアのキジル石窟では、かまぼこ天井をさかんにつかつた。だ



第二十一圖 (Fig. 21) 第九洞前室天井持送り侏儒 (7,8) が雲岡では、まったくつかつてゐない。だから、こゝも、かまぼこ天井の變形であるよりは、むしろ格天井のルツな適用であらう。天井の浮彫は、垂直の東西壁までおよんでゐるけれども、垂直壁へのうつりゆきはわりに急である。

東西のながさほゞ10.70m、南北の幅ほゞ3.40m。したがつて、せまい長方形である。その中間、東西にわたつて、ながい梁(幅0.80m)をわたし、これにまじはる南北の梁を二本入れる。そしてその二個の交叉點に、二つの蓮華をかざつ

てゐる第七、第八洞の格天井と構造的にはおなじである。南北の梁は、それぞれ兩方から二體づゝの侏儒がでて、それにさゝへられてゐる。北側の侏儒は、北壁明窓の層柱をふみ、南側の侏儒は南壁大八角柱の大斗をふむ。下からあほぐと、合計八つの大きな侏儒のため、この二つのみじかい梁はかくれてゐる。(Pl. 33-35A, Fig. 21) ながい梁は、東西壁の屋根までのびてゐるはずで、この梁



第二十二圖 (Fig. 22) 第九洞前室天井略圖

上に飛天を順序よくならべてある。梁に區ぎられた六つの區劃を、それぞれI, II, III, IV, V, VI と名づける。中心の二區II, Vだけは合掌天人をはさんで二分され、各區に三角持送り天井をつくる。(Fig. 22) これはもはや、實際的な持送り天井でないから、石ぐみの高さは無視され、平面的になると、ともに、三角形の部分には、ほそい棧がつき、そのうちにあさい彫りの飛天をかこみ、三角持送りの中心には蓮華がある。東西の二つづゝの區劃I, IVとIII, VI, においては、さらに北壁ぞひと、南壁ぞひに一帶の飛天をならべてある。かくていくすぢかの帶狀に、蓮華と飛天とを交互に配置してゐる。

### 第三章 主室

主室の平面はほゞ矩形である。東西の幅10.70m, 南北の奥ゆき西壁ぞひ隧道の入口まで約6.20m。北壁には倚坐の大佛像, 東西壁には立った脇侍の大菩薩像があり、大佛の左右には隧道の口があいてあるから、見た目にはさうたうに凹凸のある室である。東西側壁と南壁とのまじはるところは、ほゞ直角であるが、北壁と東西壁とのあひだには、はっきりした界線がなく、そのうへ、各壁ともうへにむかふほど、まへにかたむいてをり、しかもやゝまるい天井とのあひだに、つよい角をつけず、自然につながつてゐるので、穹窿天井ではないが、やゝさういふ印象をあたへる。しかし南壁は、かなり垂直にたち、南壁と各壁、また天井との界線が、やゝあきらかである。(Pl. 51-53, 70-73, Plan I, II)

構造上、特色のあるのは北壁大佛の左右にある隧道である。これは隣接する第十洞にもおなじやうにあり、第五洞にもある。本尊をめぐって一周できるやうにしたもので、佛徒が繞道の禮を pradaksina



修するためであることは、いふまでない。すなはち、尊者を右にみたてるやうにめぐるインド古來の禮法である。佛徒は塔、尊像などの聖物を中心に、つねに繞道をおこなひ、恭敬の意を表した。したがって、崇拜の對象を中心におさめた、インド古來のもろもろの聖所は、いつでも繞道のできるやうにしつらへてゐた。しかし、かういふやうに奥壁の背後に隧道をつくつたのは、バァミヤンの大立像、坐像窟、それから中央アジアのキジルの石窟などに、その例がある。とくにバァミヤンの大像、坐像窟が、もっとも構造的によく一致することは、序章にのべたごとくである。

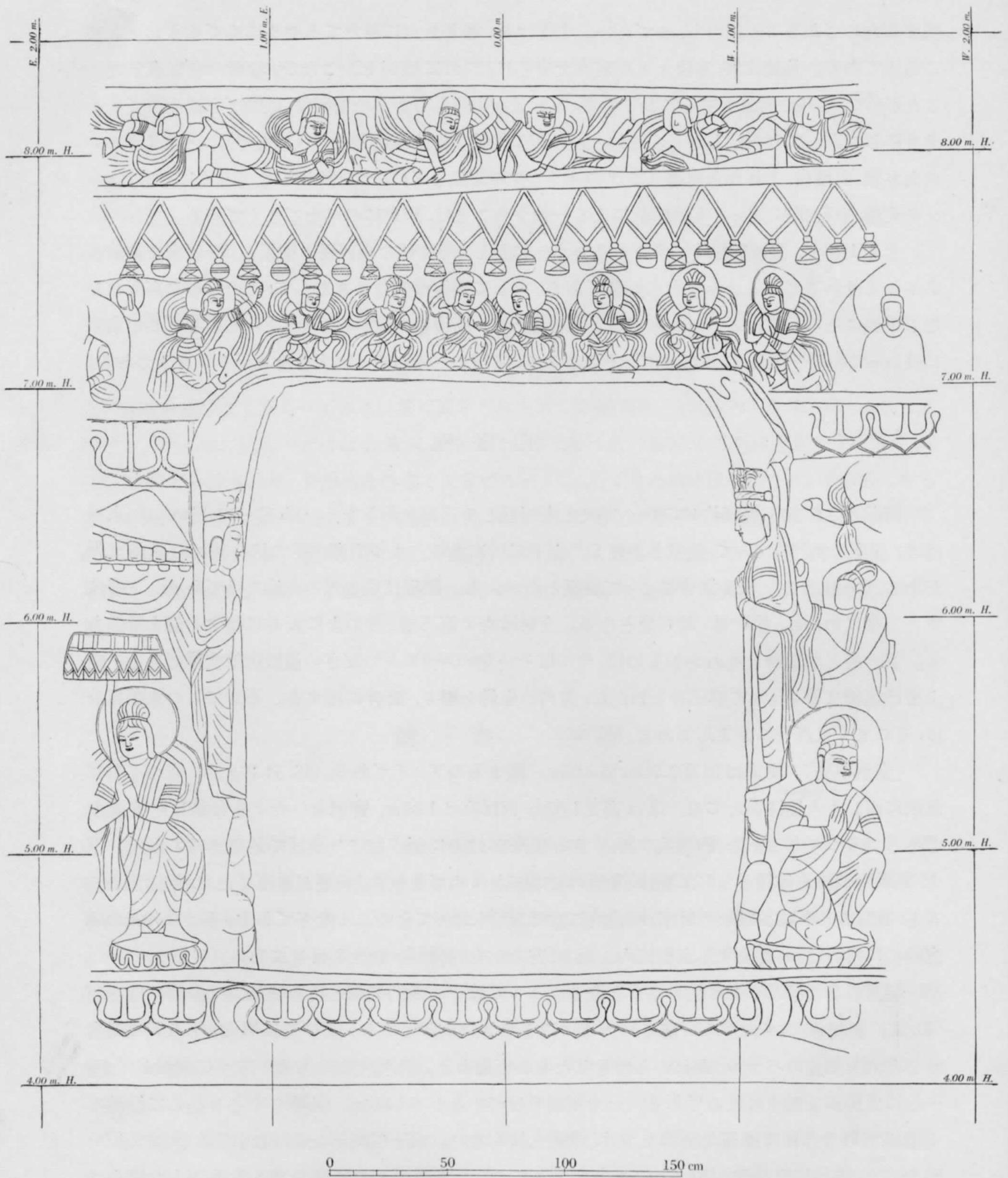
北壁大佛と、東西壁脇侍の堂々たるかまへに對し、その他の東西壁と南壁とは、細密な裝飾があふれるばかりである。みなあさい龕である。そして彫像はみなうきだして、その浮彫の高所をおなじ平面にそろへてゐる。だから南壁と東西壁とは、脇侍像のほか、まったひらである。この主室にはいつての第一印象は、この北面したながめと、南面したながめとの大きなコントラストである。

## 1 主室南壁

南壁高さ8.78m、横幅約10.70m。中央と東西部との三部分からなる。(Pl. 51-53, Plan XII) 東西部は、明窓と拱門によって、前室とおなじく上下二層になる。まづ明窓の下に約0.30mの蓮瓣文帯がある。下層はまた蓮瓣文帯によって腰壁とわかれる。腰壁は供養者の列像だけである。下層はまた二帯にわかれ、第一層、第二層となる。上層はたゞ第三層、その上に天井に接する最上層がある。第一層と第二層とをわかつものは、やゝほそい半パルメットつなぎの波状唐草文帯である。最上層は蓮瓣文帯をもつて第三層とわかれ、並列の坐佛を彫り、天井に接する。そしてこの水平区分は、そのまゝ東西壁におよんでゐる。(Pl. 58A)

〔南壁中央〕明窓は頂高2.54m、幅2.05m。隅まるのアーチである。(Pl. 54, Fig. 23) 窓のふちに東西に面した人像柱をたてる。東は高さ1.32m、西は高さ1.38m。寶冠をいたゞき合掌した菩薩形である。うづくまった侏儒(像高0.70m)が、臺座がはりに両手をさしあげて足をうけてゐる。第七、第八兩洞の人像柱とちがふ點は、身體のむきがなゝめでないこと、臺が籐座でなく、侏儒であること、寶冠のうへに拱端をうけず、構造的に意味をうしなつてゐることなどである。高さ0.48mの明窓拱額には、八體の跪坐する高髻天人を彫り、左右から四體づゝむきあはせてゐる。(Plan X)

明窓のしたは、入口拱門のうへとなる。こゝには下の拱門裝飾とのあひだに屋根形をほる。(Pl. 57) 屋根形といったのは、龕といへないほどあさいからである。要するに第七、第八洞の明窓のした六天供養のパネル、あれから轉化したものであらう。几帳やうのものゝうへに屋根ができ、中心に坐佛が安置されたのである。いま屋根形は軒のながさ1.88m。南壁の中心をなして悠然たる造構である。軒には三角垂飾をつけ、斗拱も柱もない。最下に軒とおなじながさの蓮瓣文帯を彫り、そのうへに坐佛像(高0.62m)を中心として、左右四體づゝの高髻合掌の供養天人を跪坐さ



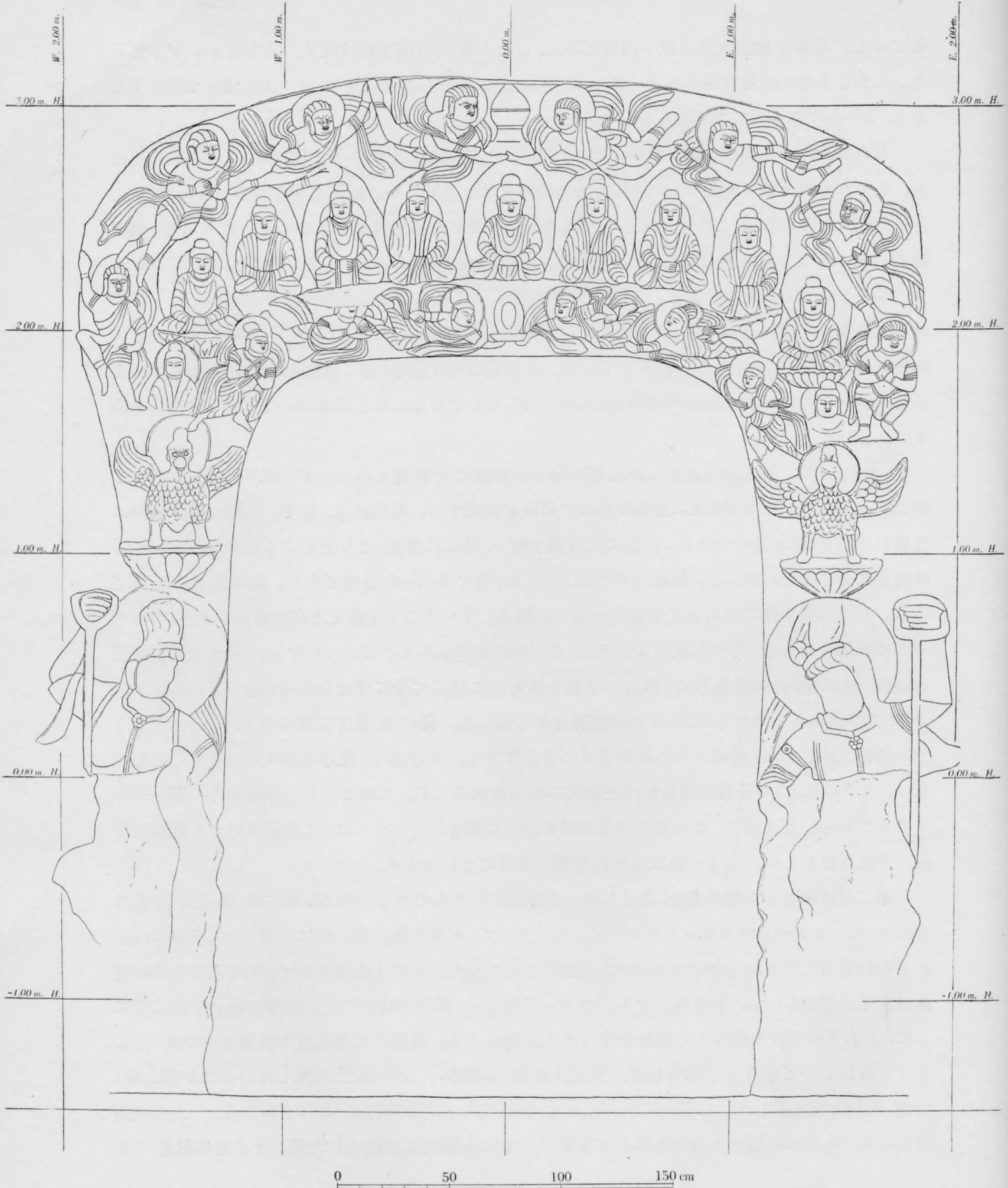
第二十三圖 (Fig. 23) 第九洞主室南壁明窓

せてある。坐佛も跪坐天人もほぼ同高であり、むしろ寶冠の高さだけ天人の方がたかいやうである。しかし本尊の坐佛は両手をまへてくみ、豊満な胸、なだらかな肩をし、やゝおくまって端坐するから、かへって堂々として大きくみえる。

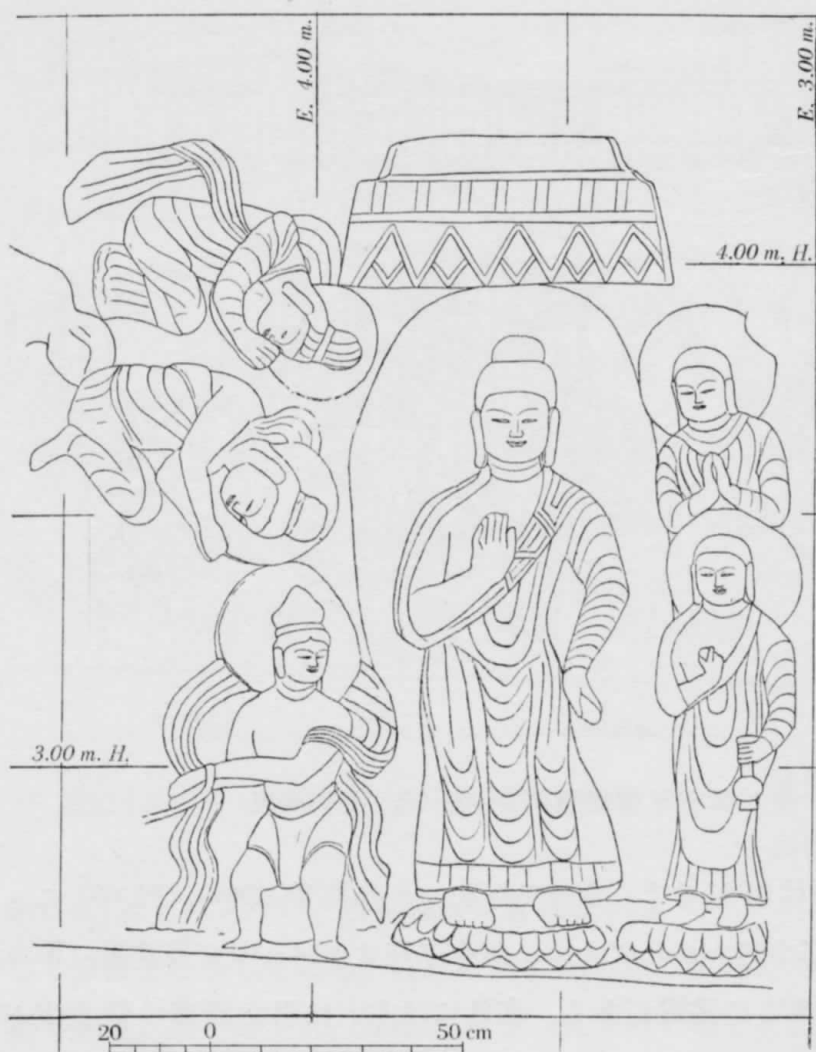
したは拱門の豊麗な拱額である。(Pl. 55, 58B, 59, Fig. 24) 拱額の高さ1.20m。この上縁と下縁を、いづれも飛天帯でかざり、中間に九體の坐佛をならべてある。坐佛はみな両手をくんである。うへの飛天たちは香爐、したの飛天たちは火光につままれた摩尼寶珠cintāmaṇiを中心にさゝげてある。飛天彫刻のいきいきとした表現は驚嘆に値する。拱門現高2.82m(もとの床まで3.00m)、下幅2.45m。うへにゆくとすこしせまくなる。両側には、拱額をうけて正面むきの鳥形をほる。(Pl. 60C) したには大きな鉢形の蓮座がある。鳥形のしたは門神像(高1.80m)である。(Pl. 60A,B) 頭を入口の方にかたむけ、ながい三叉矛triśulaをふりかざしてある。破損がはなはだしいが、西側の門神の頭部には冠上に鳥翼がみえる。現在の床は門神の足をいくらか、うめてある。もとの床はいまの床より0.20mあまりふかい。

〔南壁西部〕 第三層は高さ2.30m、幅3.00mの壁面に尖拱龕をあらはす。(Pl. 61) 龕高1.06m、幅1.10m。はでな五成の臺座に坐高1.06mの佛像を安置する。結跏趺坐、舉手、偏袒右肩。龕内には補彩の圓光、舉身光背をみる。拱額には火焰を彫り、拱端に龍形、これをうける左右柱(Rub.III C)は唐草でかざってある。この佛龕のそとは、左右まったくちがった彫像である。龕の左脇は三段である。したに叉手跪坐する比丘を蓮座のうへに彫る。うへの二つは瘦せた高髻鬚髯の老人、つまりバラモン仙者である。その異状な手つきは、たしかになにかをものがたつてある。『雜寶藏經』(大正大藏經, 第四卷, p. 488) 卷八に「外道の尼乾子nigraṅtha-putraが火衆に投じて佛に度せられるの縁」といふ話があり、この浮彫のあらはすものは、この因縁談とおもはれる。龕の右脇は二段になり、したはうつくしい高髻天人が二體、蓮座のうへにひざまづき合掌する。すなはち、左方の老人とまったく照應しない。うへには、この佛龕に背をむけた飛天二體が輕快にとぶ。これはむしろ明窓の方に関係がありさうである。要するに、この第三層は南壁東部とも相應じないうへに、この壁だけでも構圖の不統一がはなはだしい。上下の縁には蓮瓣文帯がほどこされてある。

第二層は横ながの楣拱龕を、高さ1.56mの壁面におさめてある。(Pl. 62, 63, 79) 楣拱は西壁にまはり、その全長はほぼ4.50mをかぞへる。したがって、本尊坐佛は西の隅に安置され、西壁には左わきの供養者だけを彫るといふかはった配置になってある。本尊は臺座なしで、床の上ぢかに結跏趺坐する。像高1.10m。舉身光が大きくつまんであるが、補彩が目につく。本尊の兩わきは二段にして、左右それぞれ八體づゝの高髻合掌の天人が跪坐する。南壁には因縁談の圖像が多いから、これもそのひとつであらう。『雜寶藏經』(大正大藏經, 第四卷, p. 466) 卷三「八天しだいに法を問ふ縁」の條、八人の天人がしだいに佛所<sup>に</sup>あらはれて、法を問ふといふ因縁が、これであらう。一方が來到する八人、他方が辭別する八人と解してもよい。十六人の天に圍繞された佛。まことに壯觀であ



第二十四圖 (Fig. 24) 第九洞主室南壁拱門



第二十五圖 (Fig. 25) 第九洞主室 南壁東部第二層 (兄弟比丘因緣圖)

る。楣拱額には、パルメットの複合唐草文と飛天とを交互に配し、きはめて多彩である。(Rub. II E) 下縁には半パルメット唐草文帯がある。

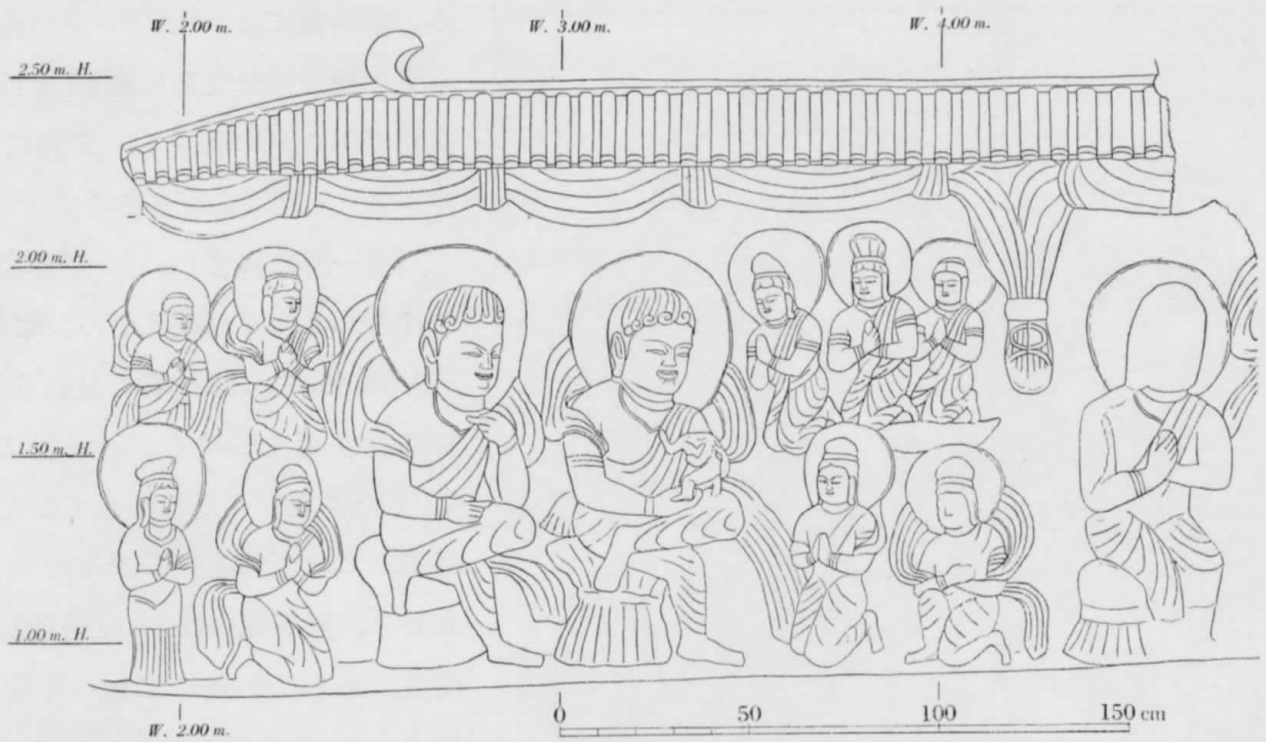
第一層は高さ1.60m、屋形龕をまうける。これも西壁までのびてゐる。(Pl. 64, 65, Fig. 26) 軒の全長4.20m、軒には帳幕をつけるが、西隅にちかく、したにながくたれてむすんだ幕がある。これで場面を二分したわけであらう。屋形龕内は、また物語ふうの構成である。中央に二體の半跏像を彫るのは、鬼子母神夫妻である<sup>1)</sup>。このはなしも『雜寶藏經』(大正大藏經, 第四卷, p. 492) 卷九にみえてゐる。その左右には二段の跪坐像をおく。右脇は五體, 左脇は四體で、いずれも合掌してゐる。屋形はふかく彫り、彫像のうへに濃いかけをつくつてゐる。

この下縁の蓮瓣文帯をへて、高さ約2.00mの供養者列像になる。しかし、いまは大部分が消滅してゐる。(Pl. 66 B)

〔南壁東部〕 明窓の東, 第三層には高さ3.10mの佛龕がたゞひとつある。佛龕といふには、あまりに平面的な構造であることを注意しておかう。(Pl. 67) 屋根形をつくり、そのしたに帳幕を六つにしぼつてゐる。軒のながさ3.00m。中央に五成のうつくしい座があり、結跏趺坐する佛像(坐高1.05m)を安置する。偏袒右肩, 右手は舉手。舉身光は後補の彩色である。左右には三體と二體の高髻天人が蓮座のうへにたつてゐる。身長約1.15m。それぞれ両手で柄のながい天蓋をさゝげる。『雜寶藏經』(大正大藏經, 第四卷, p. 471, 472) 卷五, 劈頭三つの因緣談は、天女が天よりくだり、佛に華蓋をさゝげ、説法をきくことを記してゐる。この三天女はみな過去において迦葉佛塔に供養し、八戒齋をまもつて生天し、いままた華蓋を佛に獻じて、佛の説法をきゝ聖果をうるといふのである。まさにこの圖像をよく説明する。

この層の上下には莊重な蓮瓣文帯がある。つゞいてしたの第二層は高1.70m、西端には拱門

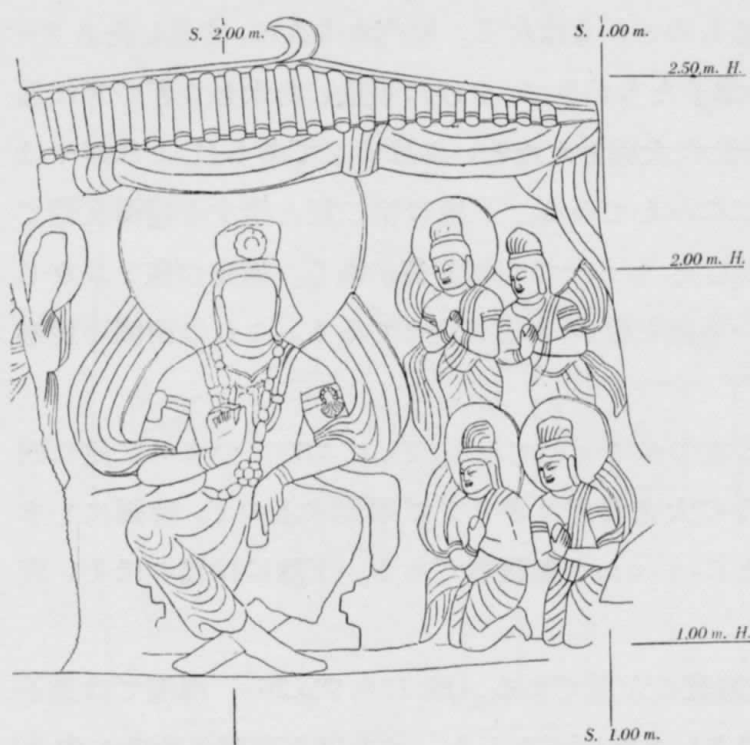
1 佐藤孝任『雲岡大石窟』北京 1924年, Fig. 31. 最初に鬼子母神と判定して注意したのはこの書物であらう。



第二十六圖 a (Fig. 26 a) 第九洞主室南壁西部第一層(鬼子母因緣圖)

の裝飾がせまってるため、第三層よりは幅がせまくなっている。その幅約2.90m。(Pl. 68) これも因縁談らしい構圖がとられ、まづ左右二つにわかれてゐる。西半は高さ0.74 mの瓦葺建築、(Rub. IG) なかに龕をきざみ佛像を安置する。まさに佛殿である。龕外には左右に男女俗形の供養者が合掌してたっている。この氣品のある建築のしたには三體の彫像をならべる。いずれも頭のまるい比丘形である。左右は、なにか座席のうへに安坐する僧、まんなかはなにも敷かないで、ひざまづいてゐる。東半は天蓋のしたにたつ舉手の佛像。高さ1.30m。左わきに比丘の立像がある。注意をひくのは右脇で、下方に高髻裸形の人物が、しばられた両手をさしだして立ち、うへには頭を伏せて合掌する高髻の二人がある。(Fig. 25) これらも因縁談をあらはすことは、うたがひない。いま『雜寶藏經』(大正大藏經、第四卷、p. 460) 卷三に「兄弟二人ともに出家するの縁」といふのを載せてゐる。佛寺建立から、弟比丘と宰相の女を國外に追放するといふすぢは、この場面を説明するのに充分である。この層の下縁には0.10mの半パルメット唐草文帯がある。上下の蓮瓣文帯にくらべると幅がせまいうへに、平面的な彫りかたでよわい。

第一層は楣拱龕である。(Pl. 52, 69) 西端は拱門の拱額に接してゐる。第二層よりはやく東へひろくなっている。高さ1.50mのあひだに楣拱龕を横ひろく彫り、中央に坐佛本尊を安置する。像高0.92m。大きな肉髻をもった禪定の坐佛である。肩の線はなだらかで、腕がふとい。臺座なしに床に結跏趺坐する。左右には八體の跪坐供養者を二段にならべ、みな合掌して本尊の方にむかっている。楣拱額にはうつくしい裝飾を彫り(Rub. IID)、三角垂飾がある。この龕形は南壁西部第一層のものと照應しない。この層を一段うへにあげれば、ともに楣拱龕となり、西部とうまく符合す



第二十六圖 b (Fig. 26 b) 第九洞 主室 西壁 第一層

るのである。

第一層下縁にはかすかに蓮瓣文帯の痕跡があるが、大部分破損してみえない。(Pl. 52) 蓮瓣帯の上端まで、もとの高さ約2.00m、そこに約1.30mの供養者立像をならべてみる。破損がひどいので、圓光をおひ正面むきにたつてゐることが、知られるだけである。

## 2 主室 東西壁と北壁

東西壁には北壁本尊に對する脇侍菩薩像が、むきあつてゐる。(Pl. 70—73) 壁面の破損にわざはひされて、兩方とも、もとのおも

かけは、ほとんどない。西壁脇侍の寶冠(Pl. 75, Rub. V A)と光背(Pl. 74, Rub. V E)の一部が、からうじて原形をのこしてゐる。現在身長5.20m、高さ0.33mの蓮座上にたつてゐるが、蓮座はもとより後補である。左手はたれ、右手は胸まへにあげてゐる。これに對し本尊は佛の倚坐像である。總高6.60m、これも後世修補の泥像である。

〔主室東壁〕 うへからしたまで壁面全體が水分による溶解のため荒れてゐる。(Pl. 73, Plan XIII) いまは後補のでたらめな佛龕と彩飾とでおほはれてゐる。しかし、層位は南壁の層位に一致し、三層あり、最下に供養者を並列したとおもはれる。左脇侍より奥には佛龕がなかつたものらしい。北壁に接する個所はすこしかゝつてをり、北壁本尊の大光背の縁が、このあたりまでおよんでゐる。

〔主室西壁〕 東壁にくらべるとづつとよくのこつてゐる。(Pl. 72, Plan XIV) 南壁とおなじ層序である。右脇侍のおくに佛龕はなかつたらしい。東壁とおなじく本尊の大光背が、このあたりまでおよんでゐたものであらう。いまは風化による崩壊と、後補の彩色とで統一をみだしてゐる。

第三層は高さ2.30mのうちに上下二龕をまうけてゐる。(Pl. 76, 78) うへは屋形龕で、軒のながさ2.50m。軒の柱のところから、ほそい柱をたてゝゐる。柱には唐草をきざむ。軒下に帳幕があり、これをしぼりあげてくゝり、屋内には高髻の二人が相對してゐるのがみえる。手に手に鉢をもつてゐる。物語ふうの圖像である。柱の左右に菩薩立像がひかへてゐる。この屋形龕のしたには楣拱龕がある。(Rub. III A) 高さ0.86m。中央に禪定の坐佛、左右に比丘が合掌し跪坐する。龕柱には唐

草文の装飾がある。うへの屋形龕と相關連するものとおもはれる。屋内の夫人は、貧窮したスダッタSudatta（須達）長者の妻、長者の留守中に佛および佛弟子たちがきて、夕げに用意した米をつぎつぎに施してなくなってしまったといふ。布施のため現世の大福をえたといふはなしであるが、これがやはり『雜寶藏經』（大正大藏經，第四卷，p. 459）卷二にみえてゐる。下縁は第二層と境する蓮瓣文帯である。なほ西脇侍の大光背のうへには大半破損した、もう一つの屋形龕がある。南側の龕とおなじ形式で、龕内はすでに消滅するが、すがたのよい菩薩立像が、わきにたつてゐる。これは南側の屋形龕にみる龕傍の像と同様であらう。

第二層は高さ1.60m、こゝには南壁楯拱龕の右半がついてゐる。(Pl. 77A, 79) つまり二段に四體づゝの高髻供養天人が合掌跪坐する。右脇侍の大光背ぎりぎりまで彫刻するので、構圖にしまりがない。しかし、雲岡の彫刻家は、そんなことに、いっかう無頓着である。下縁には幅のほそい唐草文帯がある。

第一層は高さ1.58m、これも、また南壁の屋形龕の左翼である。(Pl. 77B, Fig. 26b) 南壁では鬼子母神の因縁談であつたが、區ぎつてあるから、獨立した場面であらう。すなはち交脚菩薩像が中央にゐる。像高1.20m。彌勒像であらうか。その右脇にひかへる籐几の像は南壁の隅にある。破損してゐて、頭部その他のあきらかでないのが残念である。彌勒と對問するなにかの因縁談であらうか。交脚像とのあひだに、上身だけ、のりだしたやうな合掌供養者がある。交脚像の左脇は二段になって、高髻の天人が合掌してひざまづいてゐる。こゝでは左右の像がシムメトリカルでない。

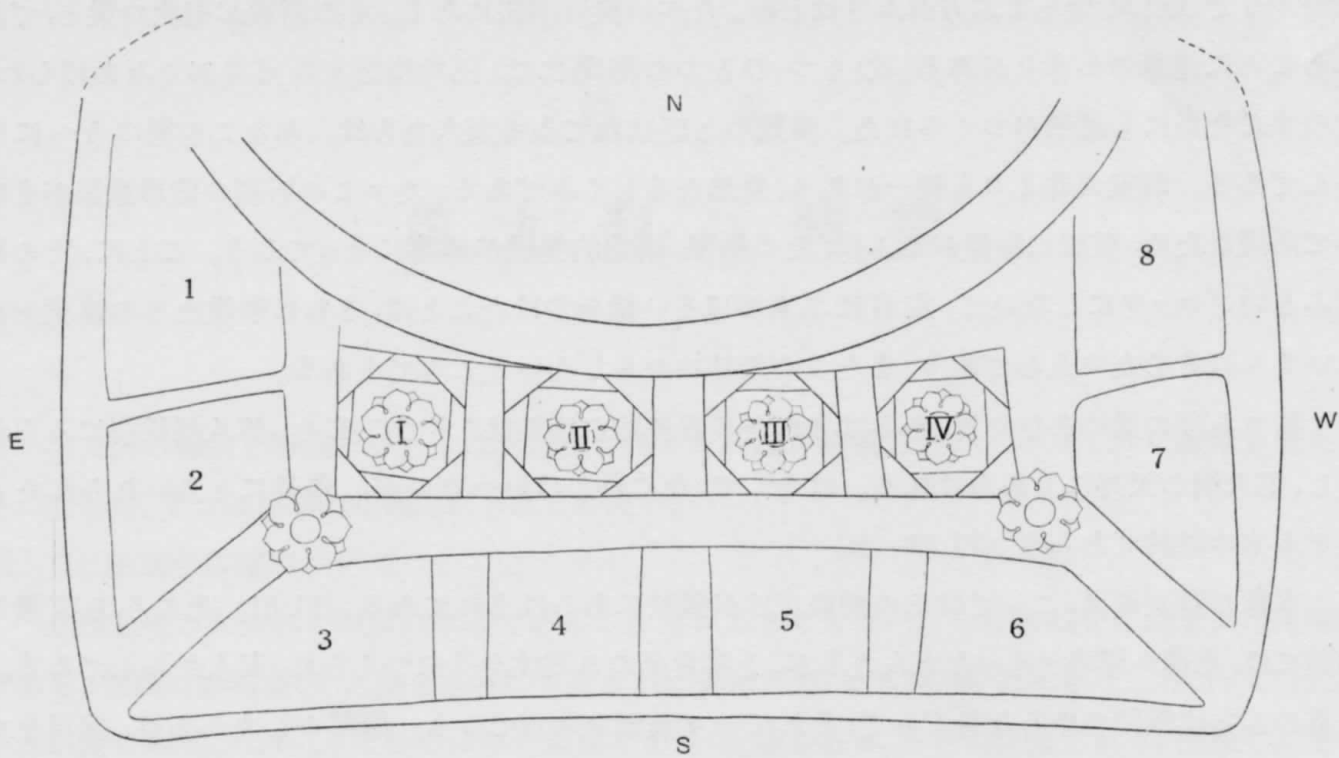
第一層の下縁は、また蓮瓣文帯である。そのしたは、また供養者立像を彫る。たゞ現在はほとんど消滅しつくしてゐる。

最上層はかなり壁があれてゐるが、天井との境に三角垂飾帯、そのしたに小坐佛の列像のあつたことはわかる。この部分の補彩ははなはだしい。(Pl. 78)

〔主室北壁〕本尊大佛は表面がすっかり損じてゐるため、いまはうへに粘土をもりあげて、全然あたらしい佛像をつくつてゐるのである。(Pl. 70, Plan XI) しかし、だいたいの大きさや姿勢からして、もとのものを知る手がゞりは若干ある。いま像高9.60m、倚坐像である。足もとは少々うまってゐる。多分はじめは第十三洞、第十六洞のやうに、ひくい蓮座でもあつたのかとおもふ。右手の擧手はまちがひない。左手もさしだしたまゝであるが、はたしてこんな形であつたらうか。むしろ、第八洞上層本尊の衣端をにぎる捻手形の方が妥當であらう。頭の螺髪はもとより不可、ただその像の大きさなど、案外もとの姿をのこすのかとおもふ。現在の臺座は高さ1.40m、大きさはこんなものであらうが、かたちは全然でたらめの改作である。

擧身光背が北壁の大部分をつゝんでゐるが、いまは右肩に火焰と供養天人の一部がみとめられるだけである。頭上の天井には、光背の先端だけが、ふしぎにのこつてゐる。その光背をおほふて天井にはまるい天蓋がある。(Pl. 81)





第二十七圖 (Fig. 27) 第九洞主室天井略圖

〔隧道〕 北壁の兩わき、本尊臺座の左右からトンネルがひらかれ、背後をめぐって一巡できるやうになってゐる。(Plan I, II) 高さは2.70m。入口の縁はすでにまるく溶けてゐて、どんな造構であつたかわからない。(Pl. 71) トンネル内部もほとんど溶けてゐるが、北壁は、からうじてなにかあつたといふことだけ判断できる。(Pl. 85-87) 最下におよそ1.30mの俗形僧形の供養者像をならべ、そのうへに欄間のやうな框どりをつくり、それに飛天をいれてゐる。そのうへは天井で、蓮華と飛天とが、いっぱい彫つてあつたらしい。南壁はまったく風化してなにもわからないやうであるが、第十洞の例からおすと、甲冑の武人列像であつたかとおもふ。このなかにたつて、満壁の飛天と行道の列像をみてみると、あたかも繞道する人たちの登音を、いまにきくおもひがする。

### 3 主室天井

東西壁、南壁の最上層に三角垂飾帯がめぐり、これまでが周壁である。(Pl. 80, Plan XV) それからうへは天井、東西が8.00m、南北は東壁ぞひで4.40m、西壁ぞひで4.80m、中央は本尊天蓋がでばつてゐるため2.20mしかない。この三角垂飾帯のうへに飛天の雁行する一帯がある。これは天井なげしにあたる場所である。本尊の天蓋が弧状に天井をおほふから、けつきよく、天井はコンケヱヴにくひこまれた矩形である。(Fig. 27) この矩形は四方からでた支輪にもちあげられて折上げ天井になってゐる。そのあがりかたは、わづかである。のみならず、周壁からでた支輪はふとく、

梁のやうで、むしろ梁とよぶ方がふさはしい。ながい梁は南側にある。その両端が南北の梁と、であふところに蓮華のかざりがある。ひとつ、ひとつの格間には、三角持送りの天井がくみあげられ、そのまんなかにも蓮華がつくられた。多数のとびはねてゐる天人たちは、みなこの梁のうへにならんでゐる。前室天井よりも統一があり、整然たるしくみである。たゞこの石窟の造形意慾がきはめて活潑なため、壁面に彫像があふれ、その結果、構造的契機が稀薄になつてゐる。ことに、その梁をふといブロックにしないで、左右に二本のほそい縁をつけたことは、さらに彫像たちの跳梁をほしいまゝにさせたゆゑんであり、またこの天井のおもしろいところでもある。

折りあげの梁のあひだに、あらはされた多面多臂の諸神は、すでに第七、第八洞拱門にみられたし、第六洞の天井にもあらはれる。はたして、なに神とはいへないが、佛徒にとりいれられたインド本來の諸神であらう。(Pl. 82—84)

本尊の圓天蓋は、こゝではその前面だけが弧状にあらはされてゐる。(Pl. 81) そのうち天蓋の内面には、花繩か瓔珞をもった天人たちが、上半身をのりだすやうにつくられ、五人ならんでゐる。天蓋のふちは欄間のやうな骨ぐみで、それに一々飛天を彫つてゐる。欄間のしたからは、折目をつけた布片かざりが、たれさがつてゐる。そのうすくたれた下端は、ほとんど破損してゐる。天井の破損は左右両端がひどく、前面はわりにのこつてゐる。

## 終 章

# 第九洞の特徴

### 1

第九洞の構造と彫刻については、以上でほゞもれなく敘述された。いまこれに概括をあたへるに際して、まづ圖像學的な觀點からはじめたい。

#### (1) 石窟の本尊について

主室北壁の大佛がこの窟の本尊であることはいふまでもない。これは椅子に腰をかけた倚像である。雲岡の諸石窟中、大像を本尊にしたものは曇曜五窟、第五洞、第十洞、第十三洞と、この石窟の九石窟である。しかし、それらは多く坐像であり、立像であり、また交脚像である。倚像であるのはこの洞だけである。たゞ、この窟に東隣する第八洞北壁上層の五尊像は中心に倚坐佛をもつ。これは石窟本尊ともみられるものである。そして、それは、第七洞北壁上層の交脚菩薩像に對應したものであった。ちやうど、この第九洞の佛倚像も、それとおなじやうに第十洞の本尊交脚菩薩像と相對してゐるのであらう。つまり第七洞、第八洞一對窟の意味を、そのまま、こゝに踏襲したものであらう。したがって第十洞の彌勒菩薩に對し、この本尊は釋迦佛であらう。これに菩薩の立像が左右に脇侍となり三尊佛の形式をとつてゐる。佛菩薩の三尊形式を石窟主尊とするものは、雲岡大窟中たゞこの第九洞のみである。

#### (2) 佛立像、佛坐像、佛交脚像について

佛立像は、まづ前室東南隅の須彌山上の天宮にみられる。これは過去のDipaṅkara Buddha定光佛である。それは尊像であるとともに、本生談の一節をかたつてゐる。つぎに結跏趺坐の佛像は石窟内いたるところにみられる。右手をあげ、左手は衣端をにぎつて膝の上におくをつねとする。二佛ならんだのは、過去のPraibhūtaratna多寶佛と現在のŚākyamuni釋迦佛をあらはす。單獨のものは、ほとんど釋迦佛であらうが、前室西壁の北龕のは實子、Rāhula羅睺羅に初對面の釋迦佛である。したがって、めづらしい手つきである。主室南壁には『雜寶藏經』のNidānas因緣談にかたられる釋迦牟尼佛がしばしばあらはされてゐる。

過去の諸佛はいたつて多い。みな結跏趺坐のかたちである。拱額内に七體ある場合は、過去の七佛としてよいであらう。けれども、こゝでは、ほとんど定數がない。むしろ場所しだいの感がある。したがって無數の過去佛が前面の八角大柱をうめ、主室、前室の最上層を、あますところなくうめる。過去無量劫中の佛は、その數つくるところを知らないのである。けれども、その表現の形式は、さきにもいったやうに (a) シムメトリイの通肩と (b) 右肩、右腕を衣端ですっぽりつゝんだも

のとの二種しかない。(Pl. 58, 66) これは千佛獨特の形式である。そして、これを、かならず交互にならべておく。千佛以外に、この禪定の坐佛があらはされるのは、主室南壁中央の屋形内、また主室西壁第三層の佛龕内である。(Pl. 57, 76) 第七、第八兩洞にはこのやうな例はなかった。なほ前室北壁の彌勒菩薩の寶冠に、禪定の結跏趺坐佛のあったことを想起しなければならない。(Pl. 15 A, B)

交脚像は通例寶冠をつけた菩薩像にかぎられてゐる。(Pl. 17) しかし第九洞前室西壁上層には<sup>usnisa</sup>肉髻のある佛像で、交脚してすわったものがある。(Pl. 18) この壁と背中あはせの第十洞東壁上層もおなじである。これらは、ともにその對壁の交脚菩薩像にあはせるため、したことであらう。きはめてめづらしいが、第七洞、第八洞でも例のあることである。

### (3) 菩薩交脚像、菩薩半跏像について

菩薩形交脚像は前室東壁上層、北壁下層東西にある。(Pl. 15, 17) いづれも右手が舉手、左手が俯手形だが北壁東龕の像が、めづらしく合掌してゐるのは修理の結果であらう。彌勒像であることは、寶冠中の化佛によつても知られる。菩薩半跏像は前室東壁上層に、交脚菩薩の脇侍として、大きく相對してゐるが、樹下に坐してゐることによつて、太子思惟像とみてまちがひない。(Pl. 17) いつも原則として交脚菩薩像の脇侍としてあらはされる。

### (4) 脇侍について

この石窟では、まだ脇侍形式がさだまらぬ。主室大佛の三尊形式をのぞいて、前室西壁上層龕、同下層龕ぐらゐがはっきり脇侍の菩薩立像をあらはしてゐる。(Pl. 1) 前室北壁下層交脚菩薩像の片脇侍も、場所の関係で一方が略されたのであらう。これらはあきらかに菩薩像とみてよいが、なに菩薩であるとはいへない。また天人像を脇侍とした場合がある。いまかりに寶冠のあるなしによつて區別しておかうとおもふ。さらに、前室北壁上層などは龕傍に比丘の立像がある。(Pl. 13) これもまれな例だが、一種の脇侍としてあらはしたものである。とにかく、こゝでは、すでに三尊形式は、はっきり成立してゐる。しかし、それにしても、そのほかの表現がみられないほど固定してはゐないのである。一尊の例、顯著でない天人や比丘たちにとりまかれた例は、第七洞にくらべるとすくないが、いくらかあるのである。いひかへると、菩薩、天人、比丘のすがたの供養讃仰者たちにとりまかれ、それ自身禮拜されうるほど威嚴のある菩薩立像にともなはれない主尊の佛龕が、いくらかはあるのである。一般に第九洞主室は、因縁談をあらはした佛龕がつくられてゐる。したがって脇侍その他が物語の内容に應じて形をかへ、尋常でないのはやむをえない。

### (5) 高髻天人、逆髮天人について

天人は高髻である。顔に柔和な表情をしめし、姿態は女性的にやはらかい。上身は裸形で、したにはながい裳をつけてゐる。童子は逆髮で、あるひは子供っぽく、あるひは大きな眼が怒りっぽい。だいたい全裸で、みじかい腰衣をつけてゐる。天人も、童子もきまつて、右肩から左わきにならぬめに天衣をかけ、そのはしは左右にひるがへつてゐる。圓光がある。佛龕のわきに跪坐するものと

飛行するものと二種あり、ともに佛陀に對して恭敬禮讚しゐる。逆髮形はもとより天の男子である。高髻形は、かならず女性とかぎるわけにはいかぬけれども、作者の意圖はおのづから優美な姿をねらつてゐる。(Pl. 41) 天の樂人たちはみな高髻形である。天の綵女といひたいところである。第八洞南壁のやうな奏樂の童子はみられない。跪坐合掌のかたちには、いづれも大した變化はない。しかし飛行のかたちは千變萬化である。だいたい、第七洞、第八洞の飛天の形式に似てゐるが、數體の飛天をつらねた帶狀の表現をみると、かれとはちがつた、あたらしい着想がある。前室天井東西梁に、ジグザグ形式をもちひて縦にならべたものとか、主室天井下縁に雁行形式をもつて、横にとばしたものが目だつ。(Pl. 31, 80) 飛天をもつて波狀文様をつくるわけであり、これは第六洞にも踏襲された。

童子は、また、ものをになふ侏儒としてもあらはされる。(Pl. 20) 丈がひくゝ、脚のみじかい侏儒であることもあるが、かならずしも、さうとかぎつたわけではない。大きな物をになつて怪力をしめしてゐるのは、ギリシアのアトランテスのたぐひである。それはガンダラにもあつた。たとへば前室南壁列柱のうへにもちひたものがあり、基部にもあり、前室東西壁の蓮瓣文帶のしたにもある。さらに、すっかり原義をうしなつてゐるが、前室北壁層柱各層の童子も (Pl. 50)、もとはといへば、アトランテスであらう。これらの侏儒はまた、前室桁の肘木や、梁の肘木としてさかんにつかはれてゐる。(Pl. 34) その用法は第七、第八洞にもないことはないが、この洞と第十洞とに、とくにさかんである。これらも、もとより天であらうが、ごく地位のひくい、肉體の力をもつて奉仕する神たち、いひかへるとヤクシャYakṣa(藥叉)たちであらう。

#### (6) 武裝天人, 多臂多面天人について

これとちがひ、おなじ逆髮形であつても、もう一段地位のたかい存在がある。一般には天神といへようか。多くの眷屬をしたがへた一類の統率者である。梵天であり、帝釋であり、天王であり、金剛力士であり、阿修羅である。前室北壁の一對、拱門兩側の一對、主室南壁の一對は (Pl. 60)、みな甲冑をつけた武裝神、かならずしも金剛杵をもたぬが、金剛力士であり、門神であらう。主室天井梁間は逆髮の裸形である。(Pl. 82, 83) 多面多臂の神像アスラAsura(阿修羅)のたぐひであらう。さきのヤクシャたちとアスラたちのあひだには、根本的相違はみとめがたい。

#### (7) 剃髮形について

前室北壁東西上層龕傍にみるやうな剃髮形は、あきらかに比丘である。(Pl. 13) 僧衣をつけた釋尊の弟子である。しかし、おなじ童顔で、顔がまるく、蓮華中に顔をだす化生aupapādakaがある。清淨無垢の化生を、そういふふうにあらはしたのであり、戒行にまめな比丘たちを化生のごとく清淨無垢に感じたのである。また、前室東南柱の天宮上部ではガランドを手にしてならば、前室層柱の柱頭ツクハ承花のあひだにも合掌してあらはされる。(Pl. 12, 27) これもまた一種の化生であらう。

#### (8) 木生談, 因縁談の表現について

この石窟には因縁談をあらはす造像がかなりある。いまそれらを經典内容とたゞしく一致させることは、きはめてむつかしい。壁畫の描寫のごとく情景をこまごまとしめし、背景や人物の特色をこまかくあらはすといふことがないからである。因縁談を表現するには、いくつかの場面を按配し、その時間的推移を知らせることが必要であるが、雲岡彫刻家は、この點にあまり考慮をはらっていない。それができてゐるのは前室腰壁にある浮彫シャマ本生にかぎられる。(Pl. 19-26) これはおそらく西來の粉本があつて、それが、ほゞそのままうつされたものであらう。その他はみな尊像本位であり、佛龕を單位としてゐる。尊像、佛龕をつくつて、それを説明するなにかの特性が、わづかに附加されるといふやり方である。

前室では

- a) 定光佛本生(『過去現在因果經』卷一)…………… 東南隅柱天宮北面(Pl. 27)
- b) 羅睺羅因縁(『雜寶藏經』卷十)…………… 西壁下層北龕(Pl. 6)

主室では

- c) 天女華蓋供養因縁(『雜寶藏經』卷五)…………… 南壁東部第三層(Pl. 67)
- d) 兄弟二人出家因縁(『雜寶藏經』卷三)…………… 南壁東部第二層(Pl. 68)
- e) 尼乾子投火因縁(『雜寶藏經』卷八)…………… 南壁西部第三層(Pl. 61)
- f) 八天次第問法縁(『雜寶藏經』卷三)…………… 南壁西部第二層(Pl. 62)
- g) 鬼子母失子因縁(『雜寶藏經』卷九)…………… 南壁西部第一層(Pl. 64)
- h) 須達長者婦獲報因縁(『雜寶藏經』卷二)…………… 西壁第三層(Pl. 76)

などみなこのやり方である。たゞ、ちがふのは明窓である。これは龕形をなさず、また靜的な尊像をもちひず、動的な浮彫表現のうちに兩壁相對して物語を展開してゐる。

- i) 龍樹菩薩問答縁(『付法藏因縁傳』卷五)…………… 明窓兩壁(Pl. 62, 64)
- j) 鬻賣りバラモン因縁(『付法藏因縁傳』卷六)…………… 明窓兩側(Pl. 46 A,B)

明窓兩壁の圖像は解説(Pl. 40)のうちで二解あることをしめしたが、こゝにあげた諸因縁談がみな曇曜の『雜寶藏經』にでてゐるのみならず、(c)天女華蓋因縁、(d)兄弟二人出家因縁、(e)尼乾子投火因縁、(f)八天問法因縁のごとく、とくに他の書にあまり載せない因縁談があるのを見ると、明窓の浮彫も曇曜譯の『付法藏因縁傳』につたへる龍樹菩薩の問答縁とした方が妥當かとおもはれる。(a)定光佛本生、(b)羅睺羅因縁は他の洞中にもある。佛像であるとともに、その佛の前生に直結する本生である。定光佛の本生は『過去現在因果經』の劈頭にも説かれるところで、五、六世紀の造形美術のうへにはさかんにあらはれた。(g)鬼子母因縁は、この洞がこの時代における唯一の造例だが、しかし、これは定光佛本生、羅睺羅因縁とともにガンダハラ藝術のうちに、すでにその表現をみる。これら(a)(b)(g)は、それぞれその形式のもとづくところが、多少追究できるけれども、その他のもの(c)(d)(e)(f)(h)(i)(j)は、まったく先例をみない。全然粉本がなかったとはいひきれない

が、翻經上で曇曜が『雜寶藏經』をつくった程度に、造形上でもかなり獨創的にその圖像を構成していったものとおもはれる。そういふ意味で、もつとも曇曜のいぶきが、つよく感ぜられる洞窟である。おなじ一對窟でも、第十洞になると、やゝ事情がちがふやうに見える。

(9) 龍虎, <sup>Nāga</sup>龍形について

彫飾尖拱龕の拱端には龍, また虎の彫飾がしばしばほどこされてゐる。前室では北壁明窓, 同上層東龕, および西壁下層, 主室では南壁西部第三層がこれである。(Pl. 9, 14, 6, 61) それらは頭部と前肢とをあらはすが, 尾端がいずれもはつきりしない。本來であれば, 獸身がのぼって拱梁となるのである。その例は第七, 第八洞その他では, いくらかみられたが, この第九, 第十洞にかぎって, この獸身をやめて, 飛鳥の列にかへたり, 飛天の列にかへたりして, 實に彫刻と裝飾との過剰をしめしてゐる。これら拱端の龍虎は, そのかたちをいふと漢代の傳統にもとづくものだが, さらにこれを佛教化し, インドのナガ(龍)と習合したものが前室東西隅の須彌山をまく龍身であらう。(Fig. 18)

(10) 獅子像について

坐佛本尊のわきに獅子を彫るものは前室に六ヶ所ある。東西兩壁の上層, 下層の諸龕, 北壁下層東西兩龕等である。(Pl. 6, 7, 15) これらは形式的であり, 非寫實的であるが, 第七, 第八兩洞の獅子と, よく似てゐる。一般に, 交脚像の左右には須彌座わきに獅子をつけることが多い。これは第七, 第八洞で, すでにさうであつた。こゝの主室本尊の兩わきに獅子がついてゐたかどうかはわかりにくい。第八洞上層の佛倚坐像には, たしかに獅子があるのだが, 第九洞ではなにぶん床がかはつてゐるので, たしかなことはいへない。獅子はもとより轉輪聖王なり, 佛なりの獅子座<sup>Sinhāsana</sup>の意である。ガンダラ美術では寫實的な獅子が, こゝではかなり裝飾的にあらはされてゐる。

2

つぎに, この石窟の構造と裝飾について觀察してみよう。

(1) ふきはなし列柱

第九洞, 第十洞の共通性は, ふきはなしの列柱を前室南壁につくつたことである。これは第十二洞にもあるが, よそにはない。中央アジアの諸石窟にも, アフガニスタンの諸石窟にも, ふきはなしの石柱をつくつた例はない。しかし, 最初からなかつたものだとは, かならずしも確言できない。たゞ現存するものでいへば, ガンダラの寺院建築, あるひはインド窟院の直接影響かとおもはれる。しかし中國における古來の木造建築をかんがへると, ふきはなしの列柱があつてもよいわけである。たとへば四川省萬縣その他の岩壁にうがつた横穴石室墓をみると, <sup>1)</sup>その門口を建築的にかざ

1 V. Segalen, G. de Voisins et J. Lartique, *Mission archéologique en Chine*, Tome I, Paris 1923, Pls. LXII—LXV.

り、この前面とかなりよく似てゐる。山東省嘉祥縣の武氏石室の祠堂正面も参考になる。<sup>1)</sup> 中國に本來、吹きはなしの柱がなかったとは、ちょっといへないわけである。だから、たゞちにインドに吹きはなし列柱の源をもとめることは危険である。

## (2) 天井

前室は格天井であるが、まるく東西側壁に移行して、(a) かまぼこ天井の氣持を存してゐる。これはいくらかキジルの的である。主室はめづらしい(b) 折りあげ格天井である。さういへば、前室も南北から侏儒でさしあげられてゐるのは、折上げ格的でもある。(Pl. 30) これに似た構造の第十二洞前室は、この種の侏儒をつかつて、あきらかに折上げ天井をつくつてゐる。第九洞主室の四方からでた梁をみるのに、梁いっぱいのにびあがったやうな天人を一人づゝ彫つてゐる。これも、もともと、侏儒の持送りから脱化した意匠といへよう。この折上げ天井も敦煌から中央アジア、アフガニスタンにまでさかのぼるが、中國の木造建築にもありさうな構造である。(c) 格天井の梁の交點には蓮華をおく。これは常道である。そして梁のうへにも格間にも飛天を彫る。(Pl. 30) その彫り方は繁縷でさへある。第七、第八洞にくらべて格天井の構造に實質さが無い。みせかけて緊密感にとぼしい。構築形式のよわいことからみても、第九洞、第十洞が第七、第八洞以後の造營であることをかたつてゐる。格天井は、その起源をインド窟院までさかのぼるが、他方、中國の木造建築でも藻井の名でふるくから有名である。(d) 三角持送り天井は前室でも、主室でも、格間を區ぎつて、そのなかに三角持送りをつくつてゐる。そしてそのまんなかに蓮華をいれる。これは第七、第八洞ですでにみた方式だが、これもまた敦煌千佛洞にさかのぼり、キジル、バミヤン、そしてつひにガンダハラにまでいたることは、すでにのべたとほりである。(本書、第五卷、p. 31) この洞では、もはや構築的意義なく、單なる裝飾圖様である。

## (3) 隧道

主室本尊のうしろをめぐる通路がある。(Pl. 85) これは第五洞にも第十洞にもあるが、その他にはない。これはあきらかに中央アジアのキジルの形式である。けれども主尊大像のわきから、そのうしろをめぐるといふやうなものはない。みな主尊をふくむ龕像で、その兩側とそのうしろとに直角に通路がつらなつてゐるものである。このものは、むしろバミヤン大像の背後にある通路、あるひはその坐像窟における背後の通路に、より近似性がある。ガンダハラ乃至古代インドでは、繞道の風はもとより古くからさかんであつたが、尊像をめぐる石窟の構造ができたのは、いはゞ第二期(300—650 A.D.) グプタ朝以後で、さういふところに、この構造の源があるのであらう。

## (4) 壁面の構成

石窟全體を建築物のやうに構成することは第九、第十兩洞の顯著な特色である。その點で、これにもっともちかひのは第十二洞であるが、第六、第七、第八の各洞もべつの意味で建築的である。

1 關野貞『支那山東省に於ける漢代墳墓の表飾』1916年、Fig. 4。



つまり雲岡中央地区では、かういふ構造的傾向がとくにつよかったのである。だいたい、壁面をたゞしい層位に區ざることが指摘できる。すなはち、この石窟では明窓、拱門に應じて二つの層をおき(Plan IV)、各層の境にかならず裝飾文様の縁飾をつける。明窓や拱門には拱額、屋根、楣、柱などをまうけ、天井には格天井をくむ。前室の列柱はもちろん、きはめて建築的である。さらに建築裝飾の効果を發揮するために各種の龕形、柱、裝飾意匠が應用される。

主室壁面には因縁談が多い。この本來、繪畫的、敘述的たるべきテーマも、こゝでは建築構造としての龕形に拘束され、敘述にかならずしも必要でない佛龕が、つねにおかれる。といふよりは、まづ龕の位置がきまり、つぎにその彫像が考慮されてゐる。中央アジアの石窟壁面は多く壁畫によって本生談、佛傳、因縁談等を表現したが、この洞のやうに圖像に關係のない龕形はあがゝれなかつたのである。龕形があれば、それはかならず屋内をものがたる道具であつた。雲岡では、龕形は尊像に密接して、きりはなせない光背とおなじやうなものであつた。この第九洞、第十洞は、とくにその主室において龕形は小さく、龕傍の人物がにぎやかで、龕のもつ統制力はにぶい。その點、第七、第八洞の、がっちり龕の構成からなりたつ石窟とはちがふ。おなじ建築的といつても、第七、第八洞は、龕構成的といふか、石造建築的といふか、とにかく非木造建築的である。それに對し、第九洞、第十洞のもつ特色はいはゞ木造建築的だといへる。つまり、龕構成の統制力がこんなによわいののに反し、木造建築の意匠が、いたるところにあらはれてゐるのである。たとへば、まづ、この石窟の南壁正面が軒ぐみと列柱とをつくり木造建築ふうである。なかにはいれば前室北壁正面に木造ふうの大門がある。左右をみると東西兩壁の上層に大きな屋形龕があり、最上層の樂天龕列には、萬字くづしの欄杆がある。主室にはいれば、南壁窓下の屋形(Pl. 10)をはじめ、その他の屋形龕のみならず、南壁東部第二層には屋根から基壇までそなへた佛殿がある。(Pl. 68) 第七洞、第八洞では、まだ、かういふ屋形龕はあらはれてゐない。

##### (5) 龕形について

この石窟であらはれる龕形は(a)尖拱龕、(b)楣拱龕、(c)屋形龕の三種である。尖拱龕は主室南壁にたゞひとつ明瞭であるが、前室に六つと明窓の外がは、門口の内がはの圓拱に見えるものも實はみな尖拱龕である。(Pl. 6, 7, 9, 55) 楣拱龕は前室に二、主室に三。(Pl. 15, 52, 53, 76) 屋形龕は前室に二、主室に四。(Pl. 17, 18)

こゝの尖拱は、みな華麗をきはめ、拱額の上縁下縁に、こまかい飛天や飛鳥を密接してあらはす。そのふかい彫りは、さながら透彫をみるやうで、そのため拱額の建築的な力はいまいになり、その尖拱の頂もはっきりせず、圓拱のごとくみえるのである。このことは龕傍の柱がないことにも關係がある。第七、第八洞では、柱やうのものが、なにかあつた。あるひは頭だけの臺のやうなもの、あるひは花束やうのもの、いづれにしても、とにかく拱端をうけるといふ意識はあつた。第九洞でそれのみられるのは前室最上層の樂天の龕だけである。(Fig. 13) その他はどこにも、さういふ

意識がみとめられない。それで、明窓のカリアティデスは遊離してしまひ、その他はバラモン像、比丘像、武神像を彫って、構造的には意味のない造像が流行する。一應構造的な石窟であるが、かういふ點になると構造上の意識がまったく不明瞭になる。

楣拱額は、その框内に飛天のみをならべたもの(前室)のほか、パルメット唐草(主壁南壁西部)あるひは蓮上化生(主室南壁東部)(Rub. VIF)をくはへたものなどあり、かなり變化がある。いづれも、あさい彫りで、第七、第八洞ほど力づよいものはない。

この洞、および第十洞で注目されるのは屋形が多く、しかも、うつくしいことである。尖拱、楣拱はガンダッラ浮彫はじめ、中央アジア各地にみられる。しかし、瓦葺屋根は古來中國独自のものである。それがこの石窟の主要な龕形として、さかんにあらはれてゐることは、きはめて注意をひく。棟の鴟尾、三角火焰飾、鳥飾、軒下の椽、三ツ斗、叉手束、大面とり角柱、萬字くづし欄杆<sup>リ</sup>など、前室正面の大門は莊重かつ嚴肅である。(Pl. 10) 北魏帝都の大伽藍乃至皇城、宮殿のおもかげがしのばれるのである。これらの要素なり、建築はすでに漢代から、ひろくつかはれてゐるものである。屋形の簡略なものは、軒下にすぐ三角垂飾をつけ、あるひはすぐ張幕を波うたせるものがある。

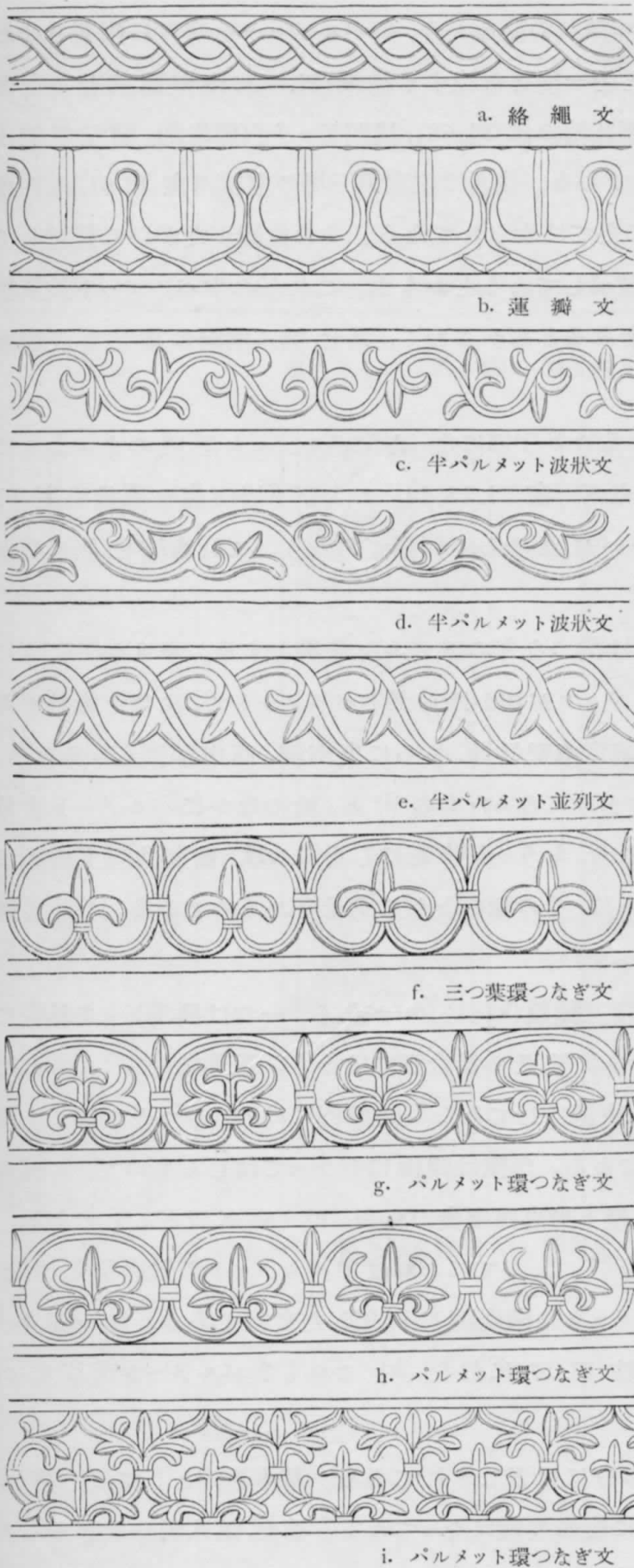
#### (6) 柱について

この石窟にはさまざまな柱がある。もっとも目につくのは八角柱と重層柱、その他である。

a) 八角柱 前室南壁の高さ9.00mの列柱では八角の柱身に千佛を彫刻する。柱頭、柱基ともに豪華であり、ほかに比類がない。八角柱を浮彫にしたものが、前室東南隅(Pl. 27)、東壁上層、北壁下層東部、西部にある。これらの柱頭はかならずしも一定せず、大斗あり渦卷柱頭がある。柱基、柱礎などはかならずしもあらはされてゐないが、前室列柱は實際に重量をうける柱であつて、八角柱身をうける臺座、またこれをになふ象、またその臺座がつくりだされてゐる。(Pl. 4) この柱、この軒組を問題にする場合は、まったく中國的にもみえるが、この象の臺は、なんとしてもインド意匠である。直接の例證がなくとも、ありうる意匠であり、カールリ<sup>Kārli</sup>のチャイティア洞入口にみる象の彫刻などから類推せられよう。八角柱はもとより中國の大面とり角柱であるが、柱基なり柱頭なりにはほかの要素がはいつてゐる。したがつて大斗そのものは中國のものとしても、皿板をもつた皿斗は、またべつに考慮されなければならない。

b) 重層柱 前室明窓左右の重層柱は北壁の最上層をさへる形式である。むろん浮彫だから、ふかい構造的な意味はない。五層になり、童子の跳躍像をおさめてゐる。西壁屋形龕の重層柱は四層で、各層に佛龕をまうけてゐる。(Pl. 18) かやうに層數は一定しないが、構造はおなじである。柱頭はパルメット飾がある。この重層柱は第七、第八兩洞でも、たくさんあつた。第九、第十兩洞はそれをまねたとおもはれる。雲岡では木造重層塔の浮彫はかなり多い。しかるに第七、第八洞、

1 火焰三角飾のほかは、みな漢代までさかのぼる。寶龜十年(779)の『西大寺資財流記帳』(寺誌叢書、第二、p.157)には、これを火炎とよんでゐる。



第二十八圖 (Fig. 28) 第九洞文様圖 横帯文 (a-i)

第九, 第十洞の壁面では, まったくこの木造塔をみないのである。このことは, これらの石窟に共通するいちじるしい特色であり, ひいて營造の順位を推定せしめるよりどころとなるであらう。

c) その他の柱では人像柱をとってみても, 渦巻柱頭の方柱 (樂天龕) をとってみても, 第七, 第八洞との類似がみられ, しかも, それよりやゝ建築的原義のうすくなつてゐることが注意をひく。これは第九, 第十洞の一般的性質である。

(7) 裝飾文様 (Fig. 28-32)

a) 絡縄文 (Fig. 28a) はいちばんかんたんで, 前室のいたるところにつかはれてゐる。中國では, 漢代, もしくはそれ以前の時代に, すでにみられる。

b) 蓮瓣文 (Fig. 28b) も, 各層の縁かざりとして, なかなか, さかんにつかはれてゐる。蓮華文は, つまりロゼットであるが, これを帯状にすればこの蓮瓣文帯になる。第七洞, 第八洞以來, もっとも基本的なものである。第七, 第八洞のものにくらべると, ここのは瓣端が急に折れてゐる。こゝでは, また五成の座に, しばしば仰瓣と, 俯瓣との一組としてつかはれてゐる。

c-m) 唐草文様 (Fig. 28c-30) 第九, 第十兩洞には唐草文様が多い。ことに第九洞は豊富であり, また豊麗である。みな簡素なパルメットを基調にしたもので, つぎの四種類にわけられる。

i) 半パルメット波状唐草文 (Fig. 28c,d) これは S 字形に彎曲する半パルメットを交

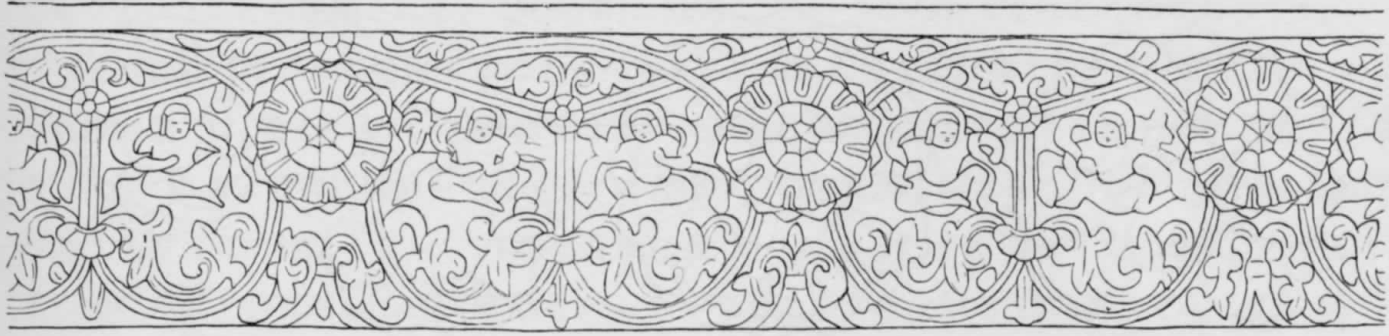
互に反置し、つないでいった波状文(c)と、まづ波状の蔓をおき、半パルメットを交互に附著させたもの(d)と二種類ある。前者は、主室第二層と第一層とを境する縁飾(Pl. 51), 南壁第三層の東西兩佛像臺座の飾(Pl. 61, 67), 同東部第二層建築基壇の飾(Pl. 68), 拱門アッチ内側縁飾, 前室西壁下層南北兩佛像臺座の飾(Pl. 6)としてつかはれてゐる。後者は主室第三層の南壁西龕(Pl. 61)と西壁屋形龕(Pl. 76)とにみいだされる。ともに柱にたてに彫られてゐる。その位置がたがひに接近してゐるのは、おそらく同一工人の彫つたことを暗示してゐるとおもふ。これらの半パルメット波状唐草はかなり粗雑で、一つづゝの半パルメットをみると形がよわく、第七、第八兩洞の雄勁な表現とはくらぶべくもない。

ii) 半パルメット並列唐草文(Fig. 28e) ゆるいS字形になつた半パルメットを、そのまゝよこにならべていった文様である。前室北壁の上層東西兩龕(Pl. 13, 14), および下層西龕の佛像臺座(Pl. 15b)にあらはされる。東龕は補彩でわからないが、おそらく同様であらう。これも第七、第八兩洞の力づよさはうしなはれてゐる。

iii) 輪つなぎ唐草文(Fig. 28f-i, 29j) これは輪つなぎのリズムを基調とする。ギリシア唐草にもすでにみられるが、こゝでは輪のなかのモチーフが相かはらず半パルメットで、よほど素朴である。前室北壁上層東西兩龕の佛臺座の縁飾, 前室南壁柱頭, さらに東南隅, 西南隅にもみられる。(Pl. 13, 14, 27, 29) 半パルメット唐草そのものが輪になつたもの(i)と、輪のなかにパルメット唐草(f)―(h)をおさめたものがある。さらにこれを、もう一層華麗にしたものは、前室拱門上の楣<sup>メグサ</sup>にある。輪つなぎ唐草にほそい線をくはへ、さらに、その輪のなかに童子をおさめてゐる。(j) 雲岡諸石窟のうち、これほど豊麗な唐草文は比類がない。

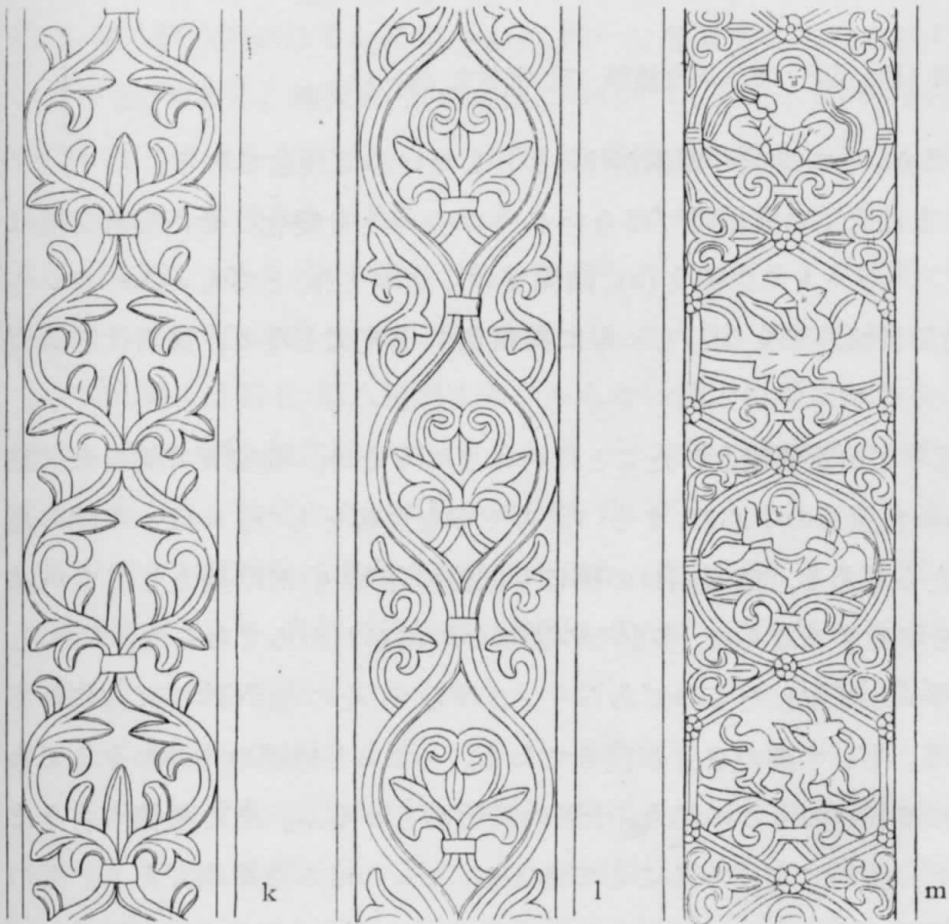
iv) 縦形輪つなぎ唐草文(Fig. 30) これには三種類(k) (l) (m)がある。一つは拱門アッチ外縁にみるもの(Pl. 37)で、二條の紐からなる卵形をつなぎ、その接合點には小さい蓮華文をおく。(m) これは西洋中世に流行した絡繩文ふうなものを基調にしてゐる。卵形内にはパルメットを形よく配し、そのうへには童子と鳥獸とを交互においてゐる。鳥獸は側面にむかつてはしるもので、中國古來の龍形にほかならない。他の一つは前室北壁下層東西兩龕の傍柱(Pl. 15)にほどこしてある。まるい卵形ではなく、尖卵形ともいふべきもの(l)で、たてにわれれば半パルメット波状唐草文(d)が左右にできる。これはモチーフとして半パルメットを徹底的に利用した文様である。統一があつて、うつくしい。第三は前室東壁上層の左右柱(Pl. 17)にある。(k) これも半パルメット唐草文(c)を左右からあはせたものである。

以上、四種類の唐草はすべて細密な裝飾部分にほどこされてゐる。基本形式としては、第七、第八洞にあつたわけであるが、こゝではさらに複雑多様になつてゐる。第七、第八洞の大がらで刀法のするどい浮彫とはちがひ、むしろ平面的で豊麗な點が特色とされる。とにかく、この洞における各モチーフの、くづれと弱さは否定できない。なほ前室列柱の基部に唐草と三角とをならべた異

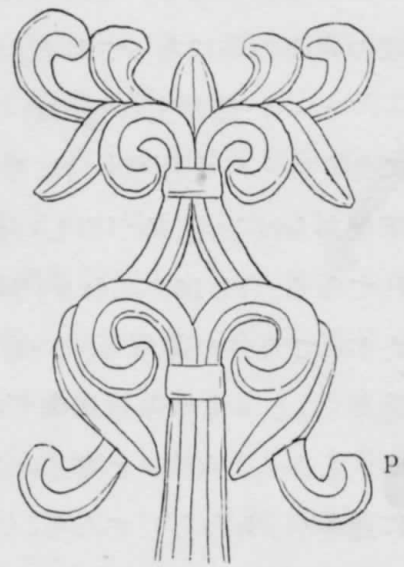


第二十九圖 (Fig. 29) 第九洞文様圖 (3) 横帯文 (j)

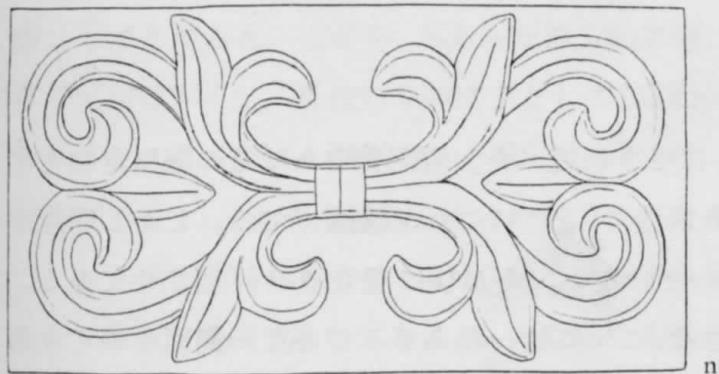
j



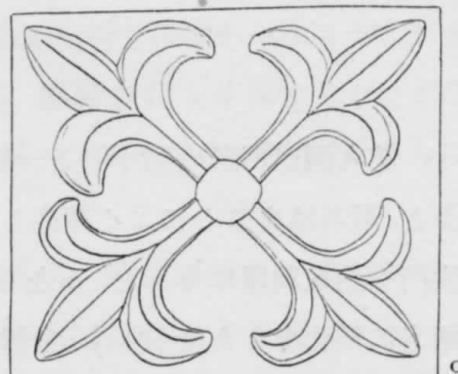
第三十圖 (Fig. 30) 第九洞文様圖 (4) 縦帯文 (k-m)



第三十一圖 (Fig. 31) 複合唐草(p)

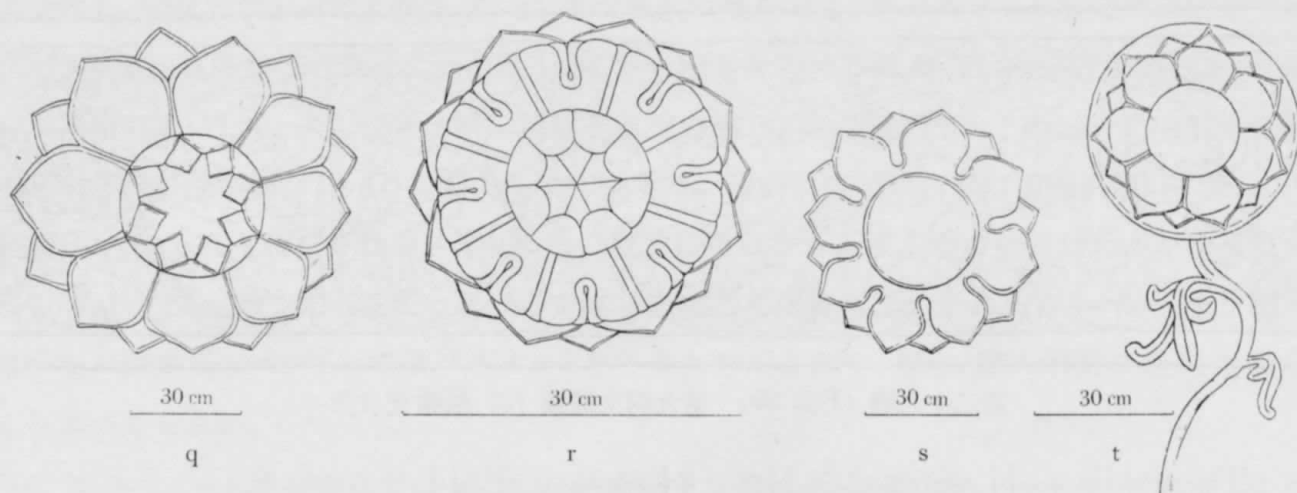


n



o

第三十一圖 (Fig. 31) 第九洞文様圖 (5) 複合唐草 (n-o)



第三十二圖 (Fig. 32) 第九洞文様圖 (7) 蓮華文 (q-t)

常な帯狀文様 (Rub.IV G) があるが、その構成の要素がはっきりしないのは残念である。

n-p) 複合唐草文 (Fig. 31) なほ唐草の文様帯ではないが、パルメットを變化させた裝飾文様はいたるところにある。たとへばパルメットの二輪文(n), 四出文(o), 立木文(p)とでもいふべきいくつかの種類がある。そのうち前二者は蓮華文などとも、もに楣拱額の填充文となり、後者は菩薩寶冠の側面の飾になってゐる。

q-t) 蓮華文 (Fig. 32) 蓮華文が重要視されたことはいふまでもない。前室天井梁の交叉點にまうけられた蓮華(r)は、ひらいた蓮瓣の中心に、まるい蕾のやうな突起をもつ。いはゞ半開の蓮華をあらはした、めづらしいかたちである。前室門口の楣にも同様の蓮華(q)が門簷としてつかはれてゐる。(Pl. 10) これを門簷と解釋するならば、多少その突起の理由がわかるであらう。また、したがって天井の蓮華も、この門簷から轉化したものであらう。これらは、その他内外の天井にみる蓮華(s)とも、もにみな單瓣である。そして瓣のさきが瘦せてゐる。ちよつと桔梗の花瓣のやうである。しかも、六瓣、七瓣といふのが多いのもこの第九、十洞の特色かとおもふ。また彫像のすきまに蓮華(t)をちらしてゐる。これは雲岡によくみることであるが、こゝのはみな單瓣であり、瓣のもりあげ方が、あくまでこの洞獨特である。

3

第九洞が西隣の第十洞と一對窟であることはさきに述べた。兩洞背中あはせの隔壁を軸とすると、兩者はまことによく照應してゐる。前室の構造は、とくにこれを證據だてる。しかし明窓や拱門や主室周壁になると、かならずしも全然同一ではない。たがひに變化させ照應させてゐる。兩方に變化をもたせつゝも、全體の大綱を一致させ、こゝに統一のあるみごとな一對窟をつくりあげたのであつた。いま、これを一體としてみると、この造窟事業は雲岡造営中においても屈指の大

企畫であったことが想像される。この造營は、はたして、いつごろおこなはれたのであろうか。

まづ初期石窟である曇曜五窟にくらべてみる。本尊大佛を安置する計畫は一致するが、いまの補修泥像では、像そのものゝ比較はできない。石窟は曇曜五窟よりはるかにすゝみ、整然たる構造をもっている。背後に隧道をもった點では大像中心の第五洞に似てゐる。しかし、諸像の服制その他は曇曜五窟に共通する。たゞ、彫刻表現には、かれにみるほど充實した力がない。とすると、まづ曇曜五窟と第五洞との中間時期とかがへられる。つぎは第七、第八洞にくらべてみる。一對窟であり、建築的構造を主眼としたところは似てゐる。佛像の服制、壁面の層序、その縁飾、格天井、折上げ天井、三角持送り、重層柱、唐草文様などに、兩者の一致點は多い。しかし、佛像の彫法は第七、第八洞の方がはるかに力づよく、同一の形式をもちひながらも、第九洞の方が力づよさにおいておとつてゐる。格天井、裝飾文様についても、おなじ傾向がある。第八洞の浮彫では、裝飾文様のはしはしにいたるまで、あけっぱなしな豪快さと素朴な喜びとが横溢してゐた。第九洞では、きはめて流麗な彫像たちがあるかとおもふと、はでで、匠氣にみちた技法が目だつ。だから、第七、第八洞が先行し、第九、第十洞がこれを襲用したとみることが當然である。けれども第九、第十洞の工匠たちは、つひに第七、第八洞の高邁さに、たうてい達しなかつたのである。

第九洞には第七、第八兩洞にみつからない種々の要素がある。したがって第七、第八兩洞の標準のみでは、第九洞造建の鍵はえられない。主室の大佛像はおそらく曇曜五窟からヒントをえたものであろう。繞道のための隧道は中央アジアからまなんだものであろうか。列柱や屋形龕の盛行は中國の木造建築に由来するのであろう。また侏儒、または童子をさかんにつかつたことも、この洞の獨創であり、各種の因縁談の適用もまたこの洞を特色づける。浮彫技法上からは、彫像たちを密接させ、その間隙をふかく彫りこんだこと、そのために彫像と彫像とのあひだにふかい陰影を生じたこと、ちやうど、ある種のガンダラ浮彫にみられる技法と酷似するものがある。

これらの要素は、この窟の彫刻家の技法に、あらたな西方的影響がくはゝつてゐることを想像させる。しかも曇曜五窟や第七、第八兩洞製作の時代から一步すすんでゐる。こゝの彫刻家たちは、西方様式をうのみにし、無心に採用するには、すでにあまりにも、かれら独自の造形的觀念をもちすぎてゐた。ある點では中國古來の造形的既成觀念もあり、他の點では西方渡來藝術の既成觀念もできてゐた。だから、あらたな西方的影響は、もう彼等の造形精神を根底からゆりうごかすほどではなかつた。新渡のものは主として知識をゆたかにしたが、藝術意識を革新するものではなかつた。こゝに第九洞彫刻が主題上はあたらしくとも、現實にはマンネリズムが目だち、さらに仕上げのきゃしゃがあらはれたとみられるのである。

この兩石窟は彫像のきゃしゃに反し、多彩な裝飾がとくに目だつ。裝飾の華美は第六洞にいたつて最頂點に達するのであるが、この點に北魏の佛教文化、ならびに貴族文化の進展がよみとられるであらう。北魏の宮殿や佛寺建築の豊麗なすがたは、いま、われわれの想像しがたいところで

## 雲岡石窟第九洞

あるが、この石窟をかざるものは、華をきそった当時のおもかげを、生々とわれわれにつたへるものである。石窟内には、まだ木造重層塔の表現はみないが、瓦葺屋根の盛行は、あきらかに帝都平城の豪華さを反映してゐる。がんらい、雲岡諸窟中、第六洞はあらゆる意味で革新的である。その第六洞は瓦葺屋根、ことに重層塔をさかんにもちひてゐる。瓦葺屋根の點からいへば第九洞は第六洞の先蹤といへる。けれども第六洞は佛像の服制が冕服式であり、第九洞はまだ西方式であり、また供養者の服装は北方式でもある。すなはち、こゝにおいても第六洞造建以前のおもかげがうかがはれるであらう。

これを要するに、第九洞の造建年代は、第七、第八兩洞の直後、第五洞、第六洞よりまへである。これは、また、これら諸洞の位置からいっても、まことに當然とかがへられる。いま第六洞の造建を、假りに孝文帝治世の太和十年前後 (cir. 486 A.D.) とすれば、第九、第十兩洞の開鑿は太和初年 (cir. 480 A.D.) とみて大過ないであらう。



# 圖 版 解 説

## 第 九 洞

### Pl. 1 五華洞 全景

雲岡の岩山は、大きくわけて三つの地区すなはち東方、中央、西方の地区となる。この寫眞は、中央地区の西半諸洞を南からのぞんでゐる。むかつて右端に、第八洞の明窓と拱門がみえ、つゞいて南に突出した岩壁は、第八洞と第九洞との境をなす部分である。列柱のあるのは第九、第十兩洞の外壁である。第十洞の西端で、岩山が南北一線に切りこまれてゐるのがみえる。つまり第九、第十洞は共通に岩山を鑿つたことがわかる。こゝを境にして西方の外壁には、大小さまざまの龕形と窓とがみえる。第十一洞と第十三洞とは、特に大きな明窓があり、その中間に、列柱のみ見えるところは第十二洞である。第十一洞から第十三洞の外壁にかけては、たくさんの佛龕があり、それには雲岡末期の冥想的な佛像が安置されてゐる。寫眞のむかつて最左端に、大きな岩壁の突出がみられ、これによって、もとの岩山の傾斜が想像されよう。石窟の垂直な外壁をつくるのに、いかに莫大な労力が必要だったかが察せられる。第十洞西端から西は、外壁の切りとりかたが變つてゐる。小龕がいくつかみえるところと、その東方、第九、第十洞のまへとは、岩壁の出かたと高さがちがつてゐる。

### Pl. 2 第九洞、第十洞 外景

兩洞が一體をなし、一對になつてゐることは、この外壁によつて端的にしめされてゐる。正面六間、列柱は二本づゝある。その中間に兩洞をわかつ隔壁があり、その南端に柱やうの突出があり、外觀は七本柱のごとくである。列柱は風化しきつてゐるが、前室にはいってみれば、りっぱな八角柱である。柱礎は地中にうもれてゐる。列柱のうへには、岩壁に縦ながの大きな孔がならぶ。これは、かつて存在した木造建築のための梁の孔とおもはれる。寫眞の左端、第十洞西端では、垂直にけづられた岩壁が東面してゐる。いま、その面に、なゝめにくだる溝があつて、屋根の勾配を暗示してゐる。これに照應する第九洞の東端には、いまにもみえない。けれども、そのなゝめの溝のゆきつくあたりに、露出した岩肌が水平にはしつてゐる。おそらく、このあ

たりに大棟がとほつてゐたものとおもはれる。そこは南面して垂直に切りおとされ、そのしたに草のはえた一段があつて、つぎが梁の孔のある正面になつてゐる。かういふことからは、こゝに木造建築のあつたことは、うたがへない。しかし、よくみると、列柱のうへ、梁孔のあたりに、又首束、その他の軒ぐみをおもはず痕跡がかすかに残つてゐる。第十洞中央の又首束は、かなりはつきりみとめることができる。

石窟の前庭はいま1.00m以上うまつてゐる。北魏時代の床は、まだ地下にねむつてゐるのである。この前庭をかこんで東西に壁が残されてゐた。西がはは、なにもなくなつて、たゞ地上にひくい岩のブロックが残つてゐるのみであるが、東側はやく完存し、屏狀にしきられたさまがよくうかがへる。屏狀になつてゐるので南に突出した、そのはしは塔のやうにみえる。けれども刹柱とか、覆鉢とかいったやうなものは、いまみとめられない。なかの二本の柱、ねもとのほそくなつてゐるところは、のちにいふやうに象鼻である。

### Pl. 3 第九洞 外壁

左端に第十洞との隔壁がみえ、右端に東壁からつゞいた柱やうのブロックがみえる。兩方がシメトリカルにおちついてゐないのは、第十洞とあはせて一對となるからである。外壁の風化は、はなはだしく、いま表面に彫刻の痕跡はまったくみとめられない。(岩壁 高約11.40m)

### Pl. 4 第九洞第十洞 列柱

昭和13年(1938年)に列柱のまへを發掘した。柱礎はひらたい方形である。東西2.02m、南北1.75m、高さ0.70m。これには側面に相對する處、前面に相對する象が彫つてあつた。この柱礎のうへに、象がのつてゐる。風化のため磨滅しきつてゐるが、こゝにみえるところが象鼻である。そして奇怪にも後部はつくらず、前脚と鼻とで鼎立してゐるのである。この象のうへに方臺があつて、八角柱はそのうへにたつ。柱礎のしたは自然の床になり、そのうへに方形の磚がしい

## 雲岡石窟第九洞

であった。この方形の磚は、うらに繩の條があつて、遼代のもものと推定される。したがつて、こゝにみえる床は、それ以後の施設である。北魏の床は直接自然の岩床であった。第十洞前庭では、この岩床のうへに龜甲文、蓮華文等の彫刻がみいだされた。おそらく兩石窟の前庭には、これが一面にほどこされてゐたのであらう。その全貌は、いま龍門賓陽洞の床において、みいだされるが、小規模のものは雲岡第五洞外のA窟にもあり、響堂山第五洞にもある。<sup>1)</sup>發掘調査の詳報は、つぎの機会にゆづりたい。(基壇高 0.80m)

<sup>1)</sup> 水野, 長廣『龍門石窟の研究』1941, Fig. 13.; 同『響堂山石窟』1937, Pl. 23 B, I, XIII.

### Pl. 5 前室北壁

上層の中央に明窓がひらかれ、下層の中央には主室への門口がある。上層と下層との境に、縁かざりとして複雑の蓮瓣文帯が彫られてゐる。しかし、上層下層を通じて、すきまなく彫刻があるため、縁かざりの効果はめださない。東北の隅に民國9年の碑がたつてゐる。(高10.40m, 床上の幅12.00m, 上端の幅 10.00m)

### Pl. 6, 7 前室西壁および東壁

東西壁は北壁に相應じて上層, 下層にわかれ、兩層の境をなす蓮瓣文帯の縁かざりも北壁と連続する。上層と天井との關係は、北壁とやゝちがつてゐる。北壁では、上層佛龕のうへに樂天の小龕を並列させ、これを天井との境としてゐるが、東西壁にはこれがない。東西壁は上層龕のうへから、すぐ曲面を系がきつゝ天井になつてゐる。東壁の上層龕は瓦屋根、二本の八角柱で三間にわかち、中央に交脚菩薩像、左右に半跏菩薩像を配し、シムメトリカルな構成をなす。下層は左右に二個の大佛龕をつくり、それぞれ佛の坐像を彫つてゐる。下層の佛龕のしたは、東西北の三壁とも、寫真にみるやうに土壁があつて、壁畫がある。これは近世の補修である。1939年秋、われわれは、この俗悪な土壁をとりのぞいて、そのしたの浮彫をだした。それはPl.19—26Aにしめごとくである。腰壁の上部に、第六洞や第一、第二洞にみるごとく、浮彫の物語がある。なほPl. 6には西壁下部の北端に、こはれた壁とつみあげた石、煉瓦がみとめられるが、これは Pl. 20にみるごとく第十洞に通ずる通路であつた。この通路の發見によつて、第九、第十洞の一對であることが、なほ確定的になつた。床に接する腰壁の下部は、おそらく供養者の列像であらう。(Pl.19, 20)

この部分はいまなほ 0.30mほど地中にうまつてゐる。前

室の西南隅には、天井からおちた大きな岩塊が、床上によこたはつてゐる。(東壁高 8.98m, 西壁高 9.06m)

### Pl. 8 前室北壁上層中央

北壁上層では、明窓と左右佛龕とをわかつために、約3.50mの重層柱をつくつてゐる。層柱は五層からなり、各層に、それぞれ二體づゝの裸形の人物をいれる。この肥満しておどつてゐるやうな人物は、やはり侏儒であらう。この層柱の柱頭をふみ、天井をさゝへてゐる大きな裸形の人物と同類である。うつくしい佛像にくらべて、これらは醜く、からだは肥満し、髪はさかだち、目は大きく、異様にかゞやいてゐる。層柱各層の屋根は、横ながの長方形で、それに三角形の垂下文を刻してゐる。柱の上部は、五成の須彌座にかんたんな唐草文帯をつくり、そのうへにパルメットの葉飾をのせてゐる。パルメットの葉飾は、塔の、いはゆる承花にあたる。このあひだに同光をつけた童子の頭部がのぞいてゐる。それは、まさに第七洞、第八洞にもある層柱である。

層柱の柱頭をふみ、二體づゝ背なかあはせの侏儒が天井をさゝへてゐる。これはかなり大きな、丸彫りにちかい彫刻である。建築的にみると、一種の持送りの役をする。侏儒その他の彫像が持送りの役をするのは、サアンチイ門柱のながれをくむものであらうか。片手をあげて天井をさゝへ、片手は腰にあてゝゐる。天井と接する個所には高さ 0.70—0.80mの尖拱龕がならび、なかに奏樂天人が彫つてゐる。小龕の数は中央が六、東が六、西が五である。(明窓高2.65m, 幅 2.10m)

### Pl. 9 前室北壁明窓

明窓は隅まるの方形である。このアーチの曲線にそつて拱額が彫られてゐる。拱額の幅 0.65m, これに九個の坐佛をならべ、舟形光背を密接する。この部分の彩色は、みな近世の補修である。坐佛の足下には、明窓の縁にそつて六つの鳥を彫る。みな口にながいがりボンをくはへてゐる。このやうな鳥の意匠は、中央アジアのキジール石窟の壁畫にみいだされる。この鳥の列が、ふつうの龕の拱梁にあたり、その拱端には蓮座のうへにたつ龍形がある。前脚をふんばり、頭を明窓の方にふりむけてゐる。この龍も補彩のためにひどい色彩を呈してゐるが、龍形はどうみても、あきらかに中國傳來のものである。しかし、こゝでは龍身は、ごくみじかく、途中で打ちきられ、本来、龍身があるところが、前述した六つの飛鳥になつてゐる。このやうな複雑さは第七、第

八洞といちじるしくちがひ、この石窟彫刻家の性格を推測させる手がかりになる。左右龍形のしたには瘠せて肋骨のでた老人の腰をかけた像がある。バラモン (Brāhmaṇa) である。手に鬘鬘をもち、神秘的なポーズをしてゐる。

拱額のうへには、小形の供養天の上身を、二十一體ならべてゐる。そのうへに八體の飛天、左右に二體の飛天が亂舞してゐる。これは粗野な顔つきをした男たちで、優美な菩薩ふうの飛天ではない。大きな丸顔、逆立った頭髪、まるい大きな目。裸體で腰にみじかい腰衣をつけ、両肩には天衣をひらめかせてゐる。これらも、天井の持送りにあらはされた侏儒像と、おなじ容貌、姿態をしてゐる。

これら飛天列のうへには、欄杆をつくり、六つの龕をならべ、そのなかに奏樂する天人を彫る。この尖拱龕は兩がはに小さい柱頭をあらはしてゐる。柱身はかくれてみえぬ。柱頭はさまざまであるが、要は渦卷を上下に配したものである。その源流については、第八洞においてすでに述べたごとくである。いま、その柱頭のうへに、方形の皿板がのつてゐる。これは柱頭のうへにのつてゐるから、皿板といふより、まさにギリシアのアバカス (abacus) そのものである。この天井にちかいかい列龕は粗略に彫られ、そのかたちがまちまちである。樂天たちは、腰からうへが欄杆のうへにしめされ、正面むき、あるひはなゝめむきなど自由である。樂器は東からいふと、(1) 鏡、(2) 琵琶、(3) 横笛、(4) 螺貝、(5) 小鼓、(6) 腰鼓であり、中央アジア音楽にもちひられるものと同様である。(明窓高 2.65m, 幅 2.10m)

<sup>1</sup> A. Grünwedel, *Altbuddhistische Kultstätten*, Fig. 261.

<sup>2</sup> 本書、第五卷, p. 32.

<sup>3</sup> 『法華經』(大正大藏經, 第九卷, p. 9) 卷一には、塔廟、寶像、畫像に對し、鼓、角、貝、簫、笛、琴、箏篋、琵琶、鏡、銅鈸などの妙音をもつて供養することをとく。

#### Pl. 10 前室北壁門口

第九洞前室はあかるい。南からこの室に入ってすぐ目につくのが、この北壁の華麗な門口である。門口の裝飾は明窓のすぐ下からはじまる。最上部に、瓦葺屋根を模した浮彫があり、棟の兩はしに單純な鴟尾、棟の中央に正面むきの鳳凰、左右にはむかひあつた鳳凰、その中間に三角形になった火焰飾がある。火焰飾のなかには、複合パルメットの文様がたつてゐる。さらに鳳凰は左右のくだけり棟にもあらはされ、合計五つある。軒には丸形槿(たるき)をならべ、槿の端には、なにかまるいものが下端にくつついてゐる。軒の組みものは高さ0.24mの平三つ斗と叉手束である。ただ左右兩端は、そこに彫られた飛天像のためにさまたげら

れ、三つ斗の一半はみえない。斗拱のしたには横帯があり、それは唐草文様でかざられてゐる。建築の細部をうつした浮彫はこゝで一應をはる。

そのしたは飛天を彫る。左右から四體づゝが相むかひ、中心に香爐をはさんでゐる。高髻にゆつた菩薩ふうの飛天である。型にはめたやうにおなじ形をとりながら、身體をよこたへて飛んでゐる。頭には圓形光背があり、腕には幅ひろい天衣がまきついてゐる。まへにさしだした手で、花のついた瓔珞の端をもつてゐる。この種の瓔珞は、ガンダアラ美術でも、しばしば佛を供養する童子群によつてになはれてゐる。瓔珞のところから門口の上縁におよぶ0.96mばかりの部分は、もつとも華麗な裝飾が彫られ、さながら彩繪の建築をみるごとくである。瓔珞がたれさがつてつくる下の三角形の空白は、三つ葉のパルメットをもつ火焰飾でうめ、上の三角形の空白は複合したパルメットをいれ、その上端をつないで、水平にせまい絡繩文帯がある。

これは、門口の楣<sup>マゴサ</sup>の上のかざりになるわけである。楣は、まづ環つなぎの唐草文を地文とし、そのうへに蓮華のかたちをした門簷五つをならべ、門口上部の嚴肅さを決定してゐる。この環つなぎ唐草文は、きはめて複雑である(Fig. 29)。まづ蔓で環をつくる。その環の端が中央からまひあがつてきたところで、はねかへつて二つの半パルメットになる。その交點に小さい蓮華がつき、そこにほそい棒がたつ。この棒によつて二分された各區には、それぞれおどりあがつてゐる人物をうめる。棒のトップには小蓮華があり、こゝから棒は二股になつて左右にのび、それぞれ、となりの環からのびてきた棒とであふ。これが、のちに第十二洞の龜甲ぐみ唐草文に發達するもとである。要するに、かうした結構のもとに、すきまなく唐草文をうめつくしてゐるのである。第六洞門口の複雑な唐草文は、これを整備したものといへよう。この文様帯の左右に、矩形の波状唐草文帯がたてにあり、そのうへに小形の環つなぎ唐草文帯がある。そしてこれらの文様帯全部を縁どるために、ほそい連珠文帯が、水平、また垂直にめぐらされてゐるのである。

屋根形のしたには、楣の左右に門神(dvārapāla)を一對彫つてゐる。門神は光背なく、高髻をいたゞき、顔をやゝなゝめ下にむけ、その視線で、この前室入場者を左右から監視してゐる。片手にみじかい金剛杵(vajra)をもち肩にあて、片手にながい柄のついた二叉の矛をもち、これを地面につきたてゝゐる。鎧は胸からながく膝におよび、その袖はみじかく肘でとまつてゐる。皮の鎧であらうか、それとも挂甲であらうか。うへからつよく紐でしばりつけてゐる。あ

## 雲岡石窟第九洞

げた手にも、ひらいた兩足にも、さして力んだやうすはない。

門口左右の方立にも縦にはしる華麗な唐草文がある。しかし、寫眞にみえるものはみな近世の補修である。これにつづく左右の腰壁(高2.20m乃至2.50m)も、やはり醜惡な補修とその壁畫におほはれてゐる。前室はこのやうに近世の補修が多く、浮彫上の加彩がさうたうにつよい。彫刻當初の趣は、かなりそこなはれてゐる。これは外見、楣と方立からなる方形の門口であるが、すこし内にはいると、その上隅にまるく彫りのこしたのものがあつて、これによつて南側では方形であつた入口が、けつきよく、アアチ形をとることになる。その隅の、南面した部分にも、ちょっとした唐草のかざり(Rub.VI n)がある。(門口高 3.20m, 幅 3.28m)

### Pl. 11, 12 前室北壁西部および東部

前室北壁は、明窓と門口を中心として、左右整然とシムメトリックな佛龕配置をしてゐる。上層には左右とも二佛並坐の龕をひとつ、下層には左右とも交脚菩薩の龕をひとつ設けてゐる。交脚菩薩の坐高は、東が 2.53m, 西が 2.47m である。上下兩層の間には幅 0.25m の蓮瓣文帯があり、腰壁とのさかひにも蓮瓣文帯がある。この蓮瓣文帯の下は 1.60m 乃至 1.75m で現在の床になる。(北壁西部高 10.25m, 東部高 10.14m)

### Pl. 13 前室北壁上層西龕

二佛並坐龕の坐佛は坐高 1.80m および 1.85m。壁面全體に近世の補修がつよく、いたるところを泥と彩色とでぬりこめてゐる。龕はあまりふかくない。並坐の二佛はともに同一形で右手をあげ、左手を膝にのせ衣端をにぎつてゐる。やまへかゞみで、たがひに胸のあたりに目をそくぐ。瞳や唇の彩色は原初のものでない。偏袒右肩。光背は、まるい頭光と、とがった擧身光とが二重になつてゐる。頭光の縁かざりは右が半パルメット、左が火焰。擧身光のそとは、みな火焰であるが、その内帯は右の光背が飛天、左の光背が坐佛である。そして肩の三角形の空白には火焰がある。二佛光背の間には三段にわけて、小形の供養天人をうめゐる。臺座は五段、みな、それぞれに裝飾文様がある。上はパルメット唐草をふくむ環つなぎ、つぎは上にむいた蓮瓣帯、つぎは無文帯、つぎは絡繩文帯、最下が半パルメットの並列文である。佛の外がは、つまり龕の縁には、小形の比丘立像がある。この比丘は田相のみえる僧衣をきてゐる。比丘立像のうへは、拱額の基部になり、左右とも籐几やうの座が

あり、その上に正面むきの鳥形を彫つてゐる。この籐几の意匠は、第七、第八洞でも、しばしばもちひられたものである。鳥の頭上からアアチのふちとなり、六體の男形飛天がとぶ。これはみな異様な顔つきをしてゐる。

拱額にあたる部分に、光背とも高さ 0.45m から 0.50m の、九つの小坐佛をならべ、その光背が蓮瓣のごとくならんでゐる。左右の四體は禪定形、中央一體のみが右手をあげて、いはゞ説法形である。この九つの小坐佛のうへは、さらに飛天となる。左右二體づゝ彫られてゐるが、高髻の菩薩形である。中央の部分は壁面が破損したためか、いまは彫刻がない。むかつて左の飛天中には、一體だけ童形の飛天がしめされ、シムメトリイがやぶられてゐる。

天井に接して、五つの小龕がならべられ、下に欄杆がある。欄杆は萬字くづし、法隆寺金堂上層のものと同形式である。龕内には奏樂天人を彫るが、その形は北壁中央および東部と同様である。身體をやゝなくめにしてゐるのは、中央に對して供養恭敬の心もちと解される。その樂器は東から(1)琵琶、(2)不明、(3)豎笛、(4)篳篥、(5)鏡?となる。

壁背面の彩色も近世の補彩である。壁面の掃除をすることができなかつたので、寫眞には、塵土がそのまゝ黒くうつされ、ことに並坐二佛の足さきには、土のたまってゐるのがよくみえる。(龕高 3.28m)

### Pl. 14 前室北壁上層東龕

坐高ともに約 1.80m の二佛並坐像、これをおさめた龕形、さらに天井下の奏樂天人龕など、その形式は、まったく北壁西部と同様である。いま、たゞその相違點のみをあげてみよう。

(1) 拱額の坐佛並列が西龕では九つであつたが、こゝでは八つである。これは七つ、九つの奇数が自然で、おそらく東隅に、もう一體あつたのであらう。いま飛天像らしく、つくつてゐるのは、後世のしごとである。

(2) この八坐佛のうへの飛天は、左右から三體づゝ中央にむかつてとび、その中心には博山香爐がある。

(3) 二佛並坐像の龕傍は比丘形ではなく、小形の天人立像である。むかつて右の像は破損し、近世の補修。

(4) この天人立像のうへは、西龕では正面むきの鳥形であつたが、こゝでは明窓兩脇のごとく、龍形となつてゐる。

(5) 天井下の奏樂天人は、西部の五體に對し六體である。樂器は東から(1)舞踊、(2)豎笛、(3)腰鼓、(4)横笛、(5)小鼓、(6)琵琶となつてゐる。(龕高 3.24m)

Pl. 15A 前室北壁下層 西龕

B 前室北壁下層 東龕

A. 東龕にくらべて西龕の方がはるかによくのこつてゐる。左右の獅子が完存し、いはゆる獅子座である。下の蓮瓣帯もよくのこつてゐる。光背もよくのこり、舉身光、頭光ともに火焰のふちがある。頭光の中心は蓮華、舉身光の内帯は坐佛の並列像。肩の空白には火焰飾がある。化佛をいたいた三面寶冠からは、ながい紐が大きく左右にひるがへつてゐる。これはつよくイランの傳統をおもはすものである。龕内光背の左右にはごくあさく供養の天人たちを彫つてゐる。五成の須彌座には、それぞれ半パルメット並列文と蓮瓣文帯とがあらはされてゐる。

龕は、楣拱龕である。拱額のなかには、それぞれ飛天がおさめられ、それをうけて八角の柱がたつ。柱はパルメットの環つなぎ文と絡繩文帯とをもつてかざり、柱頭には渦巻がある。これはイオニヤ式の渦巻でなく、第八洞でみたやうな柱頭の變化である。柱のうちには、しばりあげられた幕があり、柱のそとには立つた天人供養者がある。(龕高 3.20m)

B. 楣拱龕に交脚菩薩像がある。西龕とほとんど同形式。きはめて入念に彫つてある。たゞ手相がたがひにちがひ、東龕は合掌、西龕は舉手と俯手とである。肩はなだらかで、胸はやゝうすい。光背、臺座は破損したうへを、補彩してあるので、原形をうしなつてゐる。下の蓮瓣帯もさうである。たゞ光背の右端がすこしのこつてゐるのと、右の獅子がほゞ完全であるのところが注意される。(龕高 3.28m)

Pl. 16 前室上層 東北隅

前室東壁と北壁過半の上層部、それと天井の一部がながめられる。明窓のひろい床、その側壁、その天井がよくみえる。これによつて壁の全面が、あますところなく浮彫をもつて満たされてゐることがわかる。壁の凹凸のぐあひ、浮彫の密度などが知られよう。(屋形龕高 約3.00m)

Pl. 17 前室東壁上層

東壁上層は一つの屋形龕で占められてゐる。瓦葺屋根を模して棟の両端に鴟尾、中央に正面むきの鳥形、その中間に二つづゝの三角形火焰飾、それから屋根の兩翼に一双の横むきの鳥。これらの鳥形はきはめて素朴であり、奇古である。漢魏以來の鳥のかたちをとゞめてゐる。棟の線は壁面のせゐか、なかほどがすこしくぼんでゐる。軒にはまるいタルキ椽、その下に五つの三斗と五つの叉手束とをあらはし、それ

をさへる桁には斗拱一つづゝに應じて、長方形の飾りがある。桁は左右二本の八角柱(高1.68m)によつてさへられ、龕を三つの部分にわけてゐる。八角柱は浮彫であるから前方に三面、内がはに一面をしめすにとゞまる。柱の正面には、パルメットを環にした杏葉形を上下に連続させ、なゝめの兩面には絡繩文を彫る。柱頭には皿板をもつ皿斗サツトがあり、これにはひくい拱ヒグイ(肘木)が左右にでゝ桁をうけてゐる。いはゆる舟肘木フナヒジキである。柱礎はない。

かうして、わけた三間の、一間ごとに佛像を彫つてゐる。中央の間(幅1.58m)には交脚菩薩像、左右にはシムメトリックに樹下の半跏思惟菩薩像をあらはす。壁面のひろさのわりあひに、彫像の数がすくないので、構圖は大らかで餘裕があり、みた目には、すこぶるたのしい。

主尊の交脚菩薩は脚部が小さく、やゝ比例をうしなつてゐる。ひくい飾りのない座にすわつてゐるのであるが、膝から足さきの造形が圖式的になつてゐる。さらにその弱點は腹部から、大腿部の造形にも指摘される。顔はまるく、顎がやゝ角ばる。頭上の寶冠はすこぶるみごとで、正面と左右とに蓮華の圓板があり、その中間にパルメットの飾をもつ。額の髪は線によつてしめされるが類型的である。頸に板狀の頸飾、腕と手首にも環飾をつけ、天衣は左肩から右脇へなゝめにあらはされる。上半身は兩肩がやゝさがり、ふとい腕をしてゐるが、脇したはほとんど彫りこんでゐない。光背は補彩である。頭光には半パルメット並列文、舉身光に火焰飾があつたらしい。舉身光は横はゞがひろく、圓光のしたから天衣が大きくひるがへつてゐる。主尊交脚の兩脇には形式的な獅子をまるまると彫つてゐる。

樹下の半跏思惟菩薩像は左右とも同一形式である。主尊の大きさに比し、すこし小さくしてゐる。たかい寶冠をいたゞき、顔はやさしい。肩、胸、腕はゆつたりとゆたかである。頭の大きい圓光と、その下のまるくひろがつた天衣とが背景のリズムをつくつてゐる。半跏像のよこの樹木は、左脇(南方)のものがもとのもので、右脇のものは、まつたくのちの増修である。きはめて古風な非現實的な樹木で、ふとい幹から、腕のごとき枝と蓮瓣形になつた葉のかたまりとがでて、それが半跏菩薩像の頭上に、おほひかぶさつてゐる。(像高 1.62m)

Pl. 18 前室西壁上層

西壁上層は、東壁上層とおなじくひとつの屋形龕を彫刻する。すなはち、瓦葺屋根に鴟尾と鳥形と三角火焰飾がならび、軒には椽があり、三斗と叉手束とがある。柱によつて

## 雲岡石窟第九洞

三間にしきつた點はおなじであるが、柱のかたちはまったくちがふ。こゝは四層の重層柱である。柱頭にはかんたんなパルメットのかざりをつけ、その中心に、童子の頭部を彫る。柱の各層には小龕をつくり、坐佛をおさめてゐる。各層間にはたゞの長方形の屋根、これに三角形垂飾をきざむ。

中央本尊は交脚の佛像であつて、東壁のごとく寶冠のある菩薩形ではない。肉髻は大きく、顔はまるく、顎はすこしとがってゐる。肩はやゝなで肩で、偏袒右肩である。両手は胸にあげ、掌をみせてゐる。頭部の圓形光背、舉身光背は型のごとくであり、座の兩がはには獅子が彫られてゐる。

柱の左右には菩薩立像がある。身體は豐滿であるが、腰部がよわい。菩薩の頭上には、高髻の飛天が片足は膝でをりまげ、片足をうしろにはねた形でとんでゐる。(像高 1.68m)

### Pl. 19 前室北壁腰壁

前室下層の腰壁は、もと補修の壁におぼはれ、俗悪な壁畫がゑがゝれてゐた。のみならず、した三分の一ばかりは土中にうまつてゐた。しかし、補修の壁をとりぞくと、したから浮彫があらはれた。浮彫は物語ふうのものが上半をしめ、下半は供養者列像である。その供養者像の部分は、まったく破滅しつくし、修補のさいの棒杖のあとがいたましくのこつてゐるのみである。

物語の浮彫は高さ 0.80m のパネル状になり、うへは蓮瓣文帯で區切られてゐる。物語はシャアマ (Śyāma) (睽摩迦) 本生 (Jātaka) で、西壁からはじまり、北壁についてゐる。このシャアマ本生は、吳の康僧會譯『六度集經』(大正大藏經、第三卷、p.24) 卷五、北魏の曇曜と吉迦夜共譯『雜寶藏經』(同第四卷、p.448) 卷一、西晋の聖堅譯『睽子經』(同第三卷、p.438) などにみえるが、雲岡石窟開鑿と關係ふかい曇曜、吉迦夜共譯の『雜寶藏經』卷一によれば、つきのごとくである。

むかしカアシ (Kāsi) (迦尸) 國の山中に、シャアマ (Śyāma) (睽摩迦) とよぶ仙人があつた。日ごろ盲の老父母につかへ、孝養をつくしてゐた。ある日、ブラハダッタ (Brahadatta) (梵摩達) 王が山中に出獵し、鹿の水をのむところをみて、これを射た。ところが、これは意外にも、シャアマが鹿皮をつけて水をくむところであつた。王は毒矢のつきたつたシャアマをみて、いたくおどろいた。かれの身もとをきくたゞして、老父母のもとへかけつけたうへ、王位をすてシャアマにかはつて孝養をつくさうと申しでた。しかし老父母は、だれをもつても、わが子の孝順にはおよばないといひ、矢にあたつたシャアマのもとに泣きくづれた。この悲嘆をあは

れんで、天神はじめ地神、山神、樹神、河神、みなこぞつてこの孝子の救濟せられんことを天上のインドラ (釋提桓因) (Śakra-devānām Indra) に歎願した。インドラはこれに感じ、たゞちに地上にくだつた。もとより、きづいたシャアマは、だれに對しても心中になんの恨みももたなかつた。インドラがこれのみさだめると、やがて毒矢は、自然にぬけおちた。シャアマはもとのやうに回復したのである。さて、この盲父母は、いまのシュッドホダナ (Śuddhodana) (淨飯) 王とマヤ (Māyā) (摩耶) 夫人である。シャアマは釋尊そのひとであり、國王ブラハダッタはシャリプトラ (Śāriputra) (舍利弗) であり、インドラはマハアカシャパ (Mahā-Kāśyapa) (摩訶迦葉) であると、釋尊は前世の因縁を説きあかしたのであつた。(腰壁總高 約 2.45m)

### Pl. 20 前室西壁腰壁

この腰壁も俗悪な壁畫のしたにうまつてゐた。下半は溶けさつてゐるが、供養者立像のならんでゐることはうたがひない。むかつて右端にトンネル (高さ 2.00m、幅 1.20m) があつて、第十洞に通じてゐる。シャアマ本生はこの壁からはじまり、北壁へつづくのである。シャアマ本生の圖はガンダラ浮彫にあり、<sup>1)</sup> さらに古くはインド古代派の彫刻、サアンチイ大塔西門の左方にもみられる。中央アジアでも壁畫によつてさかんにあらはされ、キジルの溪谷洞 Schlucht Höhle、騎士洞 Schwerträger Höhle、念經洞 Gebetmühlen Höhle、菩薩洞 Bodhisattva Höhle にそれぞれゑがゝれてゐる。<sup>2)</sup> (腰壁總高 2.44m)

<sup>1)</sup> A. Foucher, *L'art gréco-bouddhique*, p. 280, Fig. 143.

<sup>2)</sup> E. Waldschmidt, *Über die Darstellung und den Stil der Wandgemälde aus Qyzil bei Kutscha*, (Die Buddhistische Spätantike Mit-telasiens, VI), Berlin 1928 p. 17.

### Pl. 21 前室西壁腰壁浮彫本生 (1a)

西壁腰壁は三つの場面にわかれてゐる。南端の場面は重層の建物がむかつて左端にあり、その階下に二人の人物がすわつてゐる。しかし、その場所は大きな破損があるので、人物の詳細はわからない。この樓閣の右上には身體をよこにしてとぶ飛天があり、その下には小さく蓮瓣形の光背にかこまれた水瓶のやうなものがある。その意味はわからない。そのしたも不明であるが、その左わきには脚をふんばつた人物がある。これは、そのすがたから拂子をもつたブラフマン (Brahman) (梵天) とおもはれる。なほ右半は二段になつて、三人づゝの人物がある。いづれも窄袖のなが

い外套をきてゐる。うへの三人は右方にむかつてすみ、首をまへにかたむけ、なにか背おつてゐるらしい。したの三人は反対に左の方へむかひ、たちどまり、前後の二人は合掌してゐるらしい。この場面がなにをものがたるかはわからない。しかし、いづれシャマ本生談の序幕にあたる場面であらう。(浮彫帯高 約0.80m)

Pl. 22 前室 西壁 腰壁 浮彫本生 (1b)

中央の場面は下方に奇抜な山岳をつくつてゐる。そのうへに隣接した草廬をまうけ、そのなかに一人づゝの人物をあらはしてゐる。半跏の像はシャマの老父、足をそろへたのは老母である。盲の父母が山中の草廬にすみ、平穩な月日をおくつてゐるのである。草廬の右の方には、丈のたかい一人の男が兩肩に一人づゝの人物をのせ、正面にむかつてゐるのをみる。肩にのつた人物は小形にあらはされ、その老父母であることは、廬中の人物とくらべると、すぐわかる。立つた人物は顔面がこはれてゐるが、シャマである。すなはち盲の父母を肩にのせて山中をあるき、孝養をつくすさまをしめすのである。さうすると、この中央の場面は二つの時間的にちがった情景をならべたものである。(浮彫帯高 約0.80m)

Pl. 23 前室 西壁 腰壁 浮彫本生 (2)

この場面にも同様に二つの草廬がある。左の草廬にはだれもゐない。右の方には老父母が、いっしょにすはつてゐる。そして廬のそとに、ひざまづき合掌してゐるのはシャマである。父母につかへてゐるわけであらう。うつろの草廬は、シャマ自身の廬をしめすのであらう。シャマのうしろには猿が木にのぼり、四匹の獣がゐる。山中の獣類も、このシャマ親子に對しては、親愛の情をもつてゐるらしい。獣は素朴な表現ではあるが、全體にのびやかな気分をたいへてゐる。(浮彫帯高 約0.80m)

Pl. 24 前室 北壁 腰壁 浮彫本生 (3)

シャマ本生のつゞきである。この場面は騎乗の人物五人を右に配し、そのうち先頭の一騎は國王である。まるい光背をおひ、天衣をひるがへしてゐる。國王は弓をかまへてゐるが、この矢はすでに發せられて、國王のなゝめ下にひざまづいてゐる人物の左肩につきたつてゐる。これはこの話の主人公シャマにほかならない。この人物の周囲はひどく破損してゐるが、おそらく池があり、シャマは水麩を手にしてゐたとおもはれる。(浮彫帯高 約0.80m)

Pl. 25 前室 北壁 腰壁 浮彫本生 (4)

前岡に對し、右方の場面は、國王が盲の老父母を草廬にたづね、謝罪する情景をあらはしてゐる。左端に二つの草廬が接してあらはされ、そのなかには盲目の老人が、いづれもおどろきのため兩手をふりあげてゐる。右は父親、左は母親である。すわりかたで男女の區別をしめしてゐる。不幸なことがおこつたので、心の轉倒したありさまを、その手つきであらはしてゐる。この草廬の左のぼそながい短冊形のは、おそらく文字をきざむために準備されたものとおもはれる。さて國王はこの草廬の右方にひざまづき、兩手をすりあはせてゐる。頭に圓光があり、腕に天衣がまきついてゐる。これこそシャリプトラの前身である。うしろには二人の侍臣が馬をひきながら合掌してゐる。侍臣は頭に折頭巾をかぶる。その右端には上下に三頭の馬がならび、前足をあげて歩行のかたちである。王と侍臣との頭上には雲があらはされてゐてめづらしいが、足の部分は破損がはなはだしく、山岳のかたちはまったくくづれてゐる。(浮彫帯高 約0.80m)

Pl. 26A 前室 北壁 腰壁 浮彫本生 (5)

B 前室 第九洞第十洞間隧道

A. 門口東がはの腰壁にも、このやうな物語の浮彫がある。五人の人物が正面むきにならんでたち、左の二人はやや腰をまげて合掌してゐる。他の三人は手をさげたり、肘をまげたりして、なにか語りあつてゐるやうである。足もとには奇妙な山岳をあらはし、頭上にはたゞよふ雲をつくつてゐる。左端には、上下に三頭の馬があらはされてゐる。おそらく、シャマの回復し、歡喜したところをあらはすのであらう。(浮彫帯高 約0.80m)

B. 隧道は第九、第十兩洞の前室をむすんでゐる。この寫眞は隧道の天井をしめしたものである。中央に大きな蓮華があり、兩方から飛天が兩手をあげて蓮華をさへてゐる。同様の隧道は第七、第八洞前室の間にもあつたが、浮彫はこの方が簡略になつてゐる。寫眞では兩わきから兩窟の前室天井と北壁とが一部分、顔をだしてゐる。兩方の石窟の似てゐるさまが、これによつても、よくわかるであらう。(幅 約1.00m)

Pl. 27 前室 東南隅一部

前室はふきはなしになつてゐるが、その東南隅と西南隅とは東西から袖がでゐる。いま、東は約1.10m、西は約0.60mばかりある。上層と下層とからなり、だいたい東西

## 雲岡石窟第九洞

壁の上層と下層にならつてゐる。上層は東壁の樹下半跏像にならび、北面して佛立像をきざみ、そのわきにしっかりと八角柱を彫る。柱頭は五成の臺からなり、柱の中ほどは仰蓮と俯蓮とをあはせた飾りがある。柱のねもとにはアカンサスの變化したうつくしい隅かざりがある。この柱は萬字くづしの欄杆のうへにたち、欄杆のしたには環つなぎの唐草文帯がある。そして柱のうへには化生たちがさげる花繩がたれさがつてゐる。立像はゆたかなからだつきで、顔はやさしい。まへにすわつて合掌する童子がある。立像の足下には頭髮をしいてゐないが、布髮供養の儒童(Mānava)と定光佛(Dipaṅkara)であることが察せられる。

このしたは、すこし、くぼんでゐて奏樂の天人がゐる。北むきの天人は小太鼓をもち、西むきのは腰鼓をもつてゐる。この下には、また環つなぎ唐草文帯があり、山岳重疊たる須彌山があり、ながながとした龍がそれをまいてゐる。

東壁をこの角度からみると、上層の八角柱の内がはの裝飾がわかるし、またその下の浮彫の深度がわかつて興味ふかい。(佛像高 1.20m)

### Pl. 28 前室 西南隅一部

この隅の裝飾は東南隅とかなりちがふ。むしろ隣接する第十洞の東南隅と意匠が共通し、兩洞が一對窟であることをしめしてゐる。こゝにも欄杆をまはしたバルコニーのやうなものがあり、その東北の隅に瓦屋根の家屋がある。小さい家屋である。軒下には斗拱がある。萬字くづしの欄杆のしたに環つなぎの唐草文帯がある。第十洞にも、これに相當する場所に小さい屋舎がある。この家屋のうへは破損してゐるが、そのうへの東面したところに、大きな蓮座にすわつた化生を彫つてゐる。こゝからも天井の蓮華、飛天がみえる。天井は補彩が多いから、浮彫の面と線とで原形をとらへる心がまへが必要である。(西壁菩薩立像高 1.22m)

### Pl. 29A 前室 南壁 東柱

#### B 前室 南壁 西柱

A. 前室はふきはなしで、二本のふとい八角柱がならんでゐる。東の間 1.60m, 中の間 1.70m, 西の間 1.80m。この寫眞は東の柱である。石窟に、このやうなふきはなしの柱をまうけることは、きはめて大膽な計畫である。柱頭は三段からなり、最上は斗の側面で、こゝには環つなぎの唐草文がある。つきは斗の繰りがた、こゝには仰蓮瓣がある。そのしたは皿板である。その下面に、なくめにきりこんだ面があり、絡繩文をつけてゐる。この八角柱は、中國古來の建

築を模し、それに唐草や蓮瓣をかざつたわけであらう。柱は上部がほそく、下にゆくほどふとくなる。八角といふけれども、大面とりの角柱である。ひろい四面には各段に佛龕二つを彫つてゐる。總計十段、外面は風化してなにもこつてゐない。

柱にさゝへられた東西の桁には一列に坐佛を配し、その上には三角垂飾がみられる。この坐佛の層の下ぶちに、ほそい絡繩文帯があるのもみのがせない。絡繩文も中國古來の文様である。柱頭の上には半裸半身の侏儒がなくめむきにたち、兩手をふりあげてゐる。これも一種のアトランテスである。そのうへには天井をさゝへる大きな侏儒像の足がみえる。侏儒像を構造上の持ちおくりにつかふのは第七洞、第八洞以來のやりかたである。寫眞の上端には、天井したの樂天列龕、とくにその欄杆がみえる。そして、その桁の下端には唐草文があり(Rub. VI e)、これをうけて柱のつけねには、これをさゝへる侏儒像があつたらしい。いまはたゞ、そのおしあげた手が、わづかにみられるのみである。(高 9.07m)

B. 八角柱の周圍八面のうち、ひろい面とせまい面とのわりあひが、こゝではつきりとみとめられる。柱頭のうへの侏儒は、あさい彫りで、下半身は斗形でかくれてゐる。頭髮がさかだつてゐる。壁面には補彩があつて、彫刻がにぶくみえる。(高 8.92m)

### Pl. 30 前室 天井

前室天井は一種の格天井である。東西にながく、ふとい梁がまんなかにな一本はしつてゐる。南北の梁は、南壁二本の八角柱と北壁明窓わきの二本の重層柱とをむすんでゐる。そして、そこに侏儒像の持送りが大きいつくられてゐる。天井は、この三つの梁によって六つの格間にわかれてゐるが、すきまなく蓮華と飛天とを彫りこんでゐるから、その構成がはつきりしない。そのうへ惜しいことに、東西にはしる大きな龜裂がある。これは南壁をふきはなしにしたことに無理があるとおもふ。このため天井南半に中央部と西南部に落岩があり、いまま床上によこたはつてゐる。

六つになつた區劃のうち、中央の二區 II, V だけは三角持送り式の天井が二つづゝあり、そのあひだに佇立合掌の正面むき人物がゐる。腰衣をつけただけの裸形で、背後に圓光と天衣とがシムメトリックにあらはされてゐる。(東西長 約 10.30m, 南北長 約 3.30m)

### Pl. 31 前室 天井 西部



西壁に向ひ西部の天井をみあげたものである。天井が西端でカアヅして西壁の上部におよんでゐる。これで西北區IIIと西南區VIとがよくわかる。西壁の屋根形の中央から、ま上にのびた一本の梁に五體の飛天がとんでゐる。この五體は右にとび左にとんで、巧妙なジグザグのリズムをつくる。順にみてゆくと舞踊の刻々にうつる動作をおもはせて興味がある。いづれも高髻の頭に圓光をいたゞき、上身は裸形で、下體は足首に達する裳をつけてゐる。

むかつて左方にみえる西南區VIは大きな龜裂があるのでよくわからないが、西北區IIIからおして、飛天二體と蓮華三つとを交互においたものとおもふ。それにもう一列、そとがはに飛天がとんでゐたものであらう。たゞ北がはとのちがひは、南壁との接觸が急で、ほとんど九十度にまじはつてゐることである。

むかつて右方にみえる西北區IIIには、二列になって彫刻があり、うちがはは大きな蓮華三つと飛天二つとを交互においてゐる。そとがはの列は、すこし北壁の方へかたむいた面に彫つてゐる。そのうち二體は北壁にそひ、西端の一體は西壁のうへにある。そしてそのあひだの一體は三壁の接觸點にあたるため、それにあはすやうに、やゝ無理なポーズをしてゐる。外がはの飛天はみな高髻に圓光をおひ、小形だが、内がはのものは逆髪に圓光をおひ、大形である。

寫眞上端に大きな手が左右からでゐる。これは持送りの侏儒像である。それにはさまれた梁のうへの大蓮華は、まんなかに大きな蕾のやうな突起をもち、いはゞ半開の花である。いったいに補彩のあとが濃厚で、彫刻のうつくしさが滅殺されてゐる。(西部南北長 約3.48m)

#### Pl. 32 前室天井東部

東壁に向ひ、天井の東部をみあげたもの。東壁屋上の鳥がからうじてみえ、そのうへから一直線に東西の梁がはしてゐる。この梁上に六體の高髻飛天がある。いま、天井の龜裂が大いに害してゐるが、これら上下の配置はたくみで、ジグザグ形のリズムはおもしろい。この梁のむかつて左は東北區Iであり、右は東南區IVである。ともに二列の彫刻があつて、内がはは蓮華と飛天を交互におき、それぞれ蓮華を両手でさゝへるポーズをしてゐる。この天人はすべて童子形である。そとの列は高髻の飛天で、西の三體はそれぞれ南壁、あるひは北壁にそうてゐるが、東の二體は東壁の上をたかくとんでゐる。この構成は、さきの天井西部と、まったく同じであるが、こゝでも大きな龜裂と毒々しい補彩とで、みごとな原形が、ひどくそこなはれてゐる。

圖版上端では左右から大きな侏儒がからだをのりだしてゐる。これは梁をさゝへる持送りである。中間の蓮華は、さきにもいったごとく半開の状態である。(東部南北長 3.30m)

#### Pl. 33A 前室天井侏儒(4)

##### B 前室天井侏儒(1)

A. 梁をさゝへる侏儒は背なかあはせになつて二體づゝあるから、四個所で八體ゐるわけである。こゝには西梁北半で西面する侏儒(4)がみえる。両手で天井をさゝへ、兩足で北壁をふんでゐる。腰をひねつて立つポーズはなかなか愉快である。(像垂直高 約1.30m)

B. 東梁北半で東面した侏儒(1)である。右手をのばして天井をさゝへ、左手は左足さきをつかんでゐる。右足一本でたつてゐるのである。足の下に屏柱の柱頭がある。(像垂直高 約1.30m)

#### Pl. 34A 前室天井侏儒(2)

##### B 前室天井侏儒(7)

A. この圖には東梁北半で西面した侏儒(2)がみえる。そのまへに大きな蓮華がある。この侏儒は北壁の重屏柱をふんでなゝめに身體をつきだし梁をさゝへてゐる。片足でふんで、片足をはねてゐる。両手をひろげてのばし梁をうけてゐる。顔つきが怪異であり、容貌が粗野であり、野性的である。眉がふとく、目が大きく、まるい鼻である。頭髪は破損してゐるが、さかだつてゐることがわかる。こゝでは北壁上層の奏樂天人の列龕がみえ、そのしたの佛龕拱額の深部もよくわかる。さらに天井東端のカアブと北壁との接觸ぐあひも注意をひく。(像垂直高約 1.40m)

B. 西の梁の南半、東面の侏儒(7)である。侏儒は南壁西柱の柱頭を片足でふんで、なゝめに身體をのりだしてゐる。はねあげた右足を右手でにぎり南壁につけ、のばした左手で天井をさゝへてゐる。身體をひねつたポーズはどの侏儒にも共通し、逆髪、大きな目、みじかい鼻もおなじである。西南區VIの天井の破損もよくみえ、中南區Vの三角持送りの侏儒(8)は手足と胴體がよくみえてゐる。(像垂直高 約1.30m)

#### Pl. 35A 前室天井侏儒(3)

##### B 前室天井梁上蓮華

A. 西の梁の北半、東面した侏儒(3)である。南半の侏儒(7)もすこしみえてゐる。左右の侏儒のうへに三角持送りの天井がみえ、むかつて左は中南區V、右は中北區IIである。

## 雲岡石窟第九洞

三角持送りの天井は、中央各區に二つづゝあるが、方形の井げたのなかに、また井げたをくみ、中央にはひらたい蓮華がある。しかし、組みあげの高低はほとんどなく、すこぶる平面的につくられてゐる。井げたのそとの四隅に小さい飛天が形式的に彫られてゐる。侏儒の左右からむきあつてゐるさまは、この圖版でよくわかる。右がはの侏儒が、手をのばし、足を北壁にふんばつてゐる。そののびのびした肢態に、勁々たる力がみなぎり、怪奇な形態のそこにひそむ彫刻的迫力がみとめられる。(像垂直高 約1.40m)

B. この大蓮華の位置は Pl. 32 のうへにみられる。八つの單瓣でとりまかれ、そのまんなかひらきかけの蓮華が突出してゐる。かういふ蓮華は、ほかの石窟でまったくみない。たゞ北壁拱門の門簷にした蓮華とは一致する。あるひは、さういふところに、この形式のもとづくところがあるのかも知れない。(直徑 0.94m)

### Pl. 36 門口西側

拱門の西がはである。門神(dvārapāla)(高 1.86m)が立つてゐる。破損がはなはだしいが、大きな頭部には圓光があり、天衣の一部がそのわきに大きな弧線をそがいてゐる。主室の方へむいて、足をあげ、腰をやゝひねつた姿勢である。左手には蓮華の蕾やうのものをもつてゐる。足さきはいま床のしたにかくれてゐる。いまみる床の床は、北魏創立のものでない。北魏の當初は岩床そのものを床としたのである。主室の壁がほのかにみえ、南壁のわきにたつ、もうひとつの門神がみえる。

この門神のうへには三體の高髻の天人(坐高 0.60m)が合掌してひざまづき、主室の方にむかつてゐる。その上縁と下縁とに蓮瓣の裝飾帯がある。それにまた、拱門天井の一部がみえてゐる。門の方立には内外とも唐草の裝飾文がほどこされてゐる。内がはの方は幅 0.12m、單純な半パルメットの波状文、外がはは幅 0.40m、複雑華麗な複合唐草文である。(像高 約2.00m)

### Pl. 37A, B 門口西側および東側

門口の西側 A と、東側 B とを、前室からみたものである。前室からみた門口の構造は水平の礎を垂直の方立がうける形式であり、主室からみた構造はアアチである。その方と圓とのくひちがひは、前室より楣の下端、ちよつとはいつたところに、ほゞ三角形の附屬物となつてあらはれてゐる。その彫り残した三角形の部分には變形パルメットの唐草文様をはめる。楣と柱の南面はもとよりであるが、その

内側にも、複雑な複合唐草文が彫られてゐる。つまり環つなぎのなかに半パルメットと人物、鳥獸とを配した圖様である。(像高 約2.00m)

### Pl. 38A 門口上部

#### B 門口天井

A. 門口の上部を主室からみた寫眞である。アアチのまがりぐあひや、浮彫の彫りかた、ことに浮彫のふかさがよくわかる。表面はたひらでありながら、急にふかみをつけ、溝のやうに彫りこんでゐる。

門口のむかふに前室の八角柱の基部がみえる。どつしりした重成座のうへに、一双の合掌天人がたつてをり、その左右にパルメットの隅かざりがある。柱の左右には土壁と木の格子があるが、これは近世につくられたもので、本來は吹きはなしである。

B. やゝなゝめにみあげた天井である。梯形になつて、まへがせばまつてゐる。火焰光背につゝまれた六角の摩尼寶珠(cintāmaṇi)が、まんなかひらきかけのなかにたてゝゐるが、火焰が赫々として、これをとりまいてゐる。鉢には高臺がなく、蓮瓣ふうのかざりがあり、これを左右から二體づゝの飛天がさゝへてゐる。だいたいは、シムメトリックであるが、すこしづゝボウズがちがふ。まへの二體は片手で鉢の底をさゝへてゐる。逆髪の頭部、せまい額とふとい眉、大きな目が注意される。主室の本尊に對して供養するのであらう。これとおなじ形式の摩尼寶珠は第七洞にあり、中央アジアの壁畫にもみられる。縁飾の半パルメット波状唐草文および環つなぎ複合唐草文は、さきに注意したごとくである。(長 1.33m、奥の幅 2.05m、前の幅 1.60m)

1 A. Grünwedel, *Altbuddhistische Kultstätten*, Figs. 48, 53, 123, 165, 275, 392.

### Pl. 39, 40 明窓西壁および東壁

前室からみた明窓の西側と、東側とである。この明窓東西側壁と、前室北壁とのあひだに、なゝめの壁がまうけられてゐる。そこは、明窓アアチの傍柱にあたる場所である。いま骨ばかりのパラモン仙者がゐるが、そのうへに龍が蓮座をふんでたつてゐる。仙人は片手をあげ、片手になにかもつて、籐几に腰をかけてゐる。龍のうへは明窓アアチの拱額となり、縁に鳥形をならべ、そのうへには坐佛列像をほること、さきにみたごとくである。

明窓の西壁には象にのつた菩薩があり、その下に山岳が

あらはされてゐる。奇異な塊状で山岳が重疊するさまを象徴的にあらはし、太鼓の撥のやうな樹木を點在さす。この山岳の彫法は獨特で、断面内くぼみとなり、ふちがまるくもりあがつてゐる。ふつうの浮彫と逆である。東壁には池中から生じた蓮華に坐す菩薩がゐる。東西壁のおくにあたり、菩薩が侏儒の両手の上にたつてゐる。これは第七、第八洞にもみられた人像柱(caryatid)にほかならぬ。

前室北壁の東西佛龕や重層柱がみえるが、かういふ、ないめからの寫眞によつて、浮彫のふかさが知られよう。(天蓋までの高さ西 2.36m, 東 2.28m)

Pl. 41 明窓 天井

中心に大蓮華がある。二重の蓮瓣で、まんなかは、たひらかな圓板になつてゐる。子房はない。この大蓮華のまわりに八體の飛天が放射状にあらはされ、みんなでこの蓮華をささへてゐる。八體のうち、對角線のある位置にある四體は身體が大きく、逆髪の天の童子である。みじかい腰衣をつけてゐる。南側の二體は、足をちぢめて飛びあがつたかたち、なかなか奇抜な表現である。柔軟な身體でうつくしい。これに對し、ほかの四體はやゝ小形で頭は高髻、ながい裳をつけてゐる。童子ふうのものより身體が小さい。優雅な姿態で、ながれるやうにとんでゐる。(蓮華直徑 1.13m)

Pl. 42 明窓 東壁

すそにむくむくとした山岳がならんでゐる。その上に池があつて、そのなかから蓮華の莖が三本でゐる。まんなかの蓮は大きく、蓮上に蓮枝と水瓶とをもつた菩薩が安坐してゐる。寶冠をつけ、凛々しい顔である。指もうつくしい。もちものからいへば觀音菩薩ともいへるが、はっきりしない。左脇に天蓋をさしかけてゐる天人がゐる。右脇には、これとむきあつた天人がゐる。これも侍者であらう。池の兩がはに、かはいゝ比丘が合掌してひざまづいてゐる。(天蓋まで高さ 2.28m)

Pl. 43 明窓 東壁 蓮上菩薩

丸顔で凛々しく、かはいゝ顔つきをしてゐる。三面寶冠に新月形をのせ、威嚴を増す。膝の折り方がやゝかたいが、簡明であり、蓮瓣もうつくしい。下裳をつけ上體ははだか、天衣を左肩からかけてゐる。頸飾と腕輪をつけてゐるのは、菩薩の莊嚴である。(像高 0.83m)

Pl. 44 明窓 西壁

西壁のすそもたかい山峯がならび、そのあひだに樹木さへあらはされてゐる。その上を大きな象が巨歩をはこんでゐる。象は頭絡、鞍絡をつけ、そのうへに一菩薩が安坐してゐる。右手を腰にあて、左手をあげてゐる。うしろから天人が天蓋をさしかけてゐる。これに先驅してとびながら二人の天人が琵琶をひき、横笛を弄してゐる。象にのつてゐるが、文殊菩薩であるといふことはできない。

雲岡石窟の創設者、曇曜の譯した『付法藏因緣傳』(大正大藏經、第五十卷、p.318) 卷五に、龍樹菩薩(Nāgārjuna)がバラモン(Brahmaṇa)を説伏した、つぎのやうな一節がある。バラモンは問答のすゑ、辯に窮して一寶池を現じ、一蓮華を生じてその上に坐し、地上の俗人とはちがふぞとほこつたが、ナガルジュナは、たちまち、象に變じて池中にいり、蓮枝をもぎとつたといふ。池中蓮上の人物と騎象の人物が兩壁に相對してゐるから、この説明には、きはめて都合がよい。しかし、それにもひとつの難點がある。それはバラモンの容姿である。バラモンをあらはすには、一定の方式があつた。それは瘦せこけて骨ばつた老人のすがたである。こゝでは、それと反對に肉つきゆたかな壯者のすがたであらはされてゐる。けれども、必ずしも寫實にとらはれなかつた雲岡の造形精神からすれば、このことは決定的な難點とはならないであらう。

しかし、象と寶池のでてくるのはもうひとつ北魏の慧覺等譯『賢愚經』(大正大藏經、第四卷、p.395 以下) 卷六、富那寄緣品にもある。それは羅漢プウルナ(Pūrṇa) (富那寄)のはなしである。羅漢プウルナの勸請に應じて、釋尊は神足五百の弟子をしたがへて虚空をふんでセーナ(Sēna)の國スナアパランタカ(Sunāparantaka) (放鉢)國にむかつた。このとき神足第一と稱せられた大目犍連(Mahā-Maudgalyāyana)は象にのつてむかひ、天眼第一とうたはれた阿那律(Anurudha)は池中の蓮上に坐してとんでいったといはれてゐる。經典のいふところによると、マハアマウドガリヤヤナは千匹の象をあらはし、それを四分して寶座の四方にわかち、そのうへにすはつたといふ。しかし、おのおのの象は六本の牙をもち、各牙の先端に、七つの浴池があり、ひとつひとつの浴池には七本の蓮華があり、その華ごとに七人の玉女を現じたといふ。かくて千の象、六千の牙、四萬二千の池、二十九萬四千の蓮華、二百五萬八千の玉女、しかも、その二百五萬八千の玉女が、目犍連のまはりでさまざまに變化し、その數は無量、その光はあたりを照歷したといふ。

これに對シアエルツダの方は、七寶でつくつた池を現じ、金色の蓮華を生ぜしめ、その莖はみな七寶の合成でつくつ

## 雲岡石窟第九洞

た。そしてみづからは、その上に結跏趺坐し、うなじに日光をおひ、金色の光をもって天下を照輝しつゝスナアパランタカ國に飛行したといふのである。

まことに不可思議、不可測、われわれはこの記述に眩惑するのほかはない。この視覚を絶した數、常態をこえたすがたは容易にわれわれの想像をゆるさない。このまゝのすがたを造形的にあらはすことは、たうてい、できない。けれども、雲岡の藝術家たちは、うまくそれを處理して、かやうな簡明なかたちにまとめあげた。マウドガリヤアヤナはたゞ一匹の大象にのり、アヌルグダはたゞ池中の蓮華に坐す。ちょうど『維摩經』にみる繁瑣な形容と、雲岡維摩像にみる簡明な圖形とのちがひである。さうすれば、あるひはこの圖像は『賢愚經』のはなしとすることができそうでもある。

いまこれを龍樹菩薩のはなしとするか、プウルナ因縁とするかは容易にきめかねる問題である。それは將來の解決にまかせたい。たゞこの相對した二壁の照應が、たがひに緊密であつて、この兩方がたがひに相よつて、なにかをものがたらうとしてゐることだけは、たしかである。(天蓋までの高さ 2.36m)

### Pl. 45A 明窓 西壁 騎象菩薩

#### B 明窓 西壁 琵琶樂天

A. この中心像は、たかい大きな冠をいたゞいてゐる。頭光はまるく、これに天衣が大きく弧を彘がいてゐる。その圓満な、しかし凜々しい顔つきと、巨歩をはこんでゐる象の上に安坐した自由なからだつきが注意される。自由なとりあつかひとともに、作者の簡明な刀法はわれわれの心をうつ。(像高 0.92m)

B. 琵琶を奏しつゝ先驅する樂天である。兩脚をはね、顔をあげてゐる。左手も右手も、こまかくあらはされてゐる。簡明な、しかしいきいきとした彫法である。(像垂直高 0.56m)

### Pl. 46A, B 前室 明窓 兩側 バラモン仙者

A. 明窓アアチの西側にある。高髻で、顎ひげをはやしたバラモン仙者である。全身が瘦せこけて骨ばつてゐる。わづかに腰衣と肩からの天衣がみられる。目はふかく、眉をよせ、眉のさきは渦卷になつてゐる。椅子は半跏菩薩とおなじ籐几である。右手に鬘髻をもち、左手は第二指をのばして、なにかを指さしてゐる。肩のうへの空白に六瓣の、まるい蓮華を彫つてゐる。

曇曜と吉迦夜共譯の『付法藏因縁傳』(大正大藏經、第五十

卷、p.322) 卷六に、鬘髻を賣るバラモンのはなしがある。むかし、バラモンがゐて、たくさん鬘髻をあつめた。パタリプトラ (Pataliputra) (華氏城) の城中に賣りにきたが、だれも、買ふものがない。それで怒つてあたりちらし、この鬘髻を買ふものがなければ、この城中は愚痴愚鈍のあつまりだと、悪評をふりまくぞとおどした。これをきいた城中のウパソク (Upāsaka) (優婆塞) たちは、すていもおけず、錢物をもって買ひとつてやった。ところが、その買ひとりにあたり、銅線をもってきて鬘髻の耳の孔にとほしてみた。そして、みなとほつたものは高價に、半通のものはいくらかやすく、とほらぬものは値段をあたへなかつた。バラモンは大いにいぶかり、そのわけを問ふと、ウパソクたちのいはく、銅線のとほるものは佛の説法をきいて智慧高勝なもの、半通のものは説法をきいたが、まだ分別のよくないもの、とほらぬものは全然説法をきかなかつたものだと説明した。ウパソクたちは、この鬘髻をもって城外にゆき、塔をおこして供養した。この功德によつてウパソクたちは、命をはつて、みな天に生れることができたといふ。(像高 1.20 m)

B. 東脇のバラモンも、西脇の像とまったくおなじである。右手をかざし、うへの方をみてゐる。左手はなにかもつてゐるらしいが、わからない。背後には重層柱の一部がみえ、童子が二人づい、一組になつておどつてゐるさまが、うかゞへる。野性的なおどりの動きが、いきいきとしてゐる。

530 年ごろと推定されるカンサス市美術館所蔵の一碑像に、鬘髻をもつたバラモンと、鳥をもつたバラモンとが相對しゐることを、ル・ロイ・ダヴィッドソン氏 (J. le Roy Davidson) が指摘してゐる。<sup>1)</sup>しかし、いまこの場合には鳥であるとはいひにくい。小手をかざしてうへをみてゐる姿は、すでにガンダアラの浮彫にもあり、そこでは十六學士所問縁の一人とみとめられてゐる。<sup>2)</sup>けれども、こゝにあてはめるには、不都合である。さきにひいた『賢愚經』(大正大藏經、第四卷、p.393 以下) 卷六、富那寄 (Purna) 因縁には、神足五百の弟子たちが出發について、釋尊は八金剛神を四方にたて、四天王を先驅嚮導とし、帝釋、欲界天子百千萬衆をうしろにし、また無量の衆衆にとりかこまれながら、天地のあひだに光明を照耀しつゝ虚空をついて飛翔した。この途中、田間に牛をつかふ五百の農夫を度し、廣野でたはむれてゐる五百の童女を度し、つぎに林澤の間にゐた五百の仙人を度して沙門にした。その五百の仙人が、はじめ林澤のうちにゐたが、光明が地をてらし、あたりが金

色にかはったので、あほいで虚空をみた。すると、そこに釋尊が大衆をひき具して遊行するところであったから、心おのづからおどり、崇敬の念が生じ、佛に請うて得度したのである。いま小手をかざし中空をあほぐすがたは、ちやうどこのはなしを想起せしめる。しかし、それにしては、欄腰のパラモンが、これに對してゐるのが不似あひである。だから、むしろ、こゝでは欄腰のパラモンから解釋をのばして、そのパラモンが欄腰を賣つて錢物をうけとつたところとした方がよくないかとおもふ。手中にあるものは、財布ではなからうか。

<sup>1</sup> J. le Roy Davidson, *Traces of Buddhist Evangelism in Early Chinese Art* (Artibus Asiae, Vol. XI, 4) 1948, Fig. 5, p. 260.

<sup>2</sup> A. Foucher, *L'art gréco-bouddhique*, Figs. 432, 436. 十六學士所問縁は『雜阿含經』(大正大藏經, 第二卷) p. 95, 255, 256, 310, 『大智度論』(大正大藏經, 第二十五卷) p. 82, 85, 295等參照。また『經集』(Suttanipāta)(南傳大藏經, 第二十四卷)五, 彼岸道品 (parāyana) p. 371-386參照。

#### Pl. 47A 前室 明窓 西壁 パラモン仙者頭部

##### B 前室 明窓 拱額 侏儒

A. 高髻をゆひ、鬚髯をたくはへてゐる。額には大きな皺があり、眉毛はまんなかで渦をまいてゐる。口をかすかにひらき、齒をのぞかせてゐる。耳はながく肩に達し、骨はいたいたしくあらはれてゐる。怪奇な顔つきのわりに、したしみのある表情である。(頭高 0.37m)

B. 明窓拱額、東のふちにある天人である。上には飛天がならび、その東端にこの人物がたつ。やはり一種の侏儒像であらうか、脚がみじかく、胴がながい。わづかに腰衣をまとひ、上身は全裸である。左手をあげ、右手に力をいれてまへにさげてゐる。顔は獅子鼻を中心に幅ひろく、その皺と頤ひげとが目だつ。刀痕歴々としてのこり、無造作に彫つてゐるが、生彩がある。(像高 0.72m)

#### Pl. 48 明窓 西壁 人像柱

むかつて左方に明窓西壁の浮彫がみえ、その右端に人像柱がたつ。合掌してすらりとたつた菩薩形である。こゝでは、もはや頭上になにもうけてゐないから、柱といふにはあたらない。けれども、第七、第八洞からみれば、その轉化であることはいふまでもない。この人像柱には、なほ、その下にこれをうける侏儒がゐる。はちきれるやうな肉づきの侏儒は、謹直な顔だが、腰をひねつてすはつてゐるのはユウモラスである。明窓の浮彫に比して、この人像柱と侏儒の彫りは一段とまるみとふかみとをくはへてゐる。右方には

主室南壁の上層龕が暗がりにうつすらとみえてゐる。

西側の山の上に一本の蓮枝(Fig.32c)がある。莖は線彫りにちかく、半パルメットの葉をもち、花は七瓣、單瓣であるが、めづらしくむつくりした花である。(像高 1.38m)

#### Pl. 49A, B 明窓 兩壁 人像柱

明窓の北端にある人像柱である。東西ともまったくおなじ形式で、胸まへで合掌してゐる。胸をはり、胴はほそく、腰がふとく、膝がまたほそくなつてゐる。この立像の曲線は實にうつくしい。豊麗なまる顔で、頭上にうつくしい寶冠をいたゞく。寶冠は正面のロゼットかざりの上に弦月形をおく。背には無地の圓光がみえてゐる。(東は高 1.32m, 西は高 1.38m)

#### Pl. 50A, B 明窓 兩壁 侏儒

人像柱の菩薩の足をさへてゐる。第七、第八兩洞でも同様なかたちの侏儒があつたが、それは兩脚をおなじ角度にをりまげてゐた。それにくらべると脚の姿勢が自然で動的である。浮彫の技法がよくわかる。像の最高所は一定して平面である。しかし、各部は充分にまるみをもち、壁面に對して、ほとんど直角にほりこまれてゐる。だから、丸彫りにちかづき、つよくまるみのもりあがる効果がでる。よこの奇妙な山岳形は(Pl. 48), かならず表面をくぼませ、輪郭をふくらせ、壁面に對して、ほとんど直角に切りこまれてゐる。それでこゝに不思議な、非現實的な面が生じ、侏儒のつよい丸みとよいコントラストを呈してゐる。(像高約 0.72m)

#### Pl. 51-53 主室 南壁

前室よりも、はるかに、にぎやかな壁面である。明窓と拱門を軸として左右に整然と壁面が整頓されてゐる。拱門のわきに高さ約2.00mの腰壁、1.60mの第一層、1.60mの第二層があり、明窓のわきに2.20mの第三層があり、その上に天井に接する上層部がある。けれども、注意してみると、左右の佛龕はシムメトリックでない。腰壁の供養者列像、門神は、拱門の門神とともに、通じて破損がはなはだしい。ここからみると、東西壁のいちじるしく前にかたむいてゐるのがみえる。それにひどい補修の脇侍菩薩が側面からみられる。右端、または左端に、くろぐろとみえるのは本尊大佛の手であり、脚である。床は、まだ0.30—0.40mうもれてゐるから、各壁のすそは完全でない。(高 8.78m, 幅 10.68m)

## 雲岡石窟第九洞

### Pl. 54 主室南壁中央明窓

主室の西から明窓東壁を中心にながめた寫眞である。人像柱と明窓の彫像とは背後の面を一段異にしてゐるが、その最高所をつらねる表面は一致して、ひとつの平面からなる。人像柱の高さは 1.32m、こゝではまったく西面し、第七、第八洞のなぐめむきであつたのとちがふ。明窓の上縁には、拱額の形式で八體の跪坐する高髻天人があらはされてゐる。これが最上層であつて、この東西には、三角垂飾と蓮瓣文帯にはさまれた坐佛列像(高 0.52m)がある。これより上は天井になる。こゝには明窓の左右がすこしみえてゐる。明窓の下には大きな屋根があらはされ、棟の鳩尾が蓮瓣文帯にくひいつてゐる。(高 2.56m, 幅 2.07m)

### Pl. 55 主室南壁中央拱門

拱門の左右には門神がゐる。門神の上には、蓮華をふまへて、翼をひろげた正面むきの鳥がたつてゐる。拱門上部には豪壯な拱額があり、十一體の列坐佛を中心にならべ、その上縁と下縁とに飛天をたどしくつらねてゐる。上縁の飛天は大香爐を中央にして左右四體づゝ、いづれも逆髪の童子形である。下縁の方は蓮華形光背につゝまれた摩尼寶珠を中央にして、左右三體づゝ、この方は高髻のやさしい天人があらはされてゐる。このやうな豪華な拱額の彫刻はめづらしい。この上には、よこながの屋根形をまうけ、禪定形の坐佛を中心に、左右おのおの四體の跪坐天人を彫る。屋根のうへは蓮瓣文帯があつて、すぐ明窓となる。(高 2.96m, 下幅 2.45m)

### Pl. 56 主室南壁中央拱門拱額西端

拱門の西壁がすこし見え、その上に拱額がにぎやかにうつつてゐる。上下兩縁の飛天の彫りが、かなりふかく、顔や身體のまるみが、はちきれんばかりである。列坐佛は、一段とふかい浮彫のおくにある。このやうなどぎつい浮彫の重疊は第七、第八洞にはみられなかつた。

右がはには西部の屋形龕と楣拱龕とがかさなつてみえる。こゝにも浮彫の深度に興味はひかれる。(鳥高 0.58m)

### Pl. 57 主室南壁中央屋形龕

明窓の下である。瓦屋根のあさい龕のうちに、坐佛と八天人とを配置して、まことに莊嚴、かつ優美である。坐佛にも天人にも臺座がない。坐佛は無地の圓光背と擧身光背につゝまれてゐる。彩色は後補であるから、これにわづらはされてはならない。天人は丈たかい寶冠をつけ、ひさまづ

き合掌する。中心にちかい天人は顔をやゝよこにむけて坐佛にむかふが、外がはの天人は顔をほとんどま正面にむけてすわる。このやうな彫刻家の配慮は、この列像にふかい精神性をあたへてゐる。南壁の中央にあつて、この龕があるのは意味ふかい。第七、第八洞南壁の供養者パネルの一變化とみとめられる。下縁には蓮瓣文帯をつくり、すぐ下の拱門拱額に接する。拱額上縁の逆髪をした童子飛天はおそろしい顔、やさしい顔いろいろある。中央の香爐を左右からさゝげてゐる。(龕高 1.10m, 軒長 3.90m)

### Pl. 58A 主室南壁中央明窓上層部

#### B 主室南壁中央拱門拱額

A. 明窓の上は左右四體づゝ高髻の供養天人が跪坐してゐる。その上には天井と境する三角垂飾(高0.35m)があり、一つづゝに鈴と鐸とが交互にさがつてゐる。圖版にはみえないが、この上は天井となり、折りあげの部分に飛天がならぶ。左右シムメトリックにむきあひ、中心の二體は左右から香爐をさゝげてゐる。高髻の天人と逆髪の天人とが交互にゐるのは、かはつた構成である。(上端まで高 0.83m)

B. こゝの十一體の坐佛のうち、なかの九體は全身像である。兩端の二體は上半身があらはされてゐるのみである。みな禪定形である。光背の火焰はみなのちの加彩にすぎない。(高 1.23m)

### Pl. 59A 主室南壁中央拱門拱額東部

#### B 主室南壁中央拱門拱額と屋形龕(細部)

A. 拱門拱額の東部にみる飛天である。飛天は逆髪で大きな耳がある。よこをむいた顔に、皮肉な微笑をうかべた口が特徴的である。たくましい肩や腕、くみあはせた足はきはめて自然であり、幅ひろい天衣がいきいきとして姿態にはづみをつけてゐる。それはすばらしい舞踊家の跳躍をおもはせる。しかし近世の加彩は石の肌をすっかり埋めつくし、異様な、にぶい印象しかあたへない。坐佛にしても目や口をはじめ、全身に補彩があつて、にぶい印象をあたへるし、その光背のでたらめな加彩が、人々をあやまらしめる。(像垂直高 0.72m)

B. 上に屋形龕の中央坐佛がみえ、下に拱門拱額の一部がみえる。屋根の軒には三角垂飾があり、佛像はかなりふかく彫つてある。蓮瓣帯の下には、中央の大きな香爐を左右から飛天がもちあげてゐる。香爐は博山爐ふうで、さきがとがり、すそひろがりの臺がある。飛天は兩方とも逆髪だが、向つて右は童顔でにっこりわらひ、子供つぽい肢態

をのびのびと空中に浮かべてゐる。左は眉梁がつよく突出し、大きな目をひらき、耳には大きな環をさげてゐる。これは童子といふより、もっと成熟したものをおもはす。左右の飛天をこのやうに對照的につくつてゐるのが注意される。(坐佛高 0.57m)

Pl. 60 A, B 主室南壁 拱門左右門神

C 主室南壁 拱門拱端鳥形

A, B. 拱門の下部は東も西も壁がひどくあれてゐる。このあれた壁面に門神がみられる。拱門の側壁と拱門のわきとである。拱門側壁の門神はさきにみたごとく、手になにももつてゐない。兩わきのは片手をふりあげて三叉 (trīśula) の矛をにぎつてゐる。そこで片方の肩がつよくあがる。他の手は腰にでもあてゝゐるらしい。鎧はたしかに革甲である。襟がみえ、胸まへのしばった紐がみえる。下半身は、まったく破損してゐるが、おそらく片足をうかしてゐたであらう。(像高約 1.70m)

C. 拱門の拱端、門神のうへには、左右いずれも鳥形、すなはちガルダ (garuḍa) をほる。これは西端の鳥で、その側面は Pl. 56 にみられる。かなり肉のあつい浮彫である。嘴は破損してゐるが、正面にむき、翼をひろげてゐる。まるい胴には羽毛を鱗状に刻し、みじかい兩脚を左右にひらいて、がっしりと蓮座をふむ。頭には圓光がある。臺座は大きな鉢形で、菊花ふうの線刻がある。素朴ながら力づよい彫刻である。(鳥高 0.53m)

Pl. 61 主室南壁西部第三層

上縁、下縁に蓮瓣飾があり、壁面の中央に尖拱の佛龕がある。拱額には火焰飾がほどこされ、龕傍の柱には半パルメットの波状唐草がたてに彫られてゐる。柱頭には籐座ふうのかざりをおき、これを虎がふんでゐる。虎も漢代の傳統にしたがつてゐる。坐佛本尊の顔面はかなりあれてゐる。偏袒右肩、肩の線はなだらかである。臺座は五成の座で、さらに一段の臺があり、しかも各層に装飾文を彫つてゐるので、すこぶる装飾的である。最上部、最下部および臺には半パルメットの波状唐草文があり、なか二段は仰蓮と俯蓮の蓮瓣帯である。坐佛の光背は單純な頭光と舉身光のみで補彩の火焰はいまいである。龕外の左脇には三段に彫像があり、上二段は瘦せた老人がひざまづいてゐる。高髻にゆひ、鬚をつけ、肋骨をあらはし、腕も筋ばつてゐる。それに圓光をつけてゐる。上の老人は右手をつよくのばし、指端は佛龕にふれてゐる。下の老人は右手を胸においてゐる。

兩人とも、左手は腰にあてゝゐる。そのしたに比丘形の人物がひざまづいて兩手を胸にあて、やゝ俯目で蓮座のうへに、かるくすはつてゐる。

龕外右脇には二體の高髻天人が合掌してひざまづく。ひくい蓮座のうへにひざまづいたすがたは、きはめて端麗である。そのうへに明窓の方をむいてとぶ二體の高髻飛天がある。これは、この壁の佛龕に無關係の彫像で、むしろ明窓西壁にむいて供養するものであらう。いづれにしても、この龕の左右はシムメトリックでない。それに瘦身のバラモンたちもゐるから、なにかの物語にちがひないとおもふ。おのおのの彫像は洗練されてゐるが、構圖的には、あまりまとまりがない。

『雜寶藏經』(大正藏經, 第四卷, p.488) 卷七をみると「尼乾子 (nirgrantha-putra) が火聚に投じて佛に度せられる縁」といふはなしがある。釋尊がシュラヴァスティ (Śravastī) (舍衛城) にゐたとき外道邪見 (tīrthaka) の六師およびその眷屬を説伏した。このため尼乾子五百人は、説破されたのを苦しめ、むしろ投火自殺しようとはだてゝ薪草をあつめた。そこで釋尊は慈悲心をおこし、薪草の火をもえないやうにし、みづからは火光三昧 (agni-dhātu-samādhi) にはいった。尼乾子たちは、この大火聚をみてよろこび、これに身を投ぜんとした。しかるに、火聚にはいと、ふしぎや、かへつて身心ともに清涼快樂をおぼへた。しかも、かれらは、そのなかに佛のゐますをみて、心大いに歡喜し、出家せんことをこひねがつた。釋尊、ために「よく來た、比丘よ」とのたまふと、鬚髪おのづからおち、知らぬまに法服が身をおほふてゐた。釋尊はかれらのために説法し、かれらはたちまち阿羅漢果をえたといふ。この書には、なほ、これにからまる前世の因縁をとくが、この佛龕は尼乾子投火のはなしにちがひない。

すなはち、中心本尊が、めづらしくも火焰さかんな拱額の下にすわることは、あきらかに火光三昧にあるをしめすものである。たゞ禪定印でなく、舉手と捻手の形式であるのは、三昧にはいったものとして不都合かも知れないが、雲岡の手相はさほど嚴格でない。そのうへ火光三昧より起きて、すぐ尼乾子のために法をとくのであるから、かういふすがたにしたのも、かならずしも不都合とはいへない。左脇うへの二老仙は尼乾子たちであり、そのしたの蓮座に胡跪し合掌し、首をふかくうなだれてゐるのは、まさに火中に歡喜して比丘となつた尼乾子のすがたであらう。右脇胡跪合掌の天人形は、文中に記述はないが、これを讚歎する天人たちとみてよからう。火光三昧の佛を大きく指した、活動

## 雲岡石窟第九洞

的な大きな老仙から、手をひいて胸におき長跪した、やゝしづかな、小形の老仙にうつり、さらに首をたれ、蓮上に胡跪合掌する可憐な比丘形にうつる。この左脇の上から下への推移は、物がたりの進行を、たくみに象徴化したものとして興味がふかい。(第三層高 2.50m)

### Pl. 62 主室南壁第二層

横幅のひろい楯形龕である。楯拱の西半は折れまがって西壁にのびてゐる。こんな佛龕はほかにない。そのためか本尊坐佛は南壁の隅に彫られてゐる。偏袒右肩、右手は舉手、左手は膝にふせて衣端をもつてゐる。やゝなで肩である。光背は補彩のために原形をうしなつてゐるが、圓光と舉身光とからなつてゐたものとおもはれる。臺座はなく、床上に結跏趺坐する。左右にそれぞれ八體づゝの高髻天人が二段に跪坐してゐる。みんな同様の合掌形であるが、本尊にちかいは、顔を側面にむけて恭敬の氣もちをあらはし、外がはにちかひものほど、しだいに顔を正面にむけてゐる。このやうな顔の方向の變化は造形的な効果をねらつたものである。きはだつてふかい浮彫で、深部が黒々とかげが濃い。はなしは前述のごとく(p. 33), 『雜寶藏經』(大正大藏經, 第四卷, p. 466) 卷三の「八天しだいに法を問ふ緣」であらう。楯拱額はパルメットの複合唐草文と飛天とを交互におき、はなやかな氣分をあたへ、帳幕が、そのしたにゆるい弧線をふかいてゐる。(Pl. 77, 79) この層の上縁には蓮瓣文帯、下縁には半パルメットの波状唐草文帯がある。(第二層高 1.74m)

### Pl. 63 A 主室南壁西部第二層拱額東半

#### B 主室南壁西部第二層右脇聖衆

A. 裝飾文様のいろいろの形がしめされてゐる。圖の右上には第三層本尊の重成座がみえる。層狀の唐草文は二つとも同一方式で、半パルメットつなぎの波状である。たゞ中央には三つ葉のパルメットが残されてゐる。第七、八洞にくらべると、粗末な、きゃしゃな唐草文である。第二層と第三層とをわかつ蓮瓣帯も、第七、八洞にくらべてよわい。複瓣の一つ一つの、ふくれ方はたりないが、全體としては、かへつてよくふくれ、先端が折れかへつてゐる。これは第九、第十洞一般にみる特徴である。拱額内の唐草文も注意される。全體を獨鉢のかたちにして、中央でゆはへる。ゆはへたところからいふと、そこをでた半パルメットは、さらにうちにまきこんで、合して三つ葉のパルメットになる。このやり方は、こゝではじめてみられるのであるが、ほそく

て、きゃしゃである。複合唐草文と飛天とを交互におさめてゐるが、彫りもあさく、貧弱である。拱額のうへからは三人の合掌天人がのぞいてゐる。(蓮瓣帶高 0.26m)

B. 右脇八人の聖衆は上四人と下四人で、大きさがちがふが、合掌跪坐の姿態はよく似てゐる。かなりふかく彫りこんでゐるが、各像の表面はたかさをひとしくして、上の拱額や下の唐草文帯、乃至本尊ともひとつの平面よりなることがわかる。そして、同時に、これはこの壁面製作の過程において、とにかく一度平坦な壁面をつくりあげたことを推察せしめる。(像高 約0.70m)

### Pl. 64 主室南壁西部第一層

横幅のひろい屋形龕である。瓦葺の屋根は西壁についでゐる。軒には弧狀にたれた帳幕があり、西壁との隅には特に大きな幕がたれさがり、ゆはへられてゐる。これで、おなじ屋下でありながら、南壁がはと西壁がはとを二つに區ぎつてゐるのである。二つの壁面にわたるものをおなじ屋形龕に包括したのはなぜか。すこぶる興味がある。兩方が相關聯する場面だからであらうが、これをあきらかにすることはむづかしい。

中央に大きく半跏の姿勢をして籐座にすはつた像が二體ある。二體ともに同一のポーズであり、顔もよく似てゐる。まるい童顔で、その額にたれた頭髮はちぢれてゐる。きはめて非寫實的な髪である。ならんで、どちらも西方に身體をむけてゐるが、むかつて右の像は左膝に小さな子供をのせてゐる。まるで人形のやうに小さい。それに惜しいことに頭が缺けてゐる。この子供をいだくのはあきらかに鬼子母神(Hārītī)である。北魏の西域僧吉迦夜と曇曜の共譯した『雜寶藏經』(大正大藏經, 第四卷 p. 488) 卷九には「鬼子母が子をうしなふの緣」という因縁談がある。鬼子母には子一萬あり、その末子をピンガラ(Piṅgala)(孃伽羅)といふ。ところが鬼子母はその性兇暴で、人の兒を殺害してはこれをおもつたので、人民が佛にうたへた。佛は末子ピンガラをとらへて佛鉢のそこにかくした。愛兒をうしなつた鬼子母も、これをかなしみ佛にうたへた。佛はこれにこたへ、三歸五戒をうけて、以後一切殺戮をしなければ出してやらうといった。かうして、その子をかへしてもらつて、この話はをはるのであるが、なほこれについて鬼子母の前世のことが書いてある。それは、むかし、かの女が羯膩王の第七女として生れたとき、功德をつんでも、いっかう持戒しなかつた。それで、いま鬼形となつたのだと佛がさとしたといふ。いふまでもなく、後世、鬼子母神は托胎、出産の母



神、または子供を保護する女神として、端麗なかたちをあ  
たへられてゐる。しかし、この石窟の鬼子母神は、雲岡でし  
ばしばあらはされた侏儒形にちかく、女性的特色はすくな  
い。とにかく、當時は、このやうなすがたを鬼形とかんがへ  
て、これを表現したのであらう。この鬼子母神の背後になら  
ぶ同形式の像は、その夫、パANCHカ（般闍迦）(Pāñcika)で  
ある。ガンダアラ浮彫ではハアリティとパANCHカとを、夫  
婦のごとくならべてあらはしたのことが多い。二像の左右に  
は二段になって跪坐合掌する供養者がゐる。左脇はみな高  
髻で、右脇には、下に二人の高髻形、上に一人の高髻形と一  
人の童形がゐる。(第一層高 1.80m)

<sup>1</sup> A. Foucher, *L'art gréco-bouddhique du Gandhāra*, Tome II,  
Paris 1918, Figs. 382—389.

Pl. 65 主室南壁西部第一層 鬼子母夫妻像

二像ともまったく同形式であるが、鬼子母神の夫妻であ  
る。むかつて左の方は口をとじ、左手を胸にあげてゐる。こ  
れは『雜寶藏經』(大正大藏經, 第四卷, p. 492) 卷九にいふ老  
鬼神王パANCHカ (Pāñcika) (般闍迦)である。右の方、口を  
あけ、子供を膝にのせてゐるのは、その妻、すなはち鬼子母  
(Hārītī)である。あまりにも、この兩者が似てゐて、男女を  
わかちがたいが、それは雲岡の彫像がガンダアラのものに  
比して類型化したためである。パANCHカは、ハアリティの  
配偶として、ガンダアラ以來つねに一対像としてあらはさ  
れるが、しばしば財布をもったすがたでしめされてゐる。<sup>1</sup>  
こゝには、べつに財布はあらはされてゐないが、この石窟の  
造營者たちは財神たる性質をよく知つてゐた。曇曜の譯し  
た『大吉義神呪經』(大正大藏經, 第二十一卷, p. 571)に「善  
意財富の般闍迦」といふ名がみえてゐる。つまり、出産の女  
神と財富の男神とを一対にしてあらはしたのである。しか  
も、それはガンダアラ以來の一般的通則であつたのである。

<sup>1</sup> A. Foucher, *L'art gréco-bouddhique du Gandhāra*, Tome II,  
Figs. 387, 389, pp. 102 sq.

Pl. 66 A 主室南壁西部最上層

B 主室南壁西部腰壁

A. むかつて左に明窓の一部がみえ、そのとなりに第三  
層の拱額、飛天、バラモンなどがみえてゐる。そのうへには  
どつしりした蓮瓣文帯があり、坐佛列像をならべてゐる。  
坐佛はみな禪定形である。通肩のものと、偏袒右肩ながら、  
衣のはしを右肩にかけてゐるものが交互にある。そのう  
へには三角垂飾があり、その各先端には鐺鈴がさがつてゐ

る。つきは天井になるが、こゝは折りあげ式になってゐて、  
その天井なげしともいふべきところに雁行した飛天の一带  
がみとめられる。西壁の隅は破損がやゝ目だつてゐる。(坐  
佛高 0.47m)

B. 畫面の左端に拱門わきの門神が三叉の矛をかまへて  
ゐる。頭部の冠に鳥翼がみえるのは第八洞の門神をおもは  
す。腰壁はひどく損じてゐるが、五體の立像が圓光背をお  
うて、正面むきに立つてゐることがわかる。合掌してゐる  
らしい。頭部の様子はまったくわからない。第一層とのあ  
ひだに蓮瓣文帯のあつたことが、からうじてわかる。床に  
は近世の方壙がしいてあつて、すそが若干うまつてゐる。  
(腰壁高 1.80m)

Pl. 67 主室南壁東部第三層

屋形籠のうちに坐佛の本尊を安置する。棟には鴟尾のほ  
か三角飾が七つ、兩翼隅棟に大きな三角飾が二つみえてゐ  
る。これは火焰やパルメットの略されたもので、かへつて  
異例である。軒に垂木をならべ、そのしたに分あつて帳幕  
をつける。本尊は肉髻と鼻とに傷がある。やゝなで肘で、  
偏袒右肩、舉手の右手は肉つきがわるい。五成の臺座には、  
上下層に半パルメット波狀唐草文帯をほどこし、中間の上  
下に蓮瓣文帯がある。舉身光背の彩色は後補である。脇侍  
は左脇に二體、右脇に三體の立像で、いづれも高髻の頭、兩  
手にながいが柄のついた天蓋をさゝげてゐる。天蓋の供養で  
ある。天蓋は梯形の蓋形に三角垂飾をたれてゐる。身體各  
部の比例はうつくしい。顔のむきが、それぞれかはつてを  
り、手つきもさまざまである。天蓋をさゝげ、自由な、たの  
しげな様子である。足はひらいて、爪さきをまよこにむけ、  
ひくい蓮座の上になつてゐる。上縁と下縁とはともに蓮  
瓣文帯をつくり、最上層、また第二層と區別してゐる。

曇曜の譯した『雜寶藏經』(大正大藏經, 第四卷, p.471以  
下) 卷五にはその劈頭に(1)「天女もと華蓋をもつて迦葉佛  
塔に供養するの緣」(2)「天女もと蓮華をもつて迦葉佛塔に  
供養するの緣」(3)「天女もと八戒齋(Aṣṭāṅga-samanvāgato-  
pavāsa)を受持するをもつて天にうまるゝの緣」といふ三つ  
のはなしがある。はなしの筋はみな同巧で、過去に迦葉佛  
塔に供養したり、八戒齋を受持した結果、天にうまれて端  
正殊特のすがたをえたといふ。この功德に對し、釋帝桓因  
(Śakra-devānām Indra) はつぎのやうな讃を唱してゐる。

はなはだ奇しき功德田なるかな もろもろの穢惡を除せ  
ん、  
かくのごときすくなき種子にて 天のすぐれたる果報を

## 雲岡石窟第九洞

えたり、  
たれか、まさに、供養せざらんや 眞金聚に恭敬せん  
たれか、佛を供養せざらんや 上妙の功德田なり  
その目ははなはだ脩廣なり なほ青蓮花のごとし  
なんじよく供養をおこすや 無上第一尊に  
すくなき功德業をなして しかも、かくのごとき容をうるぞ

このやうなわづかな功德によって、このやうな大果報があることを、譯者曇曜が、北魏の大衆によびかけてゐるごとくである。天女は華蓋をもって、しづしづと天よりくだり、釋迦牟尼佛のみまへにきて、その妙法をきいて、須陀洹果 (srotāpanna) をえた。

なほ『雜寶藏經』にはこの三話について、(1)「天女もと燃燈供養するをもって天にうまるゝの縁」(2)「天女もと乗車佛をみるをもって歡喜して道を避くるの縁」(3)「天女もと華をもって佛に散じ、化して華蓋になるの縁」といふ天女に関する相似た物語がまだ三つある。最後の因縁は華蓋に關係があるが、ほか二つは華蓋のことをいはない。いづれにせよ、この浮彫圖像の五人は要するに、この一連のはなしにみる天蓋供養の天女たちであらう。(第三層高 2.35m)

### Pl. 68 主室南壁東部第二層

上は蓮瓣文帯、下は波狀唐草文帯によってしきられてゐる。なかは二つの部分からなる。向つて左半は天蓋のものと佛立像。その左脇に二比丘が立ち、右脇したに就縛した人がをり、そのうゑに頂禮した二人の供養者がゐる。両手をしばられて立つ腰衣の人物は、その右脇にもう一人ゐたやうでもある。いま補修の泥でおほはれてゐる。向つて右半には佛殿があり、そのしたに三比丘僧がゐる。佛殿は中央の龕中に一坐佛が結跏趺坐する。左右に俗形の男女一對がたつ。それは型のごとく、男子は袴子、女子は下裳をつけ、そのうゑにコオトをつけ、うしろにたれのついた帽子をかぶつてゐる。うへは鴟尾のある屋根に帳幕がさがり、したには唐草の基壇に萬字くづしの欄杆と階がついてゐる。三人の比丘はかはいゝ顔をし、剃髪し、僧衣をつけてゐる。左右の二人は座具のうゑに安座し、なかの一人は跪坐合掌してゐる。このめづらしい圖像は、はたしてなにをあらはしてゐるのか。曇曜と吉迦夜共譯の『雜寶藏經』(大正大藏經、第四卷 p. 460) 卷三にある、「兄弟二人ともに出家する縁」といふはなしが、だいたいあてはまるかとおもふ。兄弟二人の比丘があり、兄は阿練比丘(Āraṇya)といひ、弟は三藏比丘(Tripitaka)といった。弟比丘はその國の宰相に

請はれ、その師僧となり、りっぱな僧房塔寺を造營した。それが畫面右うへの佛殿であらう。この寺の寺主に、弟は兄比丘を推薦し、兄比丘はこの寺主となった。したの三體のうち、左右は兄弟の僧、中間は召請にいったときの弟比丘であらうか。それとも宰相であらうか。これが物語の前段である。後段は宰相が兄比丘に高價な氈、弟比丘に粗末な氈をあたへたことから、弟比丘がねたみ、宰相の娘を手さきにつかつて、宰相と兄比丘とのあひだに悪辣な離間策をおこなつた。兄比丘はその讒謗を知ると、空中にとびあがり、身體を十八變したので、宰相はその夫人とともに兄比丘の足に禮しあやまつた。これが畫面うへに頂禮する人物であらう。その結果、その非行の弟比丘と宰相の娘とは國外に追放された。左したの手をくゝられてゐるのは追放された宰相の娘であらう。いま粘土でおきなはれてゐるところにも、おそらく追放された比丘がゐたかとおもふ。佛立像の左脇侍、水瓶をもってたつのは兄比丘の阿練であらう。うしろの比丘は弟の三藏であらうか。全般にきはめておだやかな彫刻である。個々の像にはさして注目すべきものがないにかゝらず、全體におちついた調子がそなはつてゐる。(第二層高 1.84m)

### Pl. 69 A,B 主室南壁東部第一層 拱額

第二層とのあひだを劃す唐草文帯は半パルメットを單位とし、その先端と末端とをしだいにつないで、波狀文にしてゐる。この洞で、さかんにつかはれた文様である。拱額の飛天は文様的になつてしまひ、それに應ずる蓮上化生も、ごくあさく文様的である。化生の蓮華座は大きく、大まかで、天衣も大きく左右になびいてゐる。(拱額高 0.30m)

### Pl. 70 A,B 北壁本尊

北壁は、どの窟でも水分による破損がはなはだしい。ここでも本尊は破損し、いまみるのは後世の泥像である。修理といつても、原形に頓着なくつくりあげるから、まったくみられたものでない。彎曲した後壁いっばいにひろがる光背の一部が、すこし残つてゐるのみである。たゞ倚坐の大佛であつたことは、そのやぶれた膝からみえる岩塊によつて、うたがふわけにはいかないし、その手の位置もだいたひ承認できるものであらう。それから頭高も心がのこつてゐるらしく、信用できるとおもふ。面相、耳のかたち、螺髮などは、みな後補である。足下には、第十六洞、第十八洞のやうなひくい蓮座があつたとおもふが、いまはうまつてゐるとともに、こはれてもゐるらしい。ちよつとした發掘では、た

しかめられなかった。(像高 9.60m)

Pl. 71 A,B 主室北壁 隧道入口

北壁の本尊左右わきからトンネルになってゐる。これで本尊のうしろをとほり、一周できる。こゝでも壁面ぜんたいに彫りものがある。主室のおくにトンネルをつくるのは、中央アジアのキジル石窟にも多い。そこでは整然とした構造で、各面に壁畫をえがいてゐる。この第九洞のトンネルも、もとづくところは中央アジアの石窟であらう。これによつて繞道の儀式 (pradaksīṇa) を修するのである。北壁のあれてゐる状態がよく知られる。(入口高 約 2.70m)

Pl. 72 主室西壁

西壁の全貌、それに天井の一部がみえる。まんなかから南が保存よく、北は破損がひどい。高さ 5.20m の右脇侍菩薩の光背も、南半分はたしかに残つてゐる。しかし、からだ、手足の補修は原形の面目をとどめない。脇侍の左わきの壁は、もはやなにももなく、近時の泥壁にすぎない。上下層の層序は南壁におなじである。(高 9.70m)

Pl. 73 主室東壁

東壁も、すっかり破損してゐる。高さ 5.30m の左脇侍菩薩の立像も、すべての點で後世のものである。寶冠すら、西壁の脇侍を模したゞけで、でたらめである。からだも手足も、もちろんだめ、光背もだめである。壁面の層序は、南壁からひきつゞいた三層と腰壁とである。けれども、いまはみるかげもない補修と破損のすがたである。(高 9.55m)

Pl. 74 主室西壁 右脇侍菩薩光背

右脇侍菩薩の光背は寶珠形である。いま南半だけが原形をのこしてゐる。三重の圓圈からなり、なかにはひらたい蓮華文、そとの二つはひらたい火焰文である。火焰文はふつうみるやうに、うちがかんたんな一條の焰の連続、そとが複雑な三條の焰である。にぎやかなうちに、力づよくたくましいものがある。光背のうへや、よこに西壁諸龕の裝飾がみえる。唐草文、蓮華文など、いづれもあさい浮彫である。(光背高 2.20m)

Pl. 75 A,B 主室西壁 右脇侍菩薩 寶冠

右脇侍菩薩の顔は補修が多く、いま全面が白堊でおぼはれてゐる。額とか、臉とか、口のまはりには、いくらか原形の想像されるものがある。それから、頭髮のうへはよく原

形をとどめ、華麗な寶冠をいたゞく。正面に二重の蓮華をかさね、なかに紐のかざりをたれ、うへに弦月形をのせる。側面には、べつに圓形のかざりを彫り、なかに巴文ふうな回旋文をつけ、そとにぎざぎざのついた輪をはめる。そして正面の蓮華との中間には、ふかい透彫ともいへる複合唐草文の裝飾をつくる。額髪のうへの環は冠の下縁である。うしろにまはつてしばられ、こゝにむすび目があり、また布片がたれてゐる。また耳朵につく瓔珞が、まがつた支柱のやうになつて肩にたち、その座に蓮華がある。(頭高 1.45m)

Pl. 76 主室西壁 第三層

南壁第三層下縁の蓮華文帯がつゞいて西壁までのびてゐる。うへには屋形龕、したには楣拱龕があるが、大きな光背が右にあるので、たゞしく上下にはならない。屋形龕は左右の柱に半パルメットの波状唐草文を彫り、軒にたるき、屋内に帳幕をたれ、そのしたに二體の高髻人物がゐる。この二人は、いまなゝめに坐し相對してゐるが、いづれも左手に鉢を奉じ、右手を胸にあてゝゐる。供養のすがたであらうが、屋内にひさまづくのはどういふわけであらうか。背後には大きな舟形の舉身光がある。屋外の左右には寶冠をいたゞいた菩薩の像がたつてゐる。

したの楣拱龕は横はゞひろく、拱額には蓮華と四出の三つ葉を交互におく。龕の柱には半パルメットの波状唐草がある。尊像は結跏趺坐でありながら、通肩でなく、衣端で右肩右腕をすっぽりとつゝんでゐる。補彩の舉身光があり、左右に合掌跪坐の比丘がゐる。この配置が、はなはだ特色あり、なにかの説話をあらはしてゐるらしい。

曇曜の『雜寶藏經』(大正大藏經、第四卷)のなかには一鉢の食を施して生天をえたり、福德をうる話が、しばしば説かれてゐる。そのひとつに「須達長者婦が佛に供養して報をうる緣」(卷二、p.459)といふのがある。スダッタ(Sudatta)(須達)長者が貧窮し、人にやとはれて、やつと三升の米をえた。長者婦が、それを炊いてゐたとき、アヌルダ(Anurudha)(阿那律)、スブッティ(Subhūti)(須菩提)、マハアカアシャバ(Mahā-Kāśyapa)(摩訶迦葉)、マハアマウドガリヤアヤナ(Mahā-Maudgalyāyana)(大目犍連)、シャリプトラ(Śāriputra)(舍利弗)、そして最後に釋尊までが、つぎつぎやつてきた。それでつぎつぎに布施して三升の米がなくなつてしまった。そこへスダッタがかへつてきた。それで、その妻はさつそく、もし尊者アヌルダがきたならば、みづから食すべきか、布施すべきであるかを夫にきいた。夫は、もとより、みづから食はずとも布施すべしとこたへた。それで婦は實をもつて

## 雲岡石窟第九洞

つげたが、夫はわれらの罪つきて祝徳まさに生ずべしとよろこんだ。はたせるかな、庫中には布帛飲食が充満し、いくらつかっても盡きることはなかつた。上の屋中に跪坐し、鉢をもつものは、二人とも婦人のごとくであるが、二人ならんでみるから長者夫妻かも知れない。したは供養をうけた釋尊とその弟子たちであらうか。

しかし、また、かういふ話（巻四, p. 469）もある。梵志四人の兄弟が歡喜鬘子をつくり、つぎつぎ佛の鉢中に供養し、それぞれ「諸行無常」「是生滅法」「生滅滅已」「寂滅爲樂」の偈一句づゝをきき、つひに阿那含果 (anāgāmin) をえ、さらに出家して阿羅漢をえたといふ。(第三層高 3.30 m)

### Pl. 77 A 主室 西壁 第二層

#### B 主室 西壁 第一層

A. 南壁西部第二層の楯拱龕の左翼がこの壁にあらはれてゐる。左端に側面形で本尊坐佛がみられ、これに供養する八體の天人が二層になってひさまづく。これは南壁にみられた高髻の跪坐像 (Pl. 63 B) と相照應する。楯拱の框内には複合唐草文のほか、四葉の蓮華文がある。(第二層高 1.70 m)

B. 南壁西部第一層の屋形龕の左翼がこゝまでのびてゐる。南壁の西隅において、たてにたれた帳幕があり、これによって南壁の龕と區別されてゐる。むかつて左端に見える二段の合掌供養者たちは南壁の像である。それについて頭の缺けた合掌の倚坐像がある。ちょうど本尊の方にむかひ、この場合に大切な役割をもつらしい像だが、惜しいことに頭が破損し、どんな像であつたかあきらかでない。西壁の中央には、ひくい五成の座にかけた交脚菩薩があらはされ、大きな圓光をになつてゐる。顔はあれてゐるが、頭には寶冠をいたゞく。なで肩で胸に種々の胸飾をたれてゐる。右手は胸にあげ、第二指をうへにむけて立てゝゐるのは象徴的である。この右手と對照的に、左手は手首をたれてゐる。この交脚菩薩は、おなじ屋下にある鬼子母神像と、どんな関係にあるのだろうか。あるひはこの交脚菩薩だけべつの龕をつくるつもりであつたのだろうか。いま決しがたい。本尊の左脇には二段になつた二體づゝの高髻合掌の跪坐像があり、右脇に合掌の供養者がゐる。この下縁に蓮華文帯があり、そのあたりに、あとから追刻した小さい坐佛の龕がみえる。(第一層高 2.00 m)

### Pl. 78 主室 上層 西南隅

これで南壁と西壁との關係がよくわかる。西壁最上層と天井との破損を知ることができる。西壁と南壁との隅にのこされた、わづかの空所に、いくつかの蓮華文を彫つてゐる。この石窟では、あちこちの空白に、あさい蓮華文を彫るのがつねである。(第三層高 2.60 m)

### Pl. 79 主室 第二層 西南隅

南壁と西壁とにわたる第二層の楯拱龕と、第一層の屋形龕のぐあひが、よくわかる。ほかの石窟にはないめづらしい構造で、よこ幅のひろい莊大さをたくみに表現してゐる。左右には跪坐像がむらがり、さかんな眺めである。(第二層高 1.80 m)

### Pl. 80 主室 天井

したに南壁上層と明窓がみえ、むかつて右に西壁、左に東壁、うへに本尊の顔と手と膝がみえる。各壁の上縁は三角垂飾によって區切られ、そのうへに折りあげになつた天井部があり、こゝには飛天が雁行してゐる。北壁本尊の頭上には大きな圓弧がみえるが、これは天蓋の縁(幅 0.45 m)である。天蓋内の天井には瓔珞をもつた天人が上身をのりだしてならんでゐる。その他の天井主要部は折りあげ格天井になつてゐる。左右二隅から隅梁がで、すこしもちあがりながら、東西にながし梁(幅 0.50 m)をさゝへてゐる。そのながし梁が、西、東の梁と交叉するところに徑 0.60 m 大蓮華がある。東と西の梁(幅 0.40 m)は、こゝから北にのびて、すぐ本尊の天蓋につきあたる。ながし梁には雁行する天人をみるが、折りあげ部の梁には、立ちあがつたやうな飛天を一體づゝおさめてゐる。その梁間には、それぞれ安坐した神像がある。多面多臂の神像である。ながし梁の中間には三つの梁がとほり、四つの格間をつくつてゐる。梁の上には、またむきあつた飛天がゐる。四つの格間はそれぞれ隅がけに井桁を組んで持送り天井となり、そのまんなかには六瓣乃至七瓣の大蓮華を彫つてゐる。いまこゝにみる梁形は、どれもたかく凸出してゐない。たゞ、すこしたかい框縁をもつてゐるにすぎない。(東西長 8.50 m)

### Pl. 81 A, B 北壁 本尊 天蓋

北壁本尊の頭上にある天蓋は、正面圓弧をえがき、背後は光背に接してゐる。正面は欄間のやうに框ぐみになつて、框のうちには一體づゝ飛天を彫つてゐる。そしてその飛天は、みな中心にむかつて左右からとんでゐる。框ぐみの下にたれさがつて折りたゞんだ布帛がある。この布帛の部分

は、ひどく破損してゐるが、もとは下ほどうすくつくつてあつたことがわかる。天蓋の天井には、ながい瓔珞をもつた天人が五體ばかりすがたをあらはしてゐる。蓋の中心の方に頭をむけた上半身像である。顔はほとんど破損するが、瓔珞をもつた手つきは中央に對しシムメトリックに配置されてゐる。そして、その五體の中心像の頭上にあたり、本尊の大光背が、その先端をあらはしてゐるのである。(天蓋東西徑約 6.40m)

Pl. 82 主室天井南部梁間(5,6)

天井の南部、折りあげの部分である。上の一列は東西にわたる梁に相當し、一端に六瓣蓮華文がある。しかし、折りあげの支輪にあたるものはふとく、まさに梁のごとくである。たゞその梁の形が變形し、せまい框縁になつてゐるが、この洞窟の特例である。したがつて第七、第八洞の天井とかなりちがひ、またこの前室の天井ともちがふところである。上のながい梁と下のなげしうへとに、左右から相むかふ飛天の列がある。前者はみな高髻形の飛天であるが、後者は高髻形と逆髻形とを交互に配してゐる。折りあげの梁にも、とびあがつたやうな飛天を一體づゝいれ、その梁間にはいづれも多臂の神像をすわらせてゐる。床上10.00mのたかい天井に、なんといふ豪快な彫刻をつくつたことであらう。飛天はからだを、おもひきりのばして飛び、壁をはなれてとびだしさうな勢である。多臂像も力づよい。豊満な身體には傲慢といつていゝほどの落着きがある。浮彫の効果としては背面がかなりふかく、黒々とした影がふかい印象をあたへる。天井の風化も、さうたうにはなほだしいが、こゝには側壁のごとき補彩がないから、原形がいきいきと感ぜられる。

こゝに見える梁間(6)の神像は高髻の丸顔で、耳が鱗のやうになつてゐる。手は四本、胸にあげた手に蓮の蕾のごときものをもつてゐる。肥満した身體は、どつしりとあぐらをかいてゐる。(格間高 0.80m)

Pl. 83 主室天井南部梁間(4,5)

前圖の東方につらなる梁間(4)と(5)である。むかつて右の梁間(4)はひさまづいた、なゝめむきの神像である。おなじく肥満し、腹をつきだしてゐる。手は四本、頭髮はさかだつてゐる。(梁間高 0.80m)

Pl. 84 A 主室天井南部梁間(6)

B 主室天井南部梁間(3)

A. Pl. 82と同じ西南梁間(6)の三面六臂の神像である。中央は高髻、左右は三角帽をきてゐる。脚部は破損するが、梁間(3)のごとく、脚をだしてどつかとすわつてゐる。胸にあげた左手になにか小さいものをもつてゐる。いづれもインド在來の雜神であらう。こゝからは梁間(7)の神像がわづかにみえる。六臂の右手に日輪のやうなものをさゝげてゐる。(格間高 0.80m)

B. 東南の格間(3)である。惜しいことにひどくいたんでゐるが、やはり三面六臂の神らしい。その點、西南の格間のものに照應してゐる。右脚をだし、左脚を折つて、どつかとすわつてゐる。胸の左手はなにかもつてゐたであらう。ふりあげた第三の左手にも、なにか小さいものをもつてゐるが、その他にこれといふもちものはない。(格間高 0.80m)

Pl. 85 A, B 主室背後隧道

A. 本尊背後の隧道内に立つて、東部をのぞんだものである。つきあたりは隧道の東壁、右手にみえるのは隧道南壁、つまり本尊の背後にあたる。これは、ひどくいたんでゐる。(高 2.70m)

B. 圖Aと逆に西部をのぞんだもの。トンネル内の壁面のあれた状態がよくわかる。天井はもつとも破損がひどい。圖版の右がは北壁である。壁のたかいところに蓮瓣帯が一周してゐる。天井には飛天と蓮華を彫るが、その下の欄間やうのところには飛天をうめ、したの腰壁には供養者の列像がある。それは北壁中心から左右に、それぞれそとをむいてならんでゐる。そのむかし、この隧道を右繞した供養者たちの蹻音が耳朶にひどくおもひがする。

Pl. 86 A, B 主室背後隧道北壁

隧道の北壁、その東端(B)と西端(A)とである。みるごとく、供養者の行列である。西端からいへば僧形が三、つぎはみな婦人の供養者である。手に手に蓮枝をもつてゐるらしい。東端からいつても僧形が三、その他はみな男子の供養者である。手に手に蓮枝をもつてゐる。この上部半パルメット並列文帯のうへに飛天の雁列がある。ボウズはすこしづゝ、ちがつてゐる。そのうへが蓮瓣文帯、さらにその上部は天井で、すこしかアヴする。こゝにまた飛天の雁列をみる。それからうへは破損がひどく、よくわからないが、要所要所に蓮瓣文があるらしい。(壁高約 2.50m)

Pl. 87 A, B, C 主室背後隧道北壁中央部

A. ちやうど中央部にある飛天の浮彫である。表面はあ

## 雲岡石窟第九洞

れてゐるが、そのいきいきした肢態をみよ。

B. そのしたにある佛龕である。うへに天蓋、したに方臺を刻し、その左右に供養者のあさい浮彫がある。中尊は結跏趺坐、擧手の佛像で、火焰の光背がやゝのこつてゐる。光背のふちは火焰、うちは半パルメット並列文。うすぐらい隧道のおくに、このやうな彫刻を發見したときは、こゝまで彫りすゝめていった、かれらのはげしい造形意欲にふか

い感銘をうけた。

C. そのしたにならぶ三人の供養者がある。みな袴子の男子像らしい。どういふわけで、こゝに一まはり小さい三人像を彫つたのか、これがなにを意味するのか、はっきりしない。よくみると、このうへ、佛龕方臺の左右に、なにか安坐の神像があつたやうにみえる。(龕高 1.30m)